



第 91 号

公益財団法人 特攻隊戦没者慰霊顕彰会  
 〒102-0073 東京都千代田区九段北 3-1-1靖国神社遊就館内・地階  
 電 話 03 (5213) 4594  
 F A X 03 (5213) 4596

http://www.tokkotai.or.jp  
 振替口座 00140-6-59580

編集人 飯 田 正 能  
 発行人 羽 淵 徹 也  
 印刷所 ヨシダ印刷株式会社

目 次

|                       |    |                          |    |
|-----------------------|----|--------------------------|----|
| 第33回特攻隊合同慰霊祭          | 1  | 3月10日と3月11日              | 12 |
| 特攻隊戦没者慰霊祭における奉納演奏を終えて | 6  | 第41回萬世特攻隊慰霊碑慰霊祭に参列して     | 18 |
| 追悼 山本卓真名誉会長           | 7  | 海軍飛行予備学生                 |    |
| これからの「特攻隊戦没者慰霊顕彰」について | 10 | 第十四期生の戦い                 | 20 |
|                       |    | 「菊池よ永遠に幸あれ」              |    |
|                       |    | —原田葉少尉の絶筆—               | 24 |
|                       |    | 特集・特攻インタビュー(第7回)         |    |
|                       |    | 海軍航空特攻 野口 剛氏             | 27 |
|                       |    | 陸軍四式戦闘機(疾風)模擬爆装          |    |
|                       |    | 飛行体験について                 | 45 |
|                       |    | 新刊図書紹介                   | 47 |
|                       |    | 平成24年度第1回定時理事会、定時評議員会等報告 | 48 |
|                       |    | 事務局からの報告等                | 51 |

第33回特攻隊合同慰霊祭

平成24年3月24日(土) 11時～12時  
 於 靖国神社拝殿・本殿

式 次 第

国歌斉唱(トランペット田櫛雅之)  
 修祓 献饌(サキソフォン鈴木隆春)

祝詞奏上

祭文奏上 理事長 杉山 蕃

献 吟 一誠流 石橋 一歌

笛 逢坂 龍信

奉納演奏

特攻慰霊混声合唱団「祈り」

指 揮 大穂 孝子

「土の歌」(大木惇夫作詞、佐藤 眞作曲)より

「祖国の土」「大地讃歌」

斉 唱(全員)「海ゆかば」

(トランペット・サキソフォン 吹奏)

昇殿参拝 参列者一同

(トランペット「国のしずめ」)

(トランペット「国のしずめ」)

献 吟 石橋 一歌

笛 逢坂 龍信

昭和19年12月4日スリガオ海峡で戦死 石腸隊 大井 隆夫

よしやよし世をさるとてもわが心

御国のためになお尽さばや

菊水一号第一正統隊 山内 文夫

昭和20年4月6日沖繩北中飛行場沖で

戦死

若桜美しく散りて国のため

錦をば着て故郷へ帰る

錦をば着て故郷へ帰る

## 祭文

本日ここに靖國神社の御社頭に、御来賓の皆様、御臨席と御遺族、戦友、そして関係者の皆様が集い、第33回特別攻撃隊合同慰霊祭を挙行するに当たり、謹んで在天の御英霊に申し上げます。

戦いが終わり、既に67年の歳月が流れんとしております。この間皆様は全てを擲って支えんとした、我が国の生存と繁栄は、戦友・朋友・同輩の方々の努力により、奇跡とも言われる見事な復興・発展を成し遂げて参りました。しかしながら、大戦前後の苦衷、全てを失った極貧状態を知り尽くし、そこから立ち上がった方々の老齢化とともに、我が国は、相対的に発展の速度を鈍らせ、大変な難局を迎えつつあります。また、この間、我が風土・民族が営々と築

き上げてきた、誇るべき伝統・風習・社会規律を失い、軽薄・利根的快楽を求める憂うべき社稷に成り下がってき

たことも、残念ながら事実であります。加えて、昨年3月11日、我が国は、東北東部を中心に、未曾有の大震災の被害を受けました。のみならず、原子力発電所事故による大規模な放射線被害という二重の大災害に見舞われ、既に1年を経た今も復旧は遅々とした状態にあります。この大惨事を機に、国民等しく原点に立ち返って、今後の我が国が如何にあるべきかを真摯に検討すべき時機にあります。そして、この

ような時こそ、67年前、先輩達が味わわれ、究極の行動に至った情勢を、そして、その心情を忖度し、今一度我々は奮い立ち、世界に誇れる復興を成し遂げなければなりません。顧みれば、我々人類の壮大な歴史は、一に自然の克服、災害との戦いの連続であり、これを乗り越える努力の過程で、進歩を

続けてきたものであることに想いを馳せる必要があります。災害に屈せず、これ乗り越えていく勇氣と行動が今こそ真に必要とされており、どうか在天の皆様方、絶大な御加護を賜らんことをお願い申し上げます。

また昨年は、英霊方の慰霊事業の体制に変化がありました。公益法人制度の改革により、我々の組織は、公益財団法人特攻隊戦没者慰霊顕彰会として新しく出発をいたしました。そして僅かに1年、我々は、長年にわたって重任を果たされて参られました、山本卓真会長を失いました。まだまだ慰霊事業全般に熱意を持ち続け、様々な役に励んでおられた状況に鑑み、唯々残念の感を、強く、強く持つものであります。山本会長の御逝去は、単に偉大な個人の喪失に留まらず、この60年余の長きにわたって粉骨碎身、今日我が国を作り上げてきた世代を失って

いくという重大な転機の象徴であり、また、慰霊事業においても、その中核となつて「誠」を守つてこられた戦友世代の喪失という厳しい現実の表象でもあります。

私も後輩に当たる世代は、国家存亡の危機に際し、生命を擲つて国に尽くされた英霊の皆様、御心情と、残された戦友の方々の、復興への偉大な努力、そして営々と続けられた慰霊事業への誠の心を、尊敬の念を持つて継承し、後世に伝えていくことこそ、課せられた務めと心に刻んでいるところであります。世代交代の現実には極めて厳しいものではありますが、微力を尽くす決意を改めてここに奏上し、祭文と致します。

平成24年3月24日

公益財団法人

特攻隊戦没者慰霊顕彰会

理事長 杉山 蕃



慰の誠を捧げた。

3月24日(土) 11時より靖國神社において、当顕彰会恒例の第33回特攻隊合同慰霊祭が厳粛に斎行され、御遺族

28名を始め来賓、戦友、一般会員等合わせて230余名が参集して、英霊奉

け降る中ではあったが、それだけに、

昨年の大震災、大災害の犠牲者や被災者にも想いを致しつつ、国難に殉じた

御英霊に御加護を願ひ、復興・再生への誓いを新たにするに相応しい、峻厳の氣に満ちた雰囲気の中での慰霊祭であった。

また、この日、靖國神社遊就館前の「特攻勇士之像」には生花が供えられ、

冷雨の中、寒風に飛行帽を靡かせ、遙か南の空をきつと見上げつつ、決意の程を眉宇に漲らせ、しっかと大地を踏み締めて立つ若武者の姿に、一人の感動を覚える。国家存亡の危機に際し、

何ものをも怖れず、怯まず、只一筋に



国歌斉唱



祭文奏上 杉山理事長



献吟 石橋一歌・逢坂龍信両氏

征く若き特攻隊員の勇姿を真に良く表している。この像の原型の製作者は、彫塑界の大御所で、文化勲章受賞者の北村西望氏であり、その原型に基づき、日本芸術院会員北村治禧氏の監修により日展会員石黒光二氏が制作したもので、平成11年3月23日、当会から当時の瀬島龍三会長以下会員等63名、神社側からは湯澤宮司以下の出席を得て除幕式を行ったものである。更にまた、台座表面の銅板に「特攻勇士之像」と刻まれた銘文の揮号者は、日本画壇の重鎮で、平成18年に文化勲章を受章された大山忠作画伯であり、同画伯は、昭和18年に学徒出陣のため、東京美術学校（現東京芸術大学）を繰り上げ卒業して入隊、特別操縦見習士官（3期）となり、台湾で終戦を迎えた方であり、靖國神社の大野俊康元宮司（第7代・平成4年（9年）とは特操同期生で、同元宮司の仲介によって揮号を引き受けられた経緯があり、大野元宮司と共に当会とは極めて縁の深い方である。また折しも、靖國神社・遊就館1階の企画展示室では、平成24年度特別展「大東亜戦争開戦七十年展」が開催（平成24年3月10日（12月9日））されているが、同特別展開催に際しての京極宮司の挨拶文（別掲）中に、大東亜戦争開戦に至る経緯、当時の国際情勢等が簡明に記されており、特に開戦に当たり、時の軍令部総長永野修身海軍大將が述べたと伝えられている「戦うも亡国、戦わざるも亡国ならば、戦って九死に一生の活路を求めしかありません。戦わずして招く亡国は、心の底まで亡びる永久の亡国になります。護国のために最後の一兵まで戦い抜いた亡国は、必ずやわれらの児孫が受け継いで再起するでありましょう」という言葉に強い感銘を受けた。

合同慰霊祭は、トランペットの伴奏による国歌斉唱に始まり、修祓・献饌・祝詞奏上の神儀に続き、杉山理事長が祭文（別掲）を奏上、「戦後67年の歳月が流れる中で、戦後の我が国の復興と発展を担った先輩方の高齢化とともに、我が国は、相対的に発展の速度を鈍らせ、大変な難局を迎えつつある。加えて、昨年3月11日、東日本大震災と福島原発の事故に見舞われ、その復旧・復興も遅々として進まぬ状態にある。この大惨事を機に、国民等しく原点に立ち返り、67年前、先輩達が味わわれ、究極の行動に至った情勢とその心情を忖度し、今一度奮い立って、世界に誇れる復興を成し遂げなければならぬ」と述べ、また、長年にわたる、会長・理事長として重任を果たしてこられた山本卓眞名誉会長の御逝去のことに触れ、「その御逝去は、単に偉大な個人の喪失に留まらず、この60年余の長きにわたり、粉骨砕身、今日の我が国を作り上げてきた世代を失っていくという重大な転機の象徴であり、慰霊事業においても、その中核となって「誠」を守ってこられた戦友世代の喪失という厳しい現実の表徴でもある」と述べ、更に「国家存亡の危機に際し、生命を擲って国に尽くされた英霊の御心情と残された戦友の方々の復興への偉大な努力、営々と続けられた慰霊事業への誠の心を、尊敬の念を持って継承し、後世に伝えていくことこそ我々の務めと心に刻んで努力して



献歌・特攻慰霊混声合唱団「祈り」指揮 大穂孝子氏

いくこと」を誓った。

献吟の声は、朗々として神前に木霊し、惻々として胸に迫る。今回から登場した特攻慰霊混声合唱団「祈り」による献歌（大木惇夫作詞、佐藤 眞作曲「土の歌」より「祖国の土」「大地讃歌」）また、力強く胸を打つ。最後は、寥々と響くトランペットの伴奏に合わせて、一同「海ゆかば」を唱和する。

◇ ◇ ◇



「海ゆかば」斉唱

平成24年度特攻隊合同慰霊祭懇親会

平成24年3月24日（土）

12時30分～14時30分

於私学会館・アルカディア市ヶ谷3階「孔雀の間」

開会の辞（司会）

事務局長 羽瀨 徹也  
理事長 杉山 蕃  
専務理事 藤田 幸生  
専務報告 専務理事 藤田 幸生  
感謝状贈呈 受贈者

トランペット奏者 田槽 雅之氏  
サクソフォーン奏者 鈴木 隆春氏  
来賓紹介 事務局長 羽瀨 徹也  
乾 杯 来賓代表 堀江 正夫



トランペット・田槽雅之氏 サクソフォーン・鈴木隆春氏

懇談会食  
全員斉唱「海ゆかば」

トランペット 田槽 雅之  
万歳三唱 来賓代表 菅原 道之  
閉会の辞 専務理事 藤田 幸生

慰霊祭終了後、私学会館・アルカディア市ヶ谷に移動し、同会館3階の「孔雀の間」において、懇親会が開催された。

懇親会に先立ち、まず杉山理事長が挨拶に立ち、特に山本卓眞名誉会長の御逝去のことに触れ、戦後の我が国の復興を支えた世代を失っていくという

重大な転機象徴であるとともに、慰

霊事業の中核となって誠を尽くしてこられた戦友世代の喪失という厳しい現実の表徴でもあるが、我々後輩に当たる世代が、先輩方の遺志を継いで日本の復興・再生と慰霊事業への誠の心を継承していかなければならない、と強調した。

次に、今回から公益財団法人移行に伴い、定款上総会の規定はなくなりましたが、この機会に、当会の運営状況を会員に広く周知し、御支援、御協力をお願いするため、藤田専務理事から平成23年度の事業報告と平成24年度の事業計画等について説明があり、引き続き、「特攻勇士之像」の全国護国神社への奉納事業を更に推進させたい、と述べた。

次いで、これまで10年余の長きにわたり、各種慰霊祭で演奏を奉仕され、当会の慰霊活動に貢献されたトランペット奏者の田槽雅之氏とサクソフォーン奏者の鈴木隆春氏が今回の演奏をもって退任されることとなったので、その御功績に対する感謝状の贈呈が行われた。

続いて、懇親会に移り、羽瀨事務局長から来賓並びに当会役員の紹介がなされ、来賓を代表して、英霊にこたえる会名誉会長堀江正夫氏（陸士50期）の力強い音頭で献杯をした後、和やか



感謝状贈呈・トランペット奏者 田櫓雅之氏



杉山理事長挨拶



感謝状贈呈・サクソフォン奏者 鈴木隆春氏



藤田専務理事会務報告



万歳三唱 菅原道之氏



献盃 堀江正夫氏



特攻慰霊混声合唱団「祈り」

昨年、我が国が、民族の生存を賭け、死力を尽くして戦った大東亜戦争の開戦より七十年という節目の年でありました。

大東亜戦争は一般的に、真珠湾攻撃からはじまったように言われますが、なぜ日本はこの戦いに挑まなければならなかったのでしょうか。開戦に到る

ご挨拶

**特別展「大東亜戦争開戦70年展」**

◇ ◇ ◇  
(飯田正能記)

た特筆に値することであった。

なお、この懇親会には、慰霊祭の受付業務や案内等のボランティア活動を引き受けてくれた若い有志グループや学生達も参加し、各テーブルでは、特攻について、あるいは日本人の心や教育について語り継ごうとする老兵達の話に熱心に耳を傾けていた。これもまた

な直会の宴は始められた。途中、今回より登場した特攻慰霊混声合唱団による「土の歌」の合唱が再び披露されるなどして大いに盛り上がったが、最後は、来賓を代表して、福岡借行会会長菅原道之氏（陸士57期）の力強い音頭で、聖寿万歳を三唱して会を締め括った。

までの過程を知ることが大切でありま  
す。そこには十五世紀の大航海時代以  
降、幾百年に亘る欧米列強によるアジ  
アの植民地支配があり、十九世紀末、  
独立を保ち得ていたのは、日本とタイ  
だけという長い時代背景の中に開戦の  
要因があるからです。このような世界  
情勢の中で、日本は明治維新以来、近  
代国家を建設するために、懸命の努力  
を続けました。

しかし、日清戦争、日露戦争に勝利  
して列強の一つになったことで、事毎  
に欧米列強との軋轢が生まれました。  
時は越えて昭和の時代になると、全

## 特攻隊戦没者慰霊祭における 奉納演奏を終えて

○トランペット奏者 田槽 雅之

私が特攻隊合同慰霊祭のトランペッ  
ト献奏に携わってから、今年で丁度10  
年となりました。初めて靖國神社の拝  
殿に立った時の張り詰めた緊張感は、  
今でも鮮明に覚えております。まるで  
時が止まってしまったかのような静寂  
の中でトランペットを鳴らすと、日本  
のため、愛する家族や友のために散華さ  
れた御英霊と、参列された御遺族や戦  
友の方々との思いを繋ぐ架け橋となっ  
たような不思議な感覚にとらわれます。

ヨーロッパが戦場となる第二次世界大  
戦が勃発しました。

またアジアでは支那事変が発生し、  
国民政府が米・英・ソ連などの援助を  
受け、事変は長期化しました。事変の  
長期化に伴い、米国の世論、議会では  
日米通商航海条約の破棄など対日制裁  
の強化が行われましたが、特に石油禁  
輸は決定的でした。

日本政府は、米国との戦争を回避す  
るため昭和十六年四月から日米交渉を  
行いますが、同年十一月二十六日に米  
国側より最後通牒となる「ハル・ノー  
ト」が突き付けられたため、開戦止む

こうして月日を重ねた今でも、それ  
は変わることなく、本年はあいにくの天  
候ではございましたが、雨音に囲まれた  
中での「海ゆかば」の響きに、奏者自  
身も身の引き締まる思いでございました。

私たちの慰霊献奏は、これで最後と  
なりましたが、これからも御英霊への  
感謝の気持ちは忘れません。長い間、  
このような大役をお任せくださった関  
係者の皆様、そして御遺族、戦友の方々  
と御英霊に心より御礼を申し上げます。  
有り難うございました。

○サキソフオーン奏者 鈴木 隆春

これまで、慰霊祭において、奉納演  
奏の機会を賜り、誠に有り難うござい

無しとの決意に到ります。

時の軍令部総長永野修身大将は「政  
府の情勢判断は戦いを避ければ亡国、  
統帥部の判断は戦うも亡国ですが、戦  
うも亡国戦わざるも亡国ならば、戦っ  
て九死に一生の活路を求めろしかあり  
ません。戦わずして招く亡国は、心の  
底まで亡びる永久の亡国になります。  
護国のために最後の一兵まで戦い抜い  
た亡国は、必ずや我らの児孫が受け継  
いで再起を期するでありましょう」と  
述べたと伝えられています。

その言葉からも、日本が開戦に踏み  
切った余儀なき事情、脈々と受け継が

ました。また、過日は皆様より身に余  
る御厚情を賜り、御礼申し上げます。  
初めて慰霊祭で演奏させていただい  
たのは、10年前のことと記憶しており  
ます。当時から世田谷区民吹奏楽団に  
所属していた私は、大穂孝子先生にお  
声掛けいただき、楽団の仲間と共に慰  
霊祭に参加させていただきました。

初めて靖國神社の拝殿で演奏したこ  
とをよく覚えております。また、「海  
ゆかば」、「ふるさと」など、参列者の  
皆様と共に御奉納した演奏では、英霊  
の皆様に対する慰霊の気持ちで、胸が  
一杯になったことが思い出されます。  
私は、明治初期の海軍に関する歴史

れてきた祖国防衛の精神、更には国家  
存亡をかけて臨んだ先人達の覚悟の程  
が理解できるものと思えます。

この特別展では、昭和十六年十二月  
八日の大東亜戦争開戦から翌十七年五  
月までの日本陸・海軍の「進行作戦」  
の史・資料と、この作戦で雄々しく散  
華された数多の英霊の御遺書、御遺品  
を公開展示し、その殉国の至誠を顕彰  
するため、企画致しました。一人でも  
多くの方々にご参観戴きたいと願って  
おります。

平成二十四年三月十日

靖國神社宮司 京極 高晴

研究を志し、大学院で研究に従事して  
おります。慰霊祭で参列者の皆様と共  
に社殿に顔き、当時を経験された皆様  
の貴重なお話を伺ったことは、自分の  
研究においても、歴史を深く知り、当  
時と向き合うことの大切さを改めて感  
じることとなりました。慰霊祭での奉  
納演奏は、楽器演奏者としての経験と  
ともに、自分自身の歴史研究に対する  
姿勢にも大きな影響を与えたものと考  
えております。

今回、奉納演奏の担当を代わって  
ただくこととなり、当時を知る方々、  
当時の歴史の流れを汲む方々に、  
慰霊顕彰の流れが引き継がれていくこ



追悼 山本卓眞名誉会長

夢をかたちに

山本卓眞

叙従三位・勲一等瑞宝章 山本卓眞

お別れの会 平成24年3月9日(金) 12時～13時  
帝国ホテル本館2階「孔雀の間」



理事長 杉山 蕃  
本年1月17日、我々は山本卓眞名誉会長を失いました。日頃の健康状態から、まだまだ自分の御活躍を頂けるものと信じておりました矢先の急逝で、残念の極みであります。会長とのお付き合いは、ここ20年程になります。が、発端は、現役時代、市ヶ谷台の「陸軍航空碑」奉賛に係る航空自衛隊の御支援に関連したことに始まったと記憶しております。以降、同台経済懇話会、つばさ会、RIPS、偕行社の関連行事、そして特攻隊戦没者慰霊平和祈念

○山本卓眞名誉会長を偲ぶ



感謝状贈呈・田樽雅之氏



感謝状贈呈・鈴木隆春氏



最後の演奏

とを嬉しく思っております。これまでの10年間、甚だ拙い演奏ではございましたが、奉納演奏の機会を与えていただいたことを感謝するとともに、今後新たにしてまいります。最後に、皆様より頂きましたこれまでの御厚情に、改めて感謝申し上げます。10年という長い間、誠に有り難うございました。特攻隊戦没者慰霊顕彰会の御発展を祈念いたします。

協会理事等沢山の場で御教導を頂き、その高い人格と強い信念に深く尊敬の念を抱いております。会長は大正14年のお生まれで、当時の代表的青年らしく、名門教育大付属から名古屋陸軍幼年学校を経て、陸士58期生として陸軍航空士官学校を卒業され、満洲で、パイロットとしての急速練成中終戦を迎えられました。挫折の日々を送りながらも、再び立ち上がって東京大学第二工学部電気工学科へ入学され、卒業後富士通信機製造株式会社（昭和42年富士通株式会社に改称）へ入社、集積回路大型計算機の開発で活躍され、取締役としては「富士通中興の士」と言われる実績を残されたことは、皆さん御承知のとおりであります。体躯は決して大きい方ではありませんが、鋭い「鷹」を思わせる飛行機乗り特有の眼光、そして時折見せられる柔和そのものの表情、今思い出せば、懐かしい限りの大きな存在でした。

再生の中核として活躍し、厳しい環境下に逞しい勤勞意識により、「奇跡の復興・発展」を成し遂げたということがあります。筆で言うのは簡単ですが、文字どおりの焼け野原、呆然とした失意の極、社会規律の弛緩、風紀紊乱、食糧欠乏といった貧困の極致から立ち上がったエネルギーは、実際に修羅場を耐え抜いた人達のみが有する凄さがあつたと考えております。正に山本会長は、この世代の代表であり、その活躍の道程は、時の流れと共に、伝説化されるであろう存在であります。今日、東北地方の地震津波災害、放射線災害に際し、およそ1年、復興が遅々としている状態は、「破滅・貧困の極致」を知らない、豊穡の世に育つた世代の、「右往左往」と見えるのは、致し方ないかも知れません。

さらに私は、生存された軍人の方々の、戦没者に対する慰霊の活動に、そしてその心根に、大変感激を受けて参りました。私どもの世代から見れば、戦没者慰霊、中でも特攻隊戦没者の慰霊・顕彰は、国民的な盛り上がりの中で、国民に深く継承されていくべきものであります。しかるに現実には、旧軍人、遺族といった限られた階層の人々の純粋な心で受け継がれてきたに過ぎない気がいたしております。その陰には、戦争責任を全て引き受け、言い訳をしなかった旧軍人の方々の潔さを見ると同時に、それをよいに横行した反戦・反軍、そして行き過ぎた左翼的症候群とも言える社会情勢がありました。このような社稷の中、大正生まれを主力とする軍籍を有した方々の、戦没者に対する慰霊・顕彰への誠意は、強く私どもを感動させるものがありました。その中心にあつたのが、瀬島龍三、山本卓眞両会長を始めとする心ある軍人の方々でありました。

今、山本会長を失った私たちは、単に嘆き惜しむだけでなく、実にこの70年、激動の我が国の中心となつて生き抜き、見事に復興、発展させた世代の去つていく現実を深く認識し、残されたこの国を何とか恥ずかしくない形で継承していくことが、後に続く者の責務と心得、奮い立たなければなりません。偉大な存在が去つた後、たとえ微力であっても、心を受け継ぎ、奮い立つ事こそ最大の供養と申せましょう。会長の残されました、今後我々を勇気付けてくれるであろう様々の思い出に感謝申し上げ、その偉大な生き様に改めて最大の敬意を表し、重ねて御冥福をお祈り申し上げて追悼の辞といたします。

○さようなら山本卓眞さん  
顧問 菅原 道照  
山本卓眞さんが亡くなられた。昭和20年7月1日、最後の陸軍正規将校陸航士58期）として少尉に任官、戦後は富士通株式会社に職を奉じ、社長・会長・名誉会長の要職を務められ、傍ら借行社、同台経済懇話会、日本会議等各種公益団体の会長・副会長として活躍され、特に瀬島龍三さんの後を継いで、当顕彰会の会長として、特攻隊戦没者の慰霊顕彰に多大の貢献をされた。

諸先輩方が殆ど亡くなられて、これからリーダーとして益々の御活躍が期待されていたので、この度突然の訃報に接し、痛惜の念に耐えない。

山本卓眞さんの二歳年上の卓美さんは、仙台陸軍幼年学校復興1期・通算41期を経て、陸軍航空士官学校を卒業（56期）されて、昭和18年に任官された。筆者は、昭和17年4月1日、仙台陸軍幼年学校に46期生として入校したが、半月も経たない頃、陸航士56期生の集會が仙台で開かれた機会に、仙幼出身の先輩数名が母校を訪問された。

在校生一同は、学校敷地の半分を占める三神峯台上に、一人一人の先輩を車座になって囲み、胸をときめかしながら話を拝聴した。山本卓美さんもお



られた筈である。

昭和19年の12月5日か6日、学校当局から、山本卓眞さんが、1期後輩の二瓶秀典さんと、原ノ町飛行場から南方面に出撃するに当たり、母校を訪問飛行するとの連絡が入り、正午近く在校生全員授業を中断し、学舎北側の廊下から身を乗り出して待つうち、仙台市の南方、東西に連なる八木山丘陵すれすれに2機の二式複座戦闘機が姿を現し、北から南に3回学舎上空を飛び、特に3回目は翼が学舎2階の屋根をこすのではないかと思われるほどの低空で、大きく翼を振りながら、遙か南方の空に機影を没した。翼下面に収納されていた引込脚と共に、今も印象深く眼底に焼き付いている。

当時、山本卓眞さんは、満洲で日夜訓練に励んでおられた筈で、2期先輩の兄上卓美さんの母校訪問飛行のことは、承知しておられたのであろうか。今や知る由もない。

筆者が山本卓眞さんの知遇を、何時頃から得るようになったのか、定かではない。春は靖國神社、秋は世田谷山観音寺の特攻観音年次法要で、常に毅然として端正な山本さんの姿が今も眼前に彷彿とする。

頃であつたか、同期生から少し位は酒を嗜んで、もつと気さくになれと忠告されている、と苦笑いされていたが、その点は全く同感であつた。

筆者は、山本卓眞さんの人となりの委細を語る資格はないが、剛直と柔軟と両面を併せ持っておられたように思われる。

数少なくつた旧陸軍現役将校で、戦没者の慰霊顕彰と日本人の心の伝承者の中心人物として、これからも活躍されることを期待してただけに、突然の訃報に接し、痛恨の極みである。

これからも我々の行動を見守つて、道を誤らないよう、御照覧賜るべく、心からお願ひ申し上げる次第である。

さようなら、山本卓眞さん、安らかに眠りください。

### ○山本卓眞名誉会長追憶の記

理事 深山 明敏

山本卓眞名誉会長の突然の訃報に接し、心からお悔やみ申し上げますとともに、御冥福をお祈り申し上げます。

私は、財団法人特攻隊戦没者慰霊平和祈念協会の当時から約10年、公私にわたり温かい御薫陶をいただきました。この追憶の記を通じて、尊敬する先輩に対する感謝の意を多少なりともお汲み取りいただければ幸甚に存じます。

山本名誉会長は、靖國神社崇敬者総代会を平成9年から務めておられるように、戦没者の慰霊・顕彰のお気持ちに極めて強く、政・官・財・学界等に流れる歴史観や国家観に対しても批判的な論説を発表しておられ、天皇陛下の御親拝復活の方策を模索していらつしゃいました。未だに前途遼遠で残念な事態が続いており、私どもも打開策に苦慮している段階です。

当会に対する御熱意は、兄上の山本卓美少佐（陸士56期・特攻戦死後2階級特進）が、特別攻撃隊八紘隊長として昭和19年12月7日朝、レイテ湾オームック沖の敵艦船に突入、戦死されていますし、また、御自身も満洲の基地からソ連軍戦車部隊に対する特攻出撃の直前に終戦を迎えたという御体験を有しておられることから、他団体とは少し異なる強い愛着心をお持ちのようでした。

支援を目的とする事業」に該当するという説明を受けたことが発端でした。戦没者慰霊の目的を全く誤解している政治家や官僚の認識には、嘆かわしい事態の深刻さを痛感いたしました。

認定基準改正のため、山本会長（当時）には、戦没者慰霊に携わる諸団体の先頭に立っていただき、政府に要望書も提出し、取りあえず「国政の健全な運営の確保に資することを目的とする事業」に区分することになり、新法人の認定申請書を提出しました。

慎重な審議を経て、昨年1月から公益財団法人特攻隊戦没者慰霊顕彰会として名称も新たに再発足できたことを契機に、代表理事（理事長）を信頼できる後輩で、航空自衛隊出身の杉山蕃元統合幕僚会議議長に自発的に譲り、名誉会長に退かれました。

当会の事業では特に、「特攻勇士の像」を全国各地の護國神社に建立、奉納する計画を重視し、年度計画において予算措置にも配慮して積極的に推進するように指導され、その成果が逐次具体化してきています。山本名誉会長の御遺志を継承し、国難に殉じられた戦没者の慰霊顕彰事業が国家の発展に寄与するように、これからも努力し、御厚情に応えて行きたいと存じます。どうぞ安らかに眠りください。

## これからの「特攻隊戦没者慰霊顕彰」について

専務理事 藤田 幸生

### 一 はじめに

大東亜戦争終戦から67年が経ちました。私たちは日本人として、この戦争について、真剣に向き合うことを控えてきたように思います。国を動かす根本に関わる分野でも、未だに日本の伝統的価値観の回復が出来ていないのが現実です。国の義務とも言える戦没者の方々の慰霊顕彰が、国として十分実施されていないこともその一つです。

### 二 大東亜戦争の見方

#### 1 我が国からの見方

この戦争について、歴史を素直に緬げば、世界史上、大変重要な意味を持つものだと理解できます。すなわち、「東洋と西洋」、「黄色人種と白色人種」、「植民地と帝国主義」、「共産主義の台頭」、「核戦争の始まり」など、大きな時の流れの中で、様々な要素が重なり合い、この戦いとなったことが分かります。その結果、戦場となった各地域、各国、各民族には、人的にも物的にも大きな被害を及ぼす結果となりました。残念に思います。

我が国は、明治維新以来、東洋の一国として西洋諸国からの侵略に耐え、

国の独立と民族の尊厳を守り通してきました。我が国がそれを成し得た理由は、明治開国以来、日本を見た多くの外国人が認めたように、「日本人の精神」、「日本の風土が育んできた日本民族の資質」だったと思います。我が国は自然に恵まれ、古来「和」を大切にする風土の中で、天皇陛下を中心とした国を営んできました。人の道として、「仁・義・礼・智・信・忠・孝・悌」の徳目を大切に、「武士道」に代表される価値観を作り上げていたのです。我が日本にとって、この戦いは、日清・日露に続く、生き残るための戦いであったと思います。

#### 2 世界的な見方

日本はこの時期、民族としての発展期を迎えていました。その生物、「種族」としての勢いは、生物学的、物理学的に国内に止まり得ず、その活路を国外に求めざるを得ない状況でした。国内に溢れた日本人は、移って行った先々で、その洗練された人格と優れた能力を発揮しました。その結果、各地で「黄禍論」に代表されるような日本人排斥の土地の人々に、「自分達の生活を脅かすもの」として受け取られたので

しょう。このように日本は、特異な存在となりました。西洋からは警戒され、

同じ東洋でも、歴史上、過去に、日本の発展に貢献してきた国々からは、疎まれる結果となったのです。それらの国々は、当時西洋に対抗する力を失っていました。それが、この大戦の元でした。しかし一方においては、この戦いにより、当時なお、植民地として喘ぎ苦しんでいたインド、インドネシアその他多くの東アジアの国々は、日本の行動を経て、独立を果たしていったのです。西洋諸国による東洋植民地支配末期における出来事でした。

#### 3 特攻作戦について

このような流れが行き着くところとして、日本は国の内外いずこにも活路を見出せず、先の戦争に突入しました。そしてその結果、敗れました。

しかしその負け戦の過程において、武士道に代表される日本人の価値観を守り、最後まで全力を尽くしたのです。敗色濃い戦争の末期に実施した特別攻撃隊の作戦は、文字どおり「十中十死」の作戦でした。隊員達は、国のため、親兄弟、子孫のために、将来、日本が平和な、よりよい国に発展することを信じ、命を捧げて散華されたのです。これは、日本人の精神を世界に示すものでした。

現在では、特攻作戦に関する様々な見方が、著作、演劇、テレビドラマ、

映画などで披露されています。それらの中には、前向きな見方もあれば、後ろ向きな見方もあります。私自身の自衛隊操縦士としての勤務を通じて培ってきた見方からすれば、当時の国家存亡の危機の中で、彼らが自ら書き残した遺書、彼らが写真に残した表情から、特別の場合を除き、大半の英霊の方々は、自らの意思で国難克服のために、その身を捧げられたものと信じます。したがって、特攻隊員の方々の精神は、今なお世界からも注目され、心ある人々から高く評価され、尊敬されているのです。

### 三 戦没者慰霊の現状

#### 1 戦没者慰霊全般

戦後の日本は、占領軍による政策等を愚直なまでに受け入れ、忠実に実行してきました。それは、日本を変え、弱体化するための政策でした。その結果、300万人余に及ぶ戦没者、取り分け、200万人余の戦死者の慰霊顕彰を、国として十分に実施することさえ別としても、特立後については、私達日本国民の責任であると思います。

この間の戦没者慰霊顕彰活動を振り返ってみると、8月15日には、全国全戦没者の慰霊祭を武道館等で実施してきました。御遺骨の帰還、慰霊碑の

建立等も手掛けてきました。しかしそれらは総じて、英霊の方々に恥じない内容のものではなかったように思いますが。日本の国のため、命を捧げて戦ってくださった戦没者の御霊に対して、東西あらゆる他国が実施しているような、独立国として十分な感謝の気持ちを表したものは言えません。

## 2 特攻隊戦没者の慰霊

特攻隊戦没者の慰霊顕彰については、終戦直後から、GHQの目を避けて、特別な思いで始められました。以後目立たないように細々と続けられました。活動を振り返ってみると、当初の「特攻隊指揮官等」(第一世代)を中心に実施された時期、次に、「特攻隊員同期生等」(第二世代)による時期、更に「特攻隊後輩等」(第三世代)による時期と、時代を下がって受け継がれてきました。ところが開戦から70年を経過しようとしている現在では、この「第三世代」の担い手さえも高齢化し、慰霊顕彰活動が、その後輩の「第四世代」と言うべき戦後世代に移行してきているのが実情です。私達「第四世代」は、特攻隊員の方々の遺族や戦友という特別な立場ではなく、戦没者との関係も遠くなり、一般にそれを想う気持ちも変化してきているのが実態です。

## 3 特攻隊戦没者慰霊の現状とその

### 課題

その慰霊団体自体も「一般団体」、「財団法人」を経て、今は、「公益財団法人特攻隊戦没者慰霊顕彰会」(以下「顕彰会」という)と変転してきました。顕彰会の実情は、会勢は減少の傾向にあります。資金的にも予算は縮小しています。そのような中で、年2回の慰霊祭(春の靖國神社、秋の世田谷山観音寺)、世田谷観音月例参拝、内外慰霊行事参加、機関誌『特攻』や『特別攻撃隊全史』の刊行、HPの維持、「特攻勇士之像」建立等の事業を継続しています。旧軍の部隊や戦友、戦場や出身別等の慰霊団体は、関係者の高齢化により、解散して活動を停止していかざるを得なくなっているのが現状です。このような時の流れの中で、特攻隊戦没者の慰霊顕彰は、今後とも是非継続し、その精神を伝えていくべきだと考えております。

## 四 これからの特攻隊戦没者慰霊顕彰の在り方

このような認識の下に、今後の「特攻隊戦没者慰霊顕彰」は如何にあるべきか、その在り方を考えてみました。顕彰会の活動継続の精神的な真柱であります。「亡き戦友の慰霊」、「亡き父や兄の慰霊」となれば、自然な気持ちで手が合わさることでしょう。しかし

時が流れ、色々な意味で状況が変わっていく中で、これから先、子々孫々、特攻隊員の方々の慰霊を継承していくに当たって、どう考えて何を伝えていけば良いのかということがあります。今春も例年どおり、1月下旬、サイパン島に約9日間の旅をしました。10回目であり、そこで慰霊について思索を重ねてきました。そして今回やっと、自分で納得のいく考え方が出来るようになったと感じました。それは、以下のとおりです。

### 1 戦没者のことを忘れないこと

玉碎の島サイパン島のバンザイクリフ、スーサイドクリフ、旧アスリート飛行場に立つと、当時のことが思い浮かんできます。空を飛ぶ野鳥も、珊瑚礁を美しく彩る熱帯魚も、戦争当時生きていたそれらの子孫です。当時と変わらない自然も美しく、オリオン星座など降るような星空です。それらを眺めながら思索に耽りました。また、雨曝しに朽ち果てている旧日本軍の戦車、対空砲、魚雷などの破片を草むらの中に見る時、英霊の方々の声が聞こえてくるようでした。玉碎の地に建つ戦没者慰霊碑の前では、「忘れないで欲しい!」という多くの英霊の方々の声が聞こえてくるように感じました。これは、マバラカット基地跡、レイテ

島、コレヒドール島、トラック島などの戦跡等を訪ねた時も、同じでした。「特攻隊戦没者慰霊」の原点は、やはり、特攻作戦のことを、また、英霊の方々がどのような戦いをして散華されたのか、「その事実を忘れないこと」だと思いました。そしてその中には、御遺族の悲しみや御苦労も含まれます。

### 2 戦没者に感謝の気持ちを持つこと

生起した事実を知ると、戦没者の方々の覚悟、とった行動の意味やその深さ、その残された事実や自他に及ぼした影響、彼ら自身の苦しみ、悩みなど、様々なことが心の中に浮かんできます。そうして考えていると、やがてそれらを素直に感じ取れるようになってきます。それが理解できるようになったとき、初めて国難に殉じた英霊の方々に「感謝する気持ち」が湧き上がってくるのでした。それこそが、慰霊にとつて最も大切な原点だと思えてきました。

### 3 戦没者に恥じないよう反省し、精進すること

英霊の方々に対する感謝の気持ちが生起してくると、「今の自分は、英霊に恥ずるところは無いか」、次には、「英霊の方々の想いや期待に十分応えているか」という気持ちが込み上げてきま

## 3月10日と3月11日

○3月10日（東京大空襲と硫黄島、そして、勝者の論理と敗者の卑屈）

3月10日は、旧軍の陸軍記念日である。明治38年3月10日、旧満洲・奉天における日露両軍の大会戦に大勝利、日露戦争を勝利に導いた日である。明らかにこの日を狙った米軍の無差別大爆撃により、栄光の陸軍記念日は、忽ちにして紅蓮の焰と10万市民の血糊で朱に染められた。東京大空襲である。あれから早67年の歳月が流れた。今年



東京都慰霊堂全景



東京都慰霊堂正面



春季慰霊大法要

能の遺体で、約66%に及んだという。男女の識別すらできない、黒焦げの死体あるいは焼け崩れてゴミと化した遺体であったという。これらの不明遺体は、被災直後に都内数箇所仮埋葬され（例えば錦糸公園1万3951体、猿江恩賜公園1万3242体、上野公園8391体、隅田公園6374体ほか）、その後数年をかけて調査、焼骨して慰霊堂に納骨されている。慰霊堂

も様々な形での慰霊追悼、平和祈念の催しが都内各地で行われ、マスコミも大きく取り上げた。3月10日、墨田区横網町公園内の東京慰霊堂では、午前10時から財団法人東京慰霊協会主催による、都内被災遭難死者及び関東大震災遭難死者の「春季慰霊大法要」がしめやかに執り行われた。秋篠宮・同妃両殿下御臨席の下、石原慎太郎都知事を始め都議長、各区長その他の自治体や団体の

代表者、遺族代表者等約350名が参列した。その他一般参拝者が堂の内外に溢れ、冷雨の中を早朝から午後まで引つ切りなしに訪れて、慰霊堂や納骨堂前の祭壇に献花、拝礼し、焼香の煙は絶えることがなかった。慰霊堂内及び資料館（復興記念館）内には、東京大空襲の絵画や写真、遺品その他の資料等が多数展示してあるが、年代が古いだけに鬼哭・妖気の迫る感があった。また、当時の警視庁の警察官で反骨の

す。「日本の安寧と将来の発展を期待し、親兄弟など愛しい人達の幸せのため」に命を捧げて任務に赴いた英霊の方々を思うとき、私達は「日頃の自身自身の生き方を反省し」、本来の日本人らしい生き方をしなければならぬことに気付かされるでしょう。そして、

英霊の方々が望んでいた「日本の再生に努力していくこと」が、本当の意味での最終的な慰霊顕彰になるのではないかと考えてくるのです。これこそが、これからの慰霊活動の真柱になると思うに至りました。そしてまた、この気持ちで、震災復興最中

の今、我々日本人に必要な、そして求められている心構えではないかと思えてならないのです。

五 おわりに

これからの特攻隊戦没者慰霊顕彰活動の真柱は、

1 特攻隊の真実を忘れないこと

2 英霊に対し感謝すること

3 生き方を反省し、日々真摯に生きることに

「やすらかに！ ありがとうございませう！ つくします！」

この思いを胸にして、これからの活動を続けてまいりたいと思います。

にはその後の空襲犠牲者を合わせて10万5400体が納骨されている。また、同慰霊堂敷地内にある、東京都の「東京空襲犠牲者を追悼し平和を祈念する碑」の中には「東京空襲犠牲者名簿」(現在第1巻〜第34巻まで、7万9500余柱)が納められている。東京空襲は昭和19年11月24日から終戦まで百数次にわたって実施された。当初米陸軍航空隊第21爆撃団(司令長官アーノルド大将、参謀長ノースタック少将)のサイパンにある現地爆撃隊司令官ハンセル少将は、あくまでも正



納骨堂



退出される秋篠宮妃殿下

攻法の工場精密爆撃を主張し実行したのが、所期の成果を上げることができなかった。業を煮やした爆撃団司令部は、かねて周到に準備していたM69型焼夷弾等による都市の無差別爆撃を実施すべく、突然ハンセル少将を解任し、かねがね無差別じゅうたん爆撃の実施を主張していたカーチス・E・ルメイ少将を司令官に任命し、その機を狙っていた。3月9日夕、サイパン、テニアン、グアム3島の基地を飛び立った334機のB-29大編隊は、途中なお死闘の続く硫黄島の砲炎を眼下にしつつ房総半島を北上して東京上空に達し、隅田川を挟む下町一帯約27平方kmの焼失予



東京空襲犠牲者を追悼し平和を祈念する碑

定区域に、高度平均2kmの低空から50フィートの間隔で約32万発2千トンのM69型焼夷弾及び爆弾を投下した。折柄の強風と火災による局地的暴風に煽られて火は忽ち燃え広がり、猛火となつて一帯を舐め尽くし、焼失地域は予定の約1.5倍、41平方km、首都の4分の1を焦土と化し、死者約10万、負傷者約12万、焼失家屋約26万7千という未曾有の大損害を生ぜしめた。この東京大空襲の後、名古屋(3月12日)、大阪(3月14日)等大都市の大空襲が続き、更に全国の中小都市200以上が空襲や艦砲射撃による戦災を被った。沖縄では軍官民挙げての



東京空襲犠牲者名簿

に参加し、遺骨収容作業を行い、昨年11月29日〜12月7日の第1回特別派遣団の収容分155柱に、今第2回特別派遣団の収容分189柱、合わせて344柱の御遺骨を捧持して帰還し、2月15日千鳥ヶ淵戦没者墓苑における御遺骨引渡式において、厚生労働省に御遺骨を無事引き渡すことができた。その作業を通じて硫黄島戦の凄絶さを、まざまざと想起した。硫黄島は、日本本土の爆撃を狙う米軍にとつても絶対に必要な戦略要地であった。東京から約1250km、サイパン、テニアン、グアム等の米軍戦略

壮烈なる激戦が展開された。本土防衛の防波堤たらんとした硫黄島の激戦も、3月17日の栗林忠道兵団長から大本営宛の訣別電報、同月26日の兵団最後の総攻撃による壮絶なる玉砕によって終焉を迎えた。東京大空襲の惨禍を知ったであろう栗林中将が、その訣別電報に添えた遺詠「国の為重きつとめを果し得て 矢弾盡き果て散るぞ悲しき」に籠められた無念の想いが肺腑を抉る。筆者は、今年2月6日(月)から15日(水)まで、政府派遣硫黄島遺骨帰還平成23年度第2回特別派遣団(厚生労働省職員等16名、民間ボランティア39名(男性31名、女性8名)総勢55名)に参加し、遺骨収容作業を行い、昨年11月29日〜12月7日の第1回特別派遣団の収容分155柱に、今第2回特別派遣団の収容分189柱、合わせて344柱の御遺骨を捧持して帰還し、2月15日千鳥ヶ淵戦没者墓苑における御遺骨引渡式において、厚生労働省に御遺骨を無事引き渡すことができた。その作業を通じて硫黄島戦の凄絶さを、まざまざと想起した。

爆撃基地から約1100km、東京、名古屋、大阪への、ほぼ中間地点に硫黄島があつて、そこを占領すれば、B-29による日本本土爆撃は格段に容易となる。硫黄島に基地を置くことによつて日本本土は米軍戦闘機の行動圏内に入り、その援護によつて米軍はマリアナ基地のB-29による日本本土の昼間爆撃が可能となつたばかりでなく、爆弾搭載量も倍加され、戦果は益々拡大された。また、硫黄島はB-29の緊急着陸場となり、更に海上に不時着した搭乗員を救助する艦艇の中継基地となり、B-29搭乗員の安心と士気の高揚に好結果をもたらした。米軍の硫黄島攻撃開始2週間後に、B-29の最初の1機が千鳥飛行場に緊急着陸してから終戦までに延べ約2400機が同島に不時着し、搭乗員約2万7000名の命が救われたという。硫黄島制圧直後から米軍は元山飛行場を中心に滑走路(約2600m)の拡張工事を緊急に実施し、その際、周辺に散乱する日本兵の遺体を集めて滑走路西側の道路に面した窪地に埋葬した。米側の資料によると、その数約2千体という。そこが今回の遺骨収容作業地である。

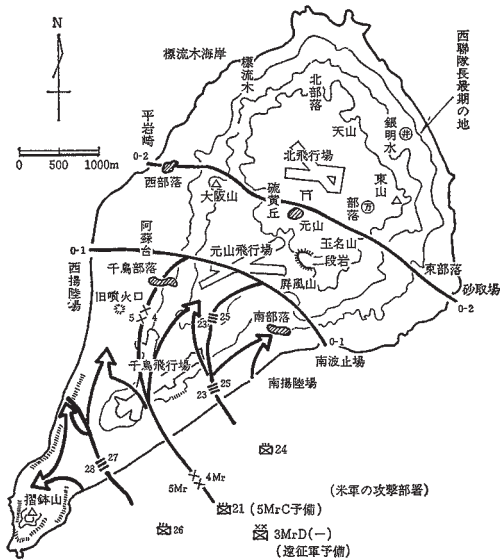
硫黄島における戦没者遺骨収容は、昭和27年に調査を行つて以来、平成23年2月まで82回に及び、日本遺族会、硫黄島協会、旧島民の会、JYMA等の民間団体の協力と防衛庁(省)の支援を得て、厚生労働省が実施しており、これまでに合計9537柱の御遺骨の帰還を果たしているが、防衛研修所戦史室著『戦史叢書・中部太平洋陸軍作戦(2)』によれば硫黄島戦における我が軍の戦死者数は1万9900名(陸軍1万2850名、海軍7050名)となつているから、未だその半数にも満たない状況である。一方、米国側は、硫黄島での戦死者6821名の遺体を、一旦南海岸に近い千鳥飛行場跡付近の米軍墓地に埋葬し、戦後十数年を経過して小笠原諸島の日本返還(昭和43年6月23日)前に、全ての遺骨を掘り起こし、ワシントンの国立アーリントン墓地に埋葬したとのことである。国家としての、戦没者に対する慰霊顕彰の在り方について、深く考えさせられるところである。

栗林忠道兵団長麾下の硫黄島守備隊将兵約2万1000名は、昭和20年2月19日の米海兵隊3個師団約6万1000名の上陸から3月26日の兵団長自ら指揮する残存部隊約4000名の総攻撃・玉砕に至る36日間にわたり、真に鬼神も哭かしのむる壮烈悲愴の奮戦敢闘を現じた。この間、米軍の損耗は、前記戦死者に戦傷者2万1865名を

加えて2万8686名に上り、我が軍の、前記戦死者に戦傷者10333名(軍属を含む。生還)を加えた損耗2万9333名を大きく上回つた。それほど犠牲を払つても米軍にとつて硫黄島は日本本土空襲のために絶対必要な重要拠点であつた。

硫黄島の戦いは、地上対地下の戦いであつたという。栗林兵団長指導の下、総延長18km余に及ぶ地下道を巡らせた洞窟陣地とトーチカ陣地に拠つて頑強な抵抗を続ける日本軍に、さしも精強を誇る米海兵隊も苦戦の連続であつた。しかも日本軍は地下壕に拠つて戦つたばかりでなく、地上戦においても神出鬼没、夜襲に次ぐ夜襲により、米軍に多大の損害を与えた。硫黄島戦終末期の3月11日から4月3日までの米軍の損耗は戦死1067名、戦傷等2817名、合計3884名と記録されている。取り分け、兵団長自ら先頭に立つての、3月26日未明の最後の攻撃は、米軍も賞賛するように、最大の混乱と破壊を狙つた優秀な攻撃であつた。25日夜半、北拠点にある兵団司令部壕(栗林壕・縦横に連絡壕をめぐらせている)から機を見て出撃した栗林兵団長以下陸海軍約400名の将兵は北西の漂流木海岸沿いに攻撃前進し、翌26日5時15分頃西部落南方の米海兵隊及び陸軍航空部隊の露営地を奇襲した。同地付近はそれ以後3時間にわたり修羅場と化し、米兵約170名を殺傷する戦果を挙げ、引き続き一部は元山、千鳥飛行場にも突入したが、我が将兵の大部は玉砕、硫黄島における組織的戦闘は終わった。米海兵隊戦史によると、そ

硫黄島概況図(昭和20年2月19日~3月中旬)



の日飛行場防備の米陸軍第七戦闘機部隊は、戦死44、負傷88、第五工兵大隊は戦死9、負傷31、合計122名の損害を受けたが、日本兵196名を斃した。日本兵は日米両方の火器で良く武装され、内40名は軍刀を携帯していた、という。米軍工兵大隊は3月半ば頃から既に飛行場の拡張工事を進めていたということであるから、今回の遺骨収容作業地の、現滑走路西側の集団埋葬地には、それらの日本兵の遺体が埋葬されている可能性があり、集団司令部の上級将校達の御遺骨も収容できるのではないかと期待しつつ、収容作業に励んだ。ただ、栗林兵団長は、攻撃前進中、右大腿部に砲弾の破片を受け、歩行困難の重傷のため、司令部付某曹長が背負って前進したが力尽き、「兵団長の屍は敵に渡してはならぬ」との最後の言葉を残して、参謀長高石正大佐らと共に拳銃で壮絶な自決を遂げたため、大阪山北方の大木の根元の弾痕内に深く埋葬した、とも伝えられている。なお、残存将兵は、その後も各拠点の地下壕に拠り、機を見てゲリラ攻撃を続け、米軍の爆破、火焰攻撃による死傷者続出するも降伏勧告に 응ぜず、6月下旬頃まで戦い続けたという（最後の兵2名が投降したのは、何と昭和24年1月6日であったという）。

今回の派遣は、色々と制約が厳しく、カメラ、携帯電話等の持込みは許されず、宿舎外での行動は、全て団体行動ということで、食堂へ行くにも、作業現場へ行くにも、個人の自由行動は一切禁止された。ただ、土曜日の午後半日、空自駐屯地指令自らの案内により、バスで島内主要箇所を駆け足で一巡し、慰霊巡拝等を行うことができた。硫黄島は南端の摺鉢山及び中央の旧元山部落に近い硫黄ヶ丘を山頂とする活火山島であって、今なお活発な活動を続けており、硫黄ヶ丘周辺は、恰も箱根の大涌谷の様相を呈し、数箇所から硫黄臭の蒸気が立ち上っている。海岸には数箇所温泉が湧き出ており、また、至る所隆起が甚だしく、特に船着き場に適當と思われた西海岸では、沈船群を利用した岸壁工事が行われたが、隆起のため忽ち崩壊し、かつては島であった釜岩は今や陸続きとなつてしまった。海水の浄化装置もすぐに破壊されてしまったため、用水の全ては滑走路に降った雨水をタンクに貯めて浄化して使用しており、屢々渇水に悩まされるという。

（標高1000～1100mの台地）に約8・3km、最大幅約4・5kmの扇形をなしており、面積約22・5km<sup>2</sup>（品川区とほぼ同じ）の小島である。この島は米軍の熾烈な砲爆撃とこれを邀え撃つ我が軍の猛砲撃による何十万トンの鉄の破片に覆われた。今なお草も生えないう赤茶けた鉄錆の荒地が多いが、基地以外の大半は灌木や草に覆われている。米軍は占領後、散乱する日本兵の遺体の死臭を取り除くため、銀合歡の木の種類を大量に播いたが、それが根付いたものと言われる。ただ、北端の台地付近には、昔の面影を残した樹林もあり、集団司令部壕（栗林壕）付近にはパイアの林があったり、海軍司令部壕付近にはガジュマルや椰子の木の密林があったり、また、付近に桑の大木の林があり、甘酸っぱい桑の実が沢山なつていたりして、当時の将兵もこれを摘んで故郷を偲んでいたのであろうか。近くの北観音像の慰霊碑横には、栗林司令官の妻義井夫人の筆になつた慰霊顕彰文が刻まれた副碑が建っている。また、北部台地突端の砲台に残る12センチ平射砲の砲身には、無数の弾痕が残る。砲爆撃の熾烈さを物語っている。旧複郭陣地の西側、大阪山の北方では、今も地下壕入口の土砂を重機で掘り除く作業が続けられており、近

く遺骨収容が可能となるかも知れない。彼我の激しい攻防戦によって山容がすっかり変わったという摺鉢山の山頂には、岸信介元総理の筆になる「硫黄島戦没者慰霊顕彰」碑と小泉純一郎元首相の筆になる「慰霊」碑、それに神風特別攻撃隊第一・第二御桶隊の慰霊碑があるが、隆起が激しく崖崩れのおそれがあるため、一部移設したとのことである。また、その左隅の、かつて6名の海兵隊員により最初に星条旗が立てられた箇所には、米軍の戦勝記念碑が建てられ、星条旗をかたどった銅板と、旗を立てる海兵隊員達のレリーフが嵌め込まれた白い台座があり、それには、彼の太平洋艦隊司令長官ニミッツ元帥の「硫黄島で戦ったアメリカ兵の間では、並みはずれた勇気がごく普通の美德であった」との有名な顕彰文が刻まれ、その碑の前にある2基のV字形のオブジェには、ここを訪れた元海兵隊員達の、認識票をかたどった無数の小さな鎖付きプレートが掛けられている。その摺鉢山の麓には南観音の慰霊碑があり、眼下の米軍上陸地南海岸の途中には、米軍将兵の慰霊碑と日米再会の碑がある。毎年3月半ば頃に行われる日米合同慰霊祭の催行場所である。死力を尽し、勇敢に戦った者同士だからこそ恩讐を超えて互いに健闘

今回の派遣は、色々と制約が厳しく、カメラ、携帯電話等の持込みは許されず、宿舎外での行動は、全て団体行動ということで、食堂へ行くにも、作業現場へ行くにも、個人の自由行動は一切禁止された。ただ、土曜日の午後半日、空自駐屯地指令自らの案内により、バスで島内主要箇所を駆け足で一巡し、慰霊巡拝等を行うことができた。硫黄島は南端の摺鉢山及び中央の旧元山部落に近い硫黄ヶ丘を山頂とする活火山島であって、今なお活発な活動を続けており、硫黄ヶ丘周辺は、恰も箱根の大涌谷の様相を呈し、数箇所から硫黄臭の蒸気が立ち上っている。海岸には数箇所温泉が湧き出ており、また、至る所隆起が甚だしく、特に船着き場に適當と思われた西海岸では、沈船群を利用した岸壁工事が行われたが、隆起のため忽ち崩壊し、かつては島であった釜岩は今や陸続きとなつてしまった。海水の浄化装置もすぐに破壊されてしまったため、用水の全ては滑走路に降った雨水をタンクに貯めて浄化して使用しており、屢々渇水に悩まされるという。

硫黄島は東京の南方約1250km、北緯24度47分（台湾北部とほぼ同じ）東経141度19分に位置し、南端の摺鉢山（標高170m）を要として北東

を讀え合うことができるのであろう。在島中殆ど、朝は海霧に覆われた薄曇りの空も、夜には晴れて椰子の葉の揺れる中天の月青く、満天の星の瞬く南洋の島の風情に包まれ、殊に太平洋の彼方に沈む真つ赤な夕陽の美しさには魅了され、また、郷愁をかき立てられた。かつて将兵達も同じ思いであったであろう。それにしてもまだまだ硫黄島は骨踏む島である。滑走路の周辺のみならず、その下に埋もれた御遺骨があるかも知れず、未発掘の地下壕も無数にあるという。平成6年2月慰霊のため同島に行幸・啓された天皇陛下の御製「精魂を込め戦ひし人未だ 地下に眠りて島は悲しき」と、皇后陛下の御歌「慰霊地は今安らかに水をたたふ 如何ばかり君ら水を欲りけむ」を胸に刻みつつ、後ろ髪を引かれる思いで島を後にした。

数年前、NHKのテレビ番組で、この東京大空襲に参加した元米軍パイロットも、大空襲による余りの熱さと異臭、突き上げる熱気流に操縦もままならぬ状態であったと証言している。後に慰霊堂の悲惨な写真を見た元パイロットもさすがに目に涙を浮かべていたが、それでも彼は「自分達のやったことが間違っていたとはどうしても言えない。なぜならば、それはこの戦

争で命を落とした戦友の死を無駄にするからだ」と言っていた。

一方、「戦果を上げるためにはどんなことでもやる。日本本土の焼土戦術は、結果として日本の降伏を早め、それによって彼我百万人の命を救ったことになるのだ」と言っていたルメイ將軍は、後年「もし我々が負けていたら、私は戦争犯罪人として裁かれていただろう。幸い私は勝者の方に属していた」と語っている。このルメイ將軍に対し、日本政府は、昭和39年、東京オリンピックの年に、航空自衛隊の育成に協力した功績に対してということで、勲二等旭日大綬章を贈っている。何という歴史認識の甘さ、敗者の卑屈とも取れる行為ではないか。空襲犠牲者の霊や遺族の感情を逆撫する行為ではないか。

### ○3月11日（東日本大震災から1年）

戦後最悪の災害となった東日本大震災は11日、発生から1年を迎えた。その被害状況は、死者1万5854人、行方不明者3155人（3月10日現在警察庁まとめ）、避難者34万3935人（2月23日現在復興庁まとめ）、瓦礫は岩手・宮城・福島県の3県で2253万トン（3月8日現在環境省まとめ）となっている。死者、行方不

明者の大半は、地震後発生した大津波にのみ込まれた人々であるが、死者は12都道県に及んでおり、11日は、全国各地はもとより海外各地でも追悼行事が行われ、地震発生時刻の14時46分、一斉に鎮魂の祈りが捧げられた。

東京では、政府主催の追悼式が国立劇場において、天皇、皇后両陛下をお迎えし、岩手・宮城・福島3県の遺族代表34名のほか野田総理ら三権の長、国会議員、支援者代表ら約1200名が参列して執り行われた。3週間前を心臓手術を受けられ、御退院後1週間を経過したばかりの天皇陛下は、強く希望されて御出席になられ、被災地の支援活動や原発事故対応に尽力してきた人々の労をねぎらわれ、救助隊の派遣など世界各地から寄せられた厚情に感謝の意を表されるとともに、「大震災の記憶を忘れることなく、子孫に伝え、防災に対する心がけを育み、安全な国土を目指して進んでいくことが大切」というお言葉を賜った。誠に有り難く、誰しもが共通の思いを抱いたことであろう。

#### ○天皇陛下の哀悼のお言葉

「東日本大震災から1周年、ここに一同と共に、震災により失われた多くの人々に深く哀悼の意を表します。

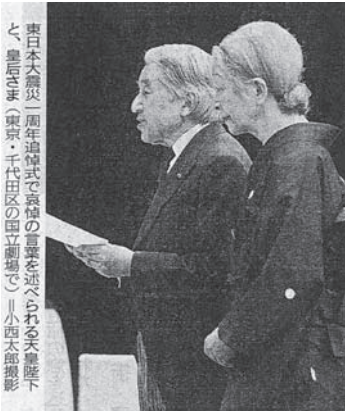
1年前の今日、思いも掛けない巨大

地震と津波に襲われ、ほぼ2万に及ぶ死者、行方不明者が生じました。その中には消防団員を始め、危険を顧みず、人々の救助や防災活動に従事して命を落とした多くの人々が含まれていることを忘れることができません。さらにこの震災のため原子力発電所の事故が発生したことにより、危険な区域に住む人々は住み慣れた、そして生活の場としていた地域から離れざるを得なくなりました。再びそこに安全に住むためには放射能の問題を克服しなければなりませんという困難な問題が起こっています。

この度の大地震に当たっては、国や地方公共団体の関係者や、多くのボランティアが被災地へ足を踏み入れ、被災者のために様々な支援活動を行ってきました。このような活動は厳しい避難生活の中で、避難者の心を和ませ、未来へ向かう気持ちを引き立ててきたことと思います。この機会に、被災者や被災地のために働いてきた人々、また、原発事故に対応するべく働いてきた人々の尽力を、深くねぎらいたいと思います。

また、諸外国の救助隊を始め、多くの人々が被災者のため様々に心を尽くしてくれました。外国元首からのお見舞いの中にも、日本の被災者が厳しい





東日本大震災(周年追悼式で高松の重宝を巡られる天璋天皇と、皇后さま(東京、千代田区の国立劇場で)。(小西太衛撮影)

状況の中で互いに絆を大切にしながら復興に向かつて歩いていく姿に印象付けられたと記されているものがあります。世界各地の人々から大震災に当たって示された厚情に深く感謝しています。

被災地の今後の復興の道には多くの困難があることと予想されます。国民皆が被災者に心を寄せ、被災地の状況が改善されていくよう期待して、努力を続けていくよう期待しています。そしてこの大震災の記憶を忘れることなく、子孫に伝え、防災に対する心掛けを育み、安全な国土を目指して進んでいくことが大切と思います。今後、人々が安心して生活できる国土が築かれていくことを一同と共に願います。い、御霊への追悼の言葉といたしません。」

なお、避難者の多くは東京電力福島第一原発の事故で避難した住民で、

帰郷の目処は立っていない。被災者の大半は仮設住宅や民間借り上げ住宅で暮らしており、避難先は47都道府県全てに及んでいる。東北3県で被災した商工業者のうち22%は、休業中か廃業を余儀なくされている。沿岸部の主力産業であった水産加工業の再建が進まず、約6万5千人が失業している。

復興を妨げる大きな原因の一つは、地震や津波で発生した大量の瓦礫であるが、被災地外での広域処理が進まず、埋め立てなどで最終処分されたのは全体の6%、約143万トンに過ぎない。福島県では放射性物質を取り除く除染が最大の課題であるが、帰郷できる環境が整うまでには5年以上かかると見られる地域もある。原発周辺の大半の自治体は、復興のスタートラインにすら立てていない。総じて復興への道筋は、掛け声ほどには、遅々として進まず、住民の間には不安と不満と苛立ちが増大しつつある。

顧みて、前記東京都慰霊堂の敷地内にある復興記念館には、大正12年9月1日に発生した関東大震災の記録写真や被害資料・絵画などのほか、帝都復興に関する資料・写真・模型等が展示してあるが、中でも帝都復興計画の規模、立案、実行の速さには目を見張るものがある。当時の展示資料を見てい

た人々が様に、先人の業績に感じ入るとともに、今の政治家を始め、行政や地方自治体の、今次大震災復興への取組み方に不満を述べていた。

関東大震災は、死者9万9331人(内東京府6万8215人)、負傷者10万3733人(内東京府4万2135人)、行方不明者4万3476人(内東京府3万9304人)、全・半壊家屋25万4499戸(内東京府5万4811戸)、焼失家屋44万7128戸(内東京府37万7907戸)、流失家屋868戸(内東京府0戸)という全く予期せぬ空前の大災害発生であったが、政府は、その余震も止まぬ翌2日に山本権兵衛を首相とし、後藤新平を内務大臣とする内閣の親任式を仮皇居の赤坂離宮で行い、新内閣は直ちに応急の救護費1千万円の臨時支出を決め、同時に皇室におかれても罹災民に対し1千万円の救護費と御料林の木材30万石供出の御沙汰があり、3日には挙国一致の協力を望む旨の告諭が発せられた。更に、6日には「帝都復興の議」が閣議決定され、12日には「帝都復興の大詔」が喚発された。

復興事業推進の官制は、9月27日に勅令を以て発布され、それより先に、9月19日には、諮問機関としての帝都復興審議会が勅令を以て公布、実施さ

れ、この審議会によって実施案が慎重に審議検討されて、経費総額7億200万円の復興計画が、震災発生後僅か85日目の11月24日に正式提出された。これに対し、財政及び土地問題について活発な議論が展開されて修正され、総額を5億7481万余円とし、事業を大正12年以降同16年に至る5カ年継続費として同年12月開会の第48議会で議決された。その他、地方費として東京府は国の補助を受けて2367万円を、東京市は国及び府の補助を受けて3億4332万円の帝都復興費を決定した。この画期的な帝都復興事業の経費は、最終的に総額7億2509万円となったが、そのうち、国の支出は5億7313万円、東京市の自己負担は1億4962万円、現在の金額に換算すると大変な巨額になる。この復興事業の中には道路、橋梁、河川、港湾等が新しく整備されたばかりでなく、学校、公園、社会施設など根本的に整備された。かくして、満9年を経た昭和7年5月に事業が完成し、震災前に幾倍もする近代都市東京として復興した。先人の偉業に、改めて学ぶべきところ極めて大である。

## 第41回萬世特攻慰靈碑慰靈祭に参列して

評議員 水町 博勝

平成24年4月8日(日)、晴天の薩摩半島南さつま市加世田の、旧陸軍萬世飛行基地跡にある、萬世特攻慰靈碑「よろずよに」の前において執り行われた第41回萬世特攻慰靈碑慰靈祭に、当頭彰会を代表して参列しましたので、以下のとおり報告いたします。

萬世陸軍飛行場は、大東亜戦争末期に急造され、昭和20年3月末から使用されるようになった九州最南端、最後の特攻基地であるが、間もなく沖繩戦が始まったため、この基地を飛び立ち、沖繩周辺での特攻等で散華された英霊は201柱に及ぶという。

昭和20年3月20日、陸海軍作戦協定により、陸軍の第六航空軍は聯合艦隊の指揮下に置かれ、同月25日、米軍の慶良間列島への上陸開始を受けて、陸海軍は26日、「天一号作戦」を発動。第六航空軍は、第一次航空総攻撃を4月6日と決定した。

開設後間もない萬世特攻基地には、内外各基地で編成された陸軍特攻隊とその直掩隊、及び防空隊が続々と集結した。その第一陣として4月6日、第62振武隊(下志津)、第73振武隊(朝鮮・

平壤)、及びこれを掩護する飛行第66戦隊(いずれも九九式襲撃機)が出撃し、第62振武隊の4機、富澤健児少尉以下5名が、第73振武隊の11機、高田

鉦三少尉以下12名が沖繩本島付近の米軍艦船に突入、散華された。引き続き翌7日以降6月11日頃まで、数次にわたる沖繩航空作戦において、第74振武隊(平壤)、第75振武隊(平壤)、第102振武隊(満洲・平壤)、第432振武隊(満洲・四平)、第433振武隊(四平)、第104振武隊(平壤)、第141振武隊(明野)、第144振武隊(明野)などが、相次いで出撃し、特攻戦死者は1222名、

その外、直掩隊の飛行第66戦隊72名、飛行第55戦隊(三式戦)6名、第19航空通信隊1名の方々が特攻、あるいは特攻に準ずる戦死をされ、合わせて201柱の基地関係特攻等戦死者の御霊の慰靈祭を執り行っているものである。

今、この萬世陸軍飛行場跡は、戦時中の特攻基地とは思えないような静けさ、長閑さに包まれており、旧営門跡から慰靈碑まで、献灯された石灯籠が続き、参列者を慰靈祭会場まで導いてくれる。会場は沢山の供花に飾られ、心を籠めた立派な設営がされていた。

慰靈祭開式の前に、海上自衛隊鹿屋

基地のP3-C1機が飛来し、上空を2回通過する慰靈飛行を行った。

萬世特攻慰靈碑奉賛会の川野信男会長から追悼の言葉と共に、昨年、萬世特攻平和祈念館に展示の「零式水上偵察機」が「重要航空遺産」に登録されたこと、並びに基地建設に当たった地元の人防婦人部勤勞奉仕隊員13名が米軍の爆撃によって戦没、殉職したが、今年、その慰靈碑をこの一角に建立したことを述べられた。

遺族、戦友の慰靈の言葉では、御遺族代表の今田善男氏(飛行第66戦隊今田義基隊員の甥)から、若い世代が事実と特攻精神を語り継ぐ責任があることを語り掛け、また、戦友を代表して飛行第66戦隊隊員・萬世特攻平和祈念館名誉館長の苗村七郎氏から、同氏の著書『陸軍最後の特攻基地』が英国で翻訳され、北欧の各国にも広まり、特攻の真髓が伝わっていることを御霊に語り掛け、それぞれ御霊の安らかならんことを祈られた。

錦城会加世田道場の皆さんによる詩吟「英霊南より還る」の献詠、参列者全員の献花の後、遺族代表の今田氏及び戦友代表の苗村氏による慰靈碑への献酒が行われ、その後、川野奉賛会会長から奉賛会への功労者に対する感謝状の贈呈が行われた。

本慰靈祭は、南さつま市及び市民の全面的な支援を得ており、最後に本坊輝雄南さつま市長の心のこもった挨拶と学生代表(同志社大学4年生)齋藤史博君の頼もしい「若者の誓い」の言葉があり、全員で「加藤隼戦闘隊」歌を、陸上自衛隊第12普通科連隊(国分駐屯地)音楽隊の伴奏で合唱して式典

を終了したが、特攻隊戦没者の冥福を祈る厳粛かつ整齐とした、心に残る慰靈祭であった。なお、本慰靈祭には、公益財団法人偕行社を代表して同社理事でもある飯田評議員が、また、九州各県の偕行会長以下多くの当頭彰会会員が参列した。

慰靈祭の行われる前に、萬世特攻平和祈念館を訪れたが、外観は、飛行兵が大空へ初めて飛んだ練習機「赤とんぼ」の複製型を、屋根は合掌を模した「複葉合掌型」になっていて、平成5年に開館したとのことである。建物にも思いが込められているのを感じた。

1階には、海軍の「零式水上偵察機」が展示してあるが、圧巻である。この機体は、当地の砂丘が広がる吹上浜の海中から、平成4年に引き揚げられたもので、不時着水機と思われ、損傷も少なく、良く原形を留めている。この遺産を核として、翌年、特攻隊員の遺品等と共に祈念館を設立する引き金と



慰靈祭参列者一同



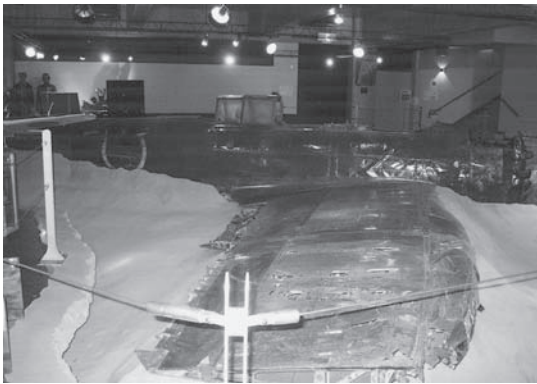
慰靈碑「よろずよに」



献花



基地戦没者殉職者の慰靈碑



祈念館内海軍「零式水上偵察機」



小犬を抱く少年兵

なったものとも伺われた。機体は保存状態も良く、日本航空協会では、平成19年に設けられた「重要航空遺産」の認定制度に基づき、昨年12月、この偵察機を6件目の「重要航空遺産」に認定されたとのことである。

2階は萬世飛行場の歴史、特攻隊員の遺影・遺品が陳列されており、先ず目に入ったのは、顕彰会のホームページの表紙絵にもなっている「子犬を抱く少年兵」の写真で、朝日新聞のカメラマンが撮影したものである。子犬を抱く第72振武隊隊員荒木幸雄伍長と少飛15期同期生の隊員仲間との写真で、明日の出撃を前にしたものとは思えない。

笑顔の写真である。また、第73振武隊隊員木原愛夫伍長（少飛15期・戦後少尉）の遺書には「海ゆかば水漬く屍 空征かば華散る屍 大君の辺にこそ死なめ かえり見はせじ」と、航空特攻そのものを詠んでいて、感銘を受けた。

苗村名誉館長が残したかった特攻隊員慰霊への思い、戦時下、特攻基地に尽きた人々の思い、戦局困難な中であつて、最善を尽くそうとした日本人の心、それらの史実を後世に伝えたいとの心を込めた万世特攻平和祈念館であることをお伝えし、当地を訪ねられた際には是非ご覧頂くようお願いしたい。このような機会を与えて頂いた顕彰会に感謝申し上げます。

## 海軍飛行予備学生

## 第十四期生の戦い

会員 茂木 尚

私は、第十四期海軍飛行専修予備学生で、昭和20年5月11日に、第七昭和隊の一員として鹿児島県の鹿屋基地から沖縄方面に出撃し、特攻戦死した茂木忠少尉の甥でございます。

子供の頃、実家の鴨居に伯父の遺影が掲げてあり、また親戚が集まって何度も法要をいたしておりましたので、特攻隊員として戦死したという事実は認識しておりましたが、特にそれ以上のもはありませんでした。

伯父の事をもっと調べてみようと思ったきっかけは、平成19年の両親の引越でした。その引越しの準備を手伝い、物置・押し入れ・仏壇などを整理していた時に、伯父の遺書・遺品、そして「あ、同期の桜」を始めとする本・アルバム・資料などが出てきました。

「あ、同期の桜」は、40年程前の私が高校生の頃に、父の本棚にあったものを取り出して読み始めたのですが、あまりにも過酷な運命と、死を目前にしながらも高揚を抑え、魂の叫びにも

似た遺書・遺稿に耐えきれず、途中で読むのを止めてしまったものでした。

私は作業の手を休め「あ、同期の桜」に読み耽りました。表紙には海軍飛行予備学生第十四期会編とあり、巻末には、昭和41年9月25日第一刷とありました。編纂した方々が伯父の同期生だとすれば、昭和41年には四十三、四歳。この方々は働き盛りで一番多忙な時に、これを編纂したのだろうか、そう思いながら読み進めるうちに、ようやく「これは大変なことだ」と気付いたのです。

そして、その本や資料の中に、鹿屋市の戦没者追悼式の案内があったので、父に申し出て、翌平成20年の追悼式に、札幌在住の叔父と初めて参列することにになりました。鹿屋市の追悼式は第1回が昭和33年に挙行されていて、平成20年度で、実に51回目を数えていたのです。鹿屋市は、札幌から飛行機とバスを乗り継いで9時間、ホテルに到着した時には、伯父は北のほずれの北海道からこの南の果てまで、いつ、どうやって来たのだろうと思いを廻らしました。

た。

過去に一度も参列することがなかった私は、式を毎年開催して下さっている関係者の方々にお礼の気持ち伝え、戦死した伯父には、長い間参列しなかつた不届きを詫言しました。

追悼式が終了した後、海上自衛隊の史料館に行き、鹿屋基地から出撃した特攻隊員の遺書・遺品等を拝見いたしました。2階には特攻隊員の遺影を展示してあるのですが、その中には伯父のものがなかつたので、次回は必ず写真を持参して、皆と一緒に展示をして頂こうと、同行した叔父と話をしておりました。それから、一度鹿屋へ足を運んだ事によつて、なんとなく肩の荷を下ろせたような気分になっているうちに、あつという間に2年の月日が流れました。

届けていない、このことだろうか？と疑問に思いながら、平成23年の鹿屋市の追悼式に参列することにしました。追悼式は、震災の影響もあつてか、遺族の参列者が前年度より少なかつたことでしたが、3年前と変わらず、厳粛で盛大なものでした。

終了後、史料館に行き、持参した伯父の写真を、皆と一緒に展示してもらおうと、受付でお願いをしました。その時に応対して下さった館員の内門さんが「それじゃ、まず戦闘概要を見てみましょう」と、第七昭和隊の当日の出撃状況を調べて下さいました。それには「第七昭和隊・零戦52・50番爆装・721空306・少尉茂木忠（予学14・台北帝大）06・53発進10・18敵部隊見ユ打電後消息ナシ」とありました。

その後、平成22年11月に、実家に帰つて仏壇の清掃をしていると、引き出しから第七昭和隊の名簿が出てきました。安則中尉・高橋少尉・小川少尉・篠原少尉・茂木少尉・皿海一飛曹・・・私は一瞬自分の目を疑いました。私の長女が結婚して高橋姓を、次女が篠原姓を名乗っていたのです。

伯父が何かを伝えたがっている、そして私を呼んでいる、何だろう・・・？ 面白いえばまだ、鹿屋に伯父の写真を  
出征前の冬のある日、軍属として働

いていた伯母が帰宅をした時に、玄関先まで迎えに出て「姉さん、寒かったでしょう」と肩や背についた雪を払ってくれた、そんな優しい心根の持ち主が何故、爆弾を抱えて出撃しなければならなかったのか、そう思うとやるせない気持ちでいっぱいになり、涙が止まりませんでした。

そして、50番爆装ってなんだろう？721空306とはどういう意味なのだろう？そう考えると、実は伯父のことを何も知らない事に気付きました。

でもどうすれば、もっと伯父のことが分かるのだろうか。そう思いながら夜の懇親会に出席すると、向かいの席に、元東洋大学教授の石垣先生が座っていたらっしゃいました。3年前の懇親会で、先生が壇上でお話をされたのを思い出して、伯父が第十四期海軍飛行予備学生だったこと、でも海軍に入隊してからことは、ほとんど知らないこと等をお話すると「私は、十四期の世話人をされている方達を存じています。でも皆さんご高齢ですので、お会いできる時間は限られていますよ」と仰られ、十四期の江名武彦さんを通じて、土田祐治さん・佐藤孝一さん・手塚久四さんを紹介して下さいました。

その時、江名さんから「私が化膿症で入室した時に、同じ化膿症で入室し

ていた学生のベッドに茂木と名札があったので「もぎさん？」と聞くと「いえ、もてきです」と答えられた。身体が小さかった私に比べ、立派な体格をされていたので、よく覚えていられるとお話をいただきました。私は、石垣先生からこのお話をお伺いした時に、土浦の事は全く知らないのに、その入室した時の状況が目につかび、伯父がすぐそこに立っているような気がして、これは当時を知る方々にお会いしなければと思いました。

手塚久四さんは、伯父とは土浦、谷田部で一緒でしたが、分隊が別だったので接触がなかったけれど、特攻編成と、出発（前線展開）の全体のこととは分かりますとお便りで丁寧の説明して下さいました。佐藤孝一さんは、鹿屋で生き残った貴重な人物であること、土田祐治さんは、谷田部では伯父と同じ二分隊だったので、交流があったかも知れないとご教示下さいました。

土田さんは、私と同じ札幌在住で、たまたま5月7日に十四期会があるとのこと、叔父と二人で参加させて頂きました。土田さんは眼光鋭く、背筋をピシッと伸ばし、失礼ながらこれが海軍で鍛えられた元将校かと頷かせる風貌で、とても91歳とは思えない様子でした。そして、叔父を見て「おお、

茂木そっくりだ」と仰られ、昔を思い出されたのか、暫く立ちすくんでいらっしゃいました。「茂木は、真面目でいいやつだった。本当に惜しいやつを亡くした」と仰られ、これを参考にするといいと、谷田部会の住所録と、佐藤孝一さんが発行された軍歌集「雲の彼方に」を譲って下さいました。家に帰って、夢中で「雲の彼方に」を読むと、そこには昭和隊の市島少尉や小川少尉のこと、佐藤さんご自身の体験も詳しく書かれており、もしかしたら、伯父の事も何かご存じなのではと思

い、お便りをさせて頂きました。すると、佐藤さんは、直ぐにお電話を下さって「手紙でいろいろやりとりをしても時間が掛かるし、積もる話も山程あるので、一度こちらへ来ないか」とのお言葉を頂き、6月4日に、宮城県の白石市のご自宅をお訪ねすることにいたしました。

佐藤さんの経営する「はたけなか製麵」の敷地には、黄色い特攻花が咲いていました。応接室に案内して頂くと、壁に昭和隊の卒業記念の集合写真が貼ってありました。もうこれだけでも、特攻戦死した伯父達への思いが、十分に伝わってまいりました。

佐藤さんは、武山海兵団への入団から土浦航空隊の予備学生時代、谷田部

航空隊、神ノ池での厳しい訓練、特攻隊募集のいきさつ、その後の訓練、富高への転進、鹿屋進出後の出撃を待つ日々、そして終戦、特攻隊の解散と、時には身振り手振りを交えながら、順を追って具体的にお話をして下さいました。伯父とは昭和20年3月1日の昭和隊結成以降に知り合ったとのことでした。「ふざけたところがなく、どしどし立派な武士（さむらい）だった。惜しいなあ、本当に惜しいやつを亡くした。」と言って下さいました。

佐藤さんは、軍歌集を5万5千部も自費出版された方なので、私からお願いをして「あの隊長も」と「あ、神風昭和特別攻撃隊の歌」を歌って頂きました。軍歌といえば、戦意を高揚させる勇ましいものとはばかり思っていたのですが、佐藤さんの歌声は、どこか物悲しげな響きで、勇ましさとは、やや趣が違うものでした。佐藤さんにとつての軍歌とは、出撃して還らなかつた同期生を想う鎮魂歌なのではと、そんな気が致しました。

帰りに、海軍第十四期飛行予備学生の手記をまとめた「学徒特攻その生と死」他3冊の本をお借りしました。「学徒特攻・・・」の表紙には、伯父達の第七昭和隊が攻撃した、米空母バン

カーヒルの炎上した写真が使用されて  
いました。私は、なんとかこの伯父の  
偉業、土田祐治さんや佐藤孝一さん  
にお伺いした話をまとめて、文書に残  
そうと思い、お借りした本は勿論のこと  
「あ、同期の桜」他も、もう一度読み  
直すことにしました。

8月のお盆に実家に帰って、父に伯  
父のことをいろいろ尋ねると、土浦や  
谷田部の頃と思われる写真を数枚出  
てきました。その写真を見て私は伯父  
と一緒に写真に収まっておられる方々  
が、どなたなのかを知る必要があると  
思い、9月16日に、再び白石市の佐藤  
孝一さんをお訪ねしました。

佐藤さんは、拡大鏡を出して一枚一  
枚写真を見ながら「これは佐々木だ、  
これは金子だ、これは柏倉か、これは  
石塚だな、これは市島だ、これは篠原  
だな、これは小川だ」と、次々と昭和  
隊隊員の名前を挙げられました。佐藤  
さんは、當時を思い出されたのか、じつ  
と写真に見入って暫く沈黙され、声を  
絞り出すようにして「よくこんな写真  
が残っていたなあ」と仰いました。佐  
藤さんの88歳とは思えぬ記憶力のお陰  
で、大半の方のお名前が判明いたしま  
した。

9月30日には、新潟県十日町市に、  
昭和隊の生き残りだった、円通寺の渡

辺賢一さんをお訪ねしました。昭和隊  
のことは、佐藤孝一さんにお伺いた  
り、本や資料でかなり理解を深めたつ  
もりでしたが、どうしても渡辺さんが、  
境内に建立された特攻隊員の像「雲意  
鶴情」と、同じく昭和隊の生き残りだっ  
た故内藤祐次さんが移設にご尽力され  
た「谷田部海軍航空隊」の隊門を見て  
おきたかったからです。

渡辺さんは、50代に脳梗塞を思い、  
かなり記憶力が衰えているとのことで  
でしたが「雲意鶴情」を建立された経  
緯や、隊門を移設された時の状況等を  
詳しくお話しして下さいました。私は、  
伯父のことをまとめた冊子の表紙に、  
この「雲意鶴情」と隊門の写真を使わ  
せて頂く事にいたしました。こうして  
皆様の協力を頂いて、11月に「神風特  
別攻撃隊 第七昭和隊 茂木忠の事  
跡」をまとめる事ができました。

それにしても、伯父の事跡をまとめ  
る過程で、海軍飛行予備学生第十四期  
会のパワーと団結力には驚かされまし  
た。戦後の復興が順調に進み、東京オ  
リンピックが開催された2年後の昭和  
41年には「あ、同期の桜」を刊行して、  
去らねばならぬ戦争のことなどは忘れ  
去られてしまったかのような時に、大  
反響を巻き起こし、翌42年8月には高  
野山に「あ、同期の桜の塔」を建立し

て、海軍第十四期会の存在を世間に知  
らしめたこと聞き及びました。

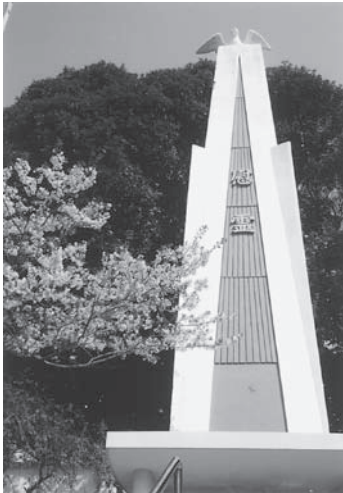
更に翌昭和43年7月には、貴重な歴  
史資料である第十四期会会報の第1号を  
発行し、それは最終号の平成18年の第  
38号まで継続され、その後も関東十四  
期短信と形を変えながらも、内容やボ  
リュームを維持し、今なお発行が続け  
られています。齢90に達しようといふ  
方々がです。そればかりか、日本各地  
では、毎年の恒例行事として慰霊祭を  
挙行し、更には台湾、フィリピン等の  
海外でも慰霊祭が挙行されていて、遺  
族の一員としては、唯々頭が下がる思  
いです。戦死した伯父達も「終戦から  
今日に至るまで、長い間本当によく  
戦ってくれた。ありがとう」きつと、  
そう言っているに違いありません。し  
かし、それでもなお、土浦で入室時に、  
伯父と一緒にだった江名武彦さんが「特  
攻命令は死をもって完結をする」と  
仰っていましたので、海軍第十四期会  
は、最後の一人になっても、その活動  
をやめるつもりなどないのかも知れま  
せん。

太平洋戦争の戦場に散華した特攻隊  
員の両親は既にもうこの世になく、そ  
の兄弟姉妹も高齢化して、特攻隊の事  
実そのものが風化してしまふことは、  
避けられない事なのかも知れません。

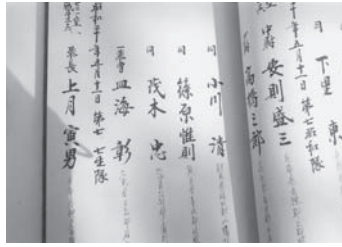
しかし、海軍飛行予備学生第十四期  
会の方々が残して下さいました、数々の史  
料の散逸を防ぎ、それを後世に伝えて  
いくことこそが、私ども遺族に課せら  
れた責務なのだと思います。伯父は、  
私にこの事を伝えたかったのではない  
でしょうか。

戦後、弟の残した足跡を少しでも辿  
ろうと、まだ小さかった三女の手を引  
いて、土浦、谷田部の同期生を訪ね歩  
いた伯母は、今年で94歳になりました。  
ラジオの海軍公布で弟の戦死を知り、  
いつまでも涙が止まらなかったという  
伯母は、92歳になりました。幼い頃に  
母を亡くし、二人で力を合わせて弟達  
の面倒を見た、そんな伯母達にとって、  
戦後67年目を迎えた今も、弟を失った  
悲しみが癒えることはありません。

かつて私の父が、こんなことを言っ  
ておりました。「最初のうちは、兄貴  
は犬死にをさせられたと思っていた  
が、兄貴達が命を賭けて戦ったからこ  
そ、今の平和があると思えるように  
なった」私は、この言葉の重さをよく  
かみしめ、平和の尊さを、次の世代に  
伝えていこうと思います。



平成23年4月9日 鹿屋基地の追悼式



この他に石嶋健三少尉、石塚隆三少尉が出撃しましたが、石嶋少尉は帰投途中に戦死、石塚少尉は帰投後6月22日再出撃で特攻戦死しました。



二階に遺書・遺品・遺影が展示してあります。



海軍第14期会が出版され遺族に配布されました。



4月12日鹿屋への第2陣進出後に残った隊員第五、第六、第七昭和隊員と生き残った隊員達です。



茂木忠少尉  
昭和20年3月1日昭和隊結成直後に撮影したと思われます。



茂木忠の特攻戦死するまでを時系列にまとめたものです。



第七昭和隊 第二小隊  
谷田部航空隊指揮所前



茂木少尉 谷田部航空隊の頃と思われます。

## 「菊池よ永遠に幸あれ」

—原田葉少尉の絶筆—

会員 原田里津子

太平洋戦争で、都城から沖繩方面に特攻出撃、26歳で戦死した叔父・原田葉（熊本県菊池市出身・第27振隊隊疾風隊）が出撃の前夜・昭和20年6月21日夜に書き残した遺書が、2年前、両親の家に残されていたことが分かりました。その『絶筆』は、長さ1メートルの紙に毛筆で漢詩や句を交えて書かれています。叔父の人生の集大成と思われまます。私はこの『絶筆』を初めて目にした時、暫く泪が止まりませんでした。出撃の前夜、どんな気持ちで書かれたのか・・・。私なりに色々な思いを巡らせてみました。死への覚悟を前に「菊池よ永遠に幸あれ」と南北朝時代に武勲を立てた先祖・菊池一族を称え「お父さんお母さんサヨナラ」と両親や兄弟へ感謝し「祖国よ健やかにあれ」と愛する国が平和であって欲しいとの祈りを籠めて、最後のメッセージを書いたのではないかと思います。叔父は幼くして母親を亡くし、私の母（原田少尉の次兄の嫁）を実の姉のように慕っていました。自分が外交官になつたら「姉さんをいろんな国に案

内する」と約束していたそうです。私  
が今一番会いたいと思う人は叔父で  
す。

この『絶筆』が地元で話題になり、  
新聞やテレビで取り上げられました。  
『平和をつたえる原田葉さんと私たち』  
と題した企画展が昨年8月9日から9  
月4日まで、菊池夢美術館で開催され  
ました。その間、予想を遥かに上回る  
反響を頂き、沢山の方々にご来場頂き  
ました。この企画展が実行に至るまで  
には、主催して下さった菊池温泉観光  
旅館協同組合の皆様はじめ地元関係者  
の皆様のご苦勞とご協力が、成功の源  
となりました。感謝しています。嬉し  
かったのは、陸軍の花房飛行跡地に  
ある菊池農業高校の生徒さん達が企画  
展に協力して下さった事です。会場に  
飛行機（四式戦・原田大尉の搭乗機）  
の形をしたパネルと、桜の花を模した  
メッセージ用紙を1500枚手作りし  
て下さいました。当日は用紙を来場者  
に配り「平和へのメッセージ」を書い  
てパネルに貼りました。飛行機は、沢  
山の桜の花で埋め尽くされました。

した。菊池様は、叔父が愛した菊池市  
の豪族・菊池一族の末裔で、現地の企  
画展にも足を運んで下さったそうで  
す。それがご縁で、菊池様が入会され  
ている特攻隊戦没者慰霊顕彰会に入会  
させて頂くことができましたし、9月  
の世田谷山観音寺での年次法要にも参  
列させて頂くことができました。これ  
は叔父・葉さんの引き合わせと感謝し  
ています。遺族としてこれを機会に今  
後も微力ながら協力させて頂きたいと  
思っています。

この度4月5日に知覧特攻平和会館  
を再訪しました。新たに発見された叔  
父の絶筆及び数点の短冊・勲章等を寄  
贈致しました。そして翌4月6日には、  
出撃の地・宮崎県都城市で行われた第  
36回都城市特別攻撃隊戦没者慰霊祭に  
出席。第27振隊遺族代表として御霊  
に献花をさせて頂きました。都城資料  
館にも数点の短冊を寄贈致しました。  
大変喜んで頂き、これが叔父の供養に  
なればと思います。沢山の偶然とお引  
き合わせに感謝致します。

『野畔の草 召し出されて桜哉』と詩つ  
た当時の原田葉さんの心境が、今更な  
がら思い起こされます。 合掌

前略 「絶筆」（注：文字・配列は原文のママ）

蹶然去郷赴国難  
一飛翔破千万里  
胸中無生死亦無  
疾風天来碎敵艦  
待つこと久し  
愈々大命降下致しました  
お母さんお父さん御喜び  
下さい  
盡忠菊池に生を享け  
た一本の雛菊如何に咲  
き出でますやらご期待  
下さい  
勿疑神州不滅理  
翠楠黄花共不絶  
堂々一菊咲志吐備  
今亦一菊咲冲繩  
畏友松尾敬宇中佐に  
負けない様立派に  
黄花を咲かせます  
頼忠不絶の傳統ある菊  
池に生れ育つた私は何たる  
幸福児でせうか  
君知否菊池精忠  
二十四代敢不変  
爾来久雖不見花  
誰使黄花得其秋  
身卑賤に生れて光榮  
の御召しを受く 不肖の



喜びは言ふに及ばず 一門  
一家の榮譽何にたとへませう

野畔の草

召し出されて桜哉  
数ならぬ身よにしあらば

うたかたと

思ひし賤が花咲可すとは  
お父さんお母さ サヨナラ

祖国よ健にあれ

天皇陛下万才

出撃前夜 六月二十一日夜

原田 栞

ご遺詠(短冊より)

生きるとも

死すとも清し今日の月

疾風隊 原田栞

散るときに 未練は見えず桜哉

疾風隊陸軍少尉 原田栞

◇ ◇ ◇

原田栞大尉は、早稲田大学法学部を卒業、昭和18年10月に志願して特別操縦見習士官一期生として入隊、太刀洗陸軍飛行学校本校に入校された。偶然だが、私の大叔父・倉形輝一も特操一期生(館林教育隊)で、特攻待機中に肋膜炎を患い、遂に出撃の日を迎える

事なく終戦を迎えた。大叔父が残してくれた資料には、原田大尉の教育隊時代の写真等があり、この度ご遺族にお見せする事が出来たことを嬉しく思う。大叔父は平成7年に戦友の元に旅立った。戦後は「生き残って申し訳ない」と、一所懸命に戦友会のお世話をしていた。父から「特攻隊の叔父さん」と聞かされていた。何度か法事で会った事はあったが、体験談を聞く事なく亡くなってしまった。今となっては、とても残念に思うが、その時は大叔父の心に無作法に踏み込む気持ちになれなかった。

ご縁のあったこの度の取材中、原田さんから「知覧の平和会館に展示されている叔父さんの遺品が、どのような経緯で納められたか分からない」とのお話を聞いた。たまたま若い頃にお世話になった板津忠正氏(初代館長)と面識があったので、書面にてお尋ねしたところ、大変詳しい経緯が判明した。記録として残したいと思ったので、板津氏に掲載許可を頂き、ここに紹介させて頂く。改めて、板津氏のご功績に、心からの敬意と感謝を捧げます。

### 『板津忠正氏の証言』

(倉形桃代記)

扱て知覧特攻平和会館内の立体的ケース内にある原田栞大尉の資料「野

畔の草 召し出されて桜哉」がどの様な経緯で納められたのか知りたいの事だと思えます。他にも何点かあると思いますが、展示されて居らず、まずこの条幅についてお答え致します。

後日訪問して拝見、正しく私の書いた物に違いありませんでした。戦後真先に駐留軍が来て検閲うけ、その際何十振りであった日本刀を惜しげもなく持って行けと言いやってしまい、一文にもならない特攻隊員が残して行った書き物を総てカメに入れ埋めていた、それが残った物ですと、条幅が何点か、あとはみの紙のノートに多々残されて居り、それ等も総て私に下さると云はれ、私は無論ことわりました。

昭和二十年五月沖繩特攻作戦で、私板津は兵庫県加古川にて特攻隊員となり、二十五日知覧に向け出発、同日熊本県菊池郡西合志町合生(現在の合志市合生)に緒方勲郎があり、この別棟に剣道の道場があり、ここに一泊しました。緒方勲氏は剣道の達人で道場主であったが、軍人として召集をうけ、当時は不在で愛知県犬山方面の木曾川周辺で軍の隊長として治安に当たっていた。この道場は特攻隊員の宿舎になつて居り、私は知覧に前進する前にこの道場で一泊した。

戦後、特攻隊員のご遺族捜しをして居る時、泊まったこの道場をも捜していた。昭和51年漸く見付ける事が出来、奥様に連絡をしたところ、後日奥様より「家に残された特攻隊員が書かれた資料の中に、貴方の書かれた物がありました」と連絡を頂き、吃驚した訳です。後日訪問して拝見、正しく私の書いた物に違いありませんでした。戦後真先に駐留軍が来て検閲うけ、その際何十振りであった日本刀を惜しげもなく持って行けと言いやってしまい、一文にもならない特攻隊員が残して行った書き物を総てカメに入れ埋めていた、それが残った物ですと、条幅が何点か、あとはみの紙のノートに多々残されて居り、それ等も総て私に下さると云はれ、私は無論ことわりました。

この様な名門の家にあつてこそ値打があるのですと断りましたが、貴方の様な方に渡した方が生きると思うと頑なに言はれ預かって来たわけです。知覧もその折には全々存在なく、亡き隊員のご遺族を捜していた時ですと、それ等をすべてコピーにとり御遺族を見つけた折には書かれた本物をお渡しして来ました。半分以上は特攻隊員でも戦死者名はなく、その者等も綴つてあつたので、総て知覧に持つて行き、私の家には写真位しか残さなかつたと思えます。

その中で条幅で原田栞大尉(死後の階級・二十二才・熊本県菊池市隈府出身)の「野畔の草 召し出されて桜哉」が遺されたもので、真筆が其処にあると言う事は、私が名古屋から熊本まで

三回ご遺族を捜しに来て、三回目に漸く見つけお渡ししようとしたら「貴方が遠い処を訪ねて下さった、その恩義に感じて、これを貴方にさしあげます。うちはコピーだけで結構です」とコピーだけ受取つて、真筆を其処に展示する事になったわけです。その隣に並んでいる辞世も、同じ隊、第二十七振武隊疾風隊員・熊沢弘之少尉は私と同郷、名古屋出身で始めから頂戴したわけで、それには、

「岩が根も砕けざらめや武士の 國の為にぞ思い切る太刀」

とあり、この辞世・さき程の句、そして其処に展示の冊子全部で百五十点が、熊本県西合志町の緒方勲先生の処に保存されていたのを昭和52年、私が見付け、全部頂いて知覧特攻平和会館の一番最後の立体的ケースの中に展示されているわけです。

以上、述べた通りです。原田大尉の姪子さんの手元にある資料も御一緒に展示出来れば亡き原田大尉もお喜びなさると思います。私が全行脚をして、姪子さんのお役にたつたりしたのも幸いです。よろしくお伝えください。  
(平成24年1月4日付・板津氏から頂いた書簡からの抜粋)

〈原田葉少尉の「絶筆」の写し〉

絶筆  
花  
花  
花

一飛翔破千百里

胸中無生死亦無

疾風天未碎敵艦

待てどくろく

公の大命待下野引

お母さんお父さんお母さん

下さい

お母さんお父さんお母さん

お母さんお父さんお母さん

お母さんお父さんお母さん

勿鏡神州を滅び

羽撃機 菊花を不絶

吾の一軍は味方此備

今亦一軍味方此備

長石松尾義平中流下

刀及針不刺主秋小  
菊花を咲かせ  
ます

残心不絶の傳統あり  
池を生れ育つたお母さん何だ  
か幸福を感じて

君は私の多池精忠  
二十四代新子  
刺し未久雖不見花

誰使菊花得具杖  
身身賊を生れて光栄  
のゆりかごを多く有るの

吾公は言あはば一門  
一家の学奉る何よたを合せう

お母さんお父さんお母さん

お母さんお父さんお母さん

お母さんお父さんお母さん

お母さんお父さんお母さん



昭和20年4～5月頃、実姉の嫁ぎ先大牟田市の濱田家の庭にて、中央原田少尉



原田 葉少尉

特集

特攻インタビュー（第7回）

海軍航空特攻

野口 剛氏

（公財）特攻隊戦没者慰霊顕彰会  
特攻ライブラリー取材スタッフ



野口 剛氏

「編注・当会では、特攻に関連する史実とその精神を後世に伝承するため、特攻関係者の体験談等を取材し、記録することを企画し、有志会員による「特攻ライブラリー」を立ち上げ、先ず、関係者のインタビュー記事を記録することにいたしました。特攻出撃の如何を問わず、特攻体験をされて九死に一生を得た方、特攻出撃を待機された経験のある方で、映像と写真を含めたインタビュー取材を引き受けて頂ける方がおられましたら、自薦他薦を問わ

ず、当会事務局までご連絡下さい。」

野口 剛氏軍歴（略歴）

- 乙種飛行予科練習生 第十六期
- 海軍上等飛行兵曹
- 第七二一海軍航空隊 戦闘第三〇六飛行隊
- 第七二一海軍航空隊 戦闘第三〇七飛行隊
- 第二〇三海軍航空隊 戦闘第三二二飛行隊
- 海軍神雷部隊直掩
- 日本本土空襲邀撃戦

特攻ライブラリー取材班

（五十音順）

- 及川 昌彦 世話人
- 神崎 夢現 進行
- 倉形 桃代 記録
- 提橋 律子 世話人
- 須貝 智行 写真撮影
- 高橋 暢 映像撮影
- 長尾 栄治 インタビュアー・構成

◆軍人にあこがれた少年時代

予科練に入隊する昭和16年は東京にお住まいだったのですか？

野口：はい。東京の世田谷に実家がありますので。父親の仕事の関係で霞ヶ

関にあった海軍省に住んでいたことがあるんです。5歳くらいの頃でしたが。海軍の制服が格好良くて、軍人にあこがれました。海軍省の次は……永田町の自民党の前に、今も赤レンガがあると思うんですが、そこに大蔵大臣官舎があったんです。二・二六事件の時まで、そこにも住んでいました。それで、国会議事堂の横を行ったところに陸軍省があったんです。そこに友達がいま

した。馬場もあって、馬に乗っている人もいましたけれど、陸軍と海軍を見比べて海軍がいいなと思っていました。多分、その頃から海軍にあこがれていましたね。

友だちの間で陸軍派、海軍派のようなものはありませんでしたか？  
野口：ありましたね（笑）。陸軍に行くんだしたら俺は騎兵になりたいとかね（笑）。私も中学2年の時、陸軍幼年学校に行きたかったんですが、20円だったか月謝を取られるんですよ。タダではないんです。学費が払えないから行けなくて。

当時の中学校は5年制ですが、中学3年生を修了した昭和16年に、予科練に入隊されています。卒業を待たずに志願されたのですか？

野口：はい、そうです。志願した理由があったのでしょ

うか？  
野口：やっぱり軍人になりたかったですね。それで、飛行機乗りになりたいと願望していました。

飛行機乗りを目指したのは何か理由が？  
野口：中学に入る頃、少年航空兵というのがあると学校で教えてもらって、そういう方面に行きたい者は行けという話を聞いたものですから、それから飛行機に関心を持ちました。最初は民間のパイロットになりたくて、洲崎の方に民間の飛行学校があったんですが、飛行機に乗って色々学ぶのに1時間幾らで……もう忘れてしまいました。が、当時でも考えられないほど高額で。そんな高いお金を掛けてなるんだから少年航空兵になった方がいいかな、と（笑）。

◆乙種予科練へ

野口さんは乙種予科練に入隊されています。中学生に進学した方は予科練でも、甲種に進むのが一般的だと思っのですが。（※注1）

野口：甲種も合格しました。ですが、私は中学3年で予科練に行くものから、卒業している先輩方が甲種に沢山いると知っていましたので、一緒に競争するには体力的に追い付いて行け



予科練時代

ないと思ったので乙種を選びました。  
 ——甲種と乙種は自由に選べたという  
 ことでしょうか？  
 野口…はい、選べましたね。私は、昭和16年12月に入隊の予定でしたが、いつまでも通学するより早く軍人になリたかったので、横須賀鎮守府にお願いして、半年早めて、乙飛16期に入れてもらったのです。  
 ——甲種と乙種の違いは何でしょうか？  
 野口…進級が早いという違いがあつて、教育期間も甲種は1年半、乙種は2年半ということでした。当時、乙種も教育期間を2年に短縮していましたが。  
 ——予科練に入隊された頃、アメリカとの関係が悪化してやがて戦争となります。そのような雰囲気を実感する出来事はありましたか？  
 野口…昭和16年5月1日に予科練に入りましたので、大東亜戦争はまだ始まっていませんでしたが、12月8日に



飛行練習生卒業記念（昭和19年3月）

戦争が始まって、一段と厳しく鍛えられるな、と思いましたがね。  
 ——その後、ミッドウェー海戦やガダルカナル島の戦いなどで戦局が悪化していきますが、そういう戦況はご存じでしたか？  
 野口…訓練の方が先だったので、戦況について詳しく知られることはありませんでした。  
 ——予科練から飛行練習生、そして実戦部隊へ進む過程を教えてくださいますか？  
 野口…予科練に入って1年ほど過ぎた昭和17年5月に、土浦の水上練習機で

適性検査をしました。そのときに操縦員、偵察員に分かれ、私は陸上機の操縦員に行くということだけが分かりましたが、土浦の人員が増えて収容しきれなくなり、できたばかりの三重の海軍航空隊へ配属になりました。そして、そこで予科練を卒業しました。  
 ——その後は鹿児島県の出水航空隊に入りました。ここは、徳島の戦闘機隊の訓練基地だったので、練習航空隊になり、そして飛練（飛行練習生）が初めてできて、そこに一番最初の練習生として配属されました。そこを卒業するときに、戦闘機、あるいは爆撃機、攻撃機に分けられました。当然、誰しもが戦闘機を希望するのですが、爆撃機に配属の者もいれば、艦爆に行った者、艦攻に行った者もいるというわけです。そのとき、私は戦闘機に行け良かったと思っていましたね。  
 ——有名な話で、海軍の搭乗員になるには「人相見」がいて、顔の骨格などで適性を選ばれていたといいますが、野口さんご経験がありますか？  
 野口…はい。土浦でやりましたね。  
 ——予科練に入隊した時、体験されたということでしょうか？  
 野口…はい、そうですね。しかし、どういふところを見られたのか分かりま

せんけれども、されたのは間違いないですね。予科練に入る時は、1週間ほど予科練で寝泊りしながら適性検査をしました。  
 ——当時の映像に残されていますが、ぐるぐる体を回されて平衡感覚を試すというの？  
 野口…あれはもちろん、当然やりましたね。それで後ろから押し出されて、真っ直ぐ歩けるか、立つか、やられませんでした。それから操縦桿を持たされて、重くなったり軽くなったりするのが、そのときにどれくらいの幅で動くのかというのもしました。それと、いっぱい穴が開いている円盤があつて両端に針が付いていて、円盤が落ちないよう注意して廻すつていうのもありましたね。

◆厳しかった予科練教育

予科練の教育は厳しかったですか？  
 野口…厳しかったですね。  
 ——有名な七つボタンの制服でしたか？（※注2）  
 野口…私が入った頃は、まだジョンベラ（水兵服）でした。後から七つボタンに…1年経たないうちになりましたね。  
 ——同じ予科練でも、乙種と甲種で



九三式中間練習機



零式艦上戦闘機二一型



零式艦上戦闘機二二型

は教育の場は完全に分かれていたのですか？

野口…はい、分かれていました。自分一人用に机が与えられていて、教科書やなんかは全部その中に入れて兵舎へ帰るわけです。風呂に入らなければ怒られる、床屋に行つて頭を剃らなきゃ怒られる、洗濯してないと怒られる、破れた服を着ていると怒られる……もう大変でしたね(笑)。

最初は座学なのですか？

野口…乙種は2年です。甲種は1年半。機？

野口…はい、赤とんぼですね。あれを6ヵ月。その後、実用機を4ヵ月。

教官が後ろに乗ってポコポコ殴られた？

野口…そうですね(笑)。

私など車の運転くらいでしか想像できないですが、初めて飛行機を操縦する時、緊張しましたか？

野口…ええ。「筑波山よーそろ」と言

われたのに、「お前はどこへ向いて飛んでいるんだ」と(笑)。

離陸と着陸では、着陸の方が緊張されましたか？

野口…そうですね。離陸は脚がバタバタしていても良いから、とにかく真っ直ぐ向かって、速度がついたときにスッと引けば上がっていきますけどね。降りるときは、あそこに降りるんだと……。そう、出水に行ったときに

格納庫の中に綱を張って、もっこをぶら下げたんです。それに乗ってすーと滑ってくるんですよ。8mつていうところでアイドルパーにして三点に降ろして着陸する。海軍は三点着陸。これは航空母艦に降りるためにね。航空母艦は……「ここで艦尾かわった」と、ここで8mなんですね。それで降りてきて柵に引つ掛けるわけです。これが、陸上飛行場でも母艦を基準にしてやらせていたので、8mという高さ

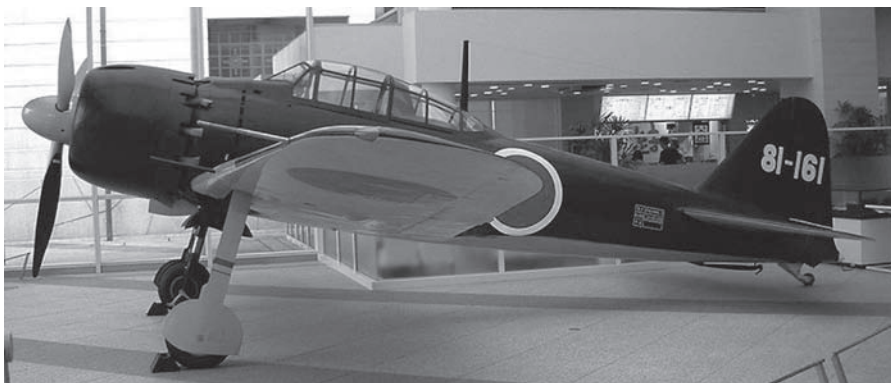
絶対には守らせる高さでした。格納庫の中には8mのところには赤線が引いてある。だから、すーと滑ってきながら、横を見ながら、8mの高さを覚える。それで高さを覚えろってね。

野口さんの頃は、まだ訓練の間も十分にあったのでしょうか？

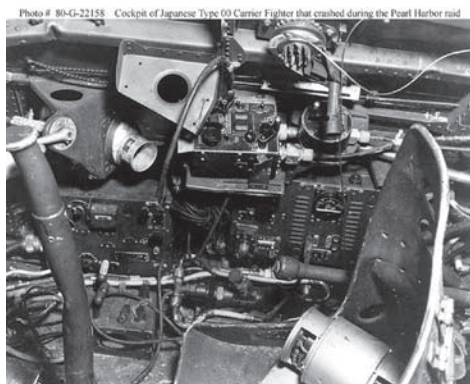
野口…そうですね。正規の期間、訓練しましたから。私の1期か2期くらい後まででしょう。それから、特乙(※注4)というのができて、予科練を数ヵ月で出て行った。はつきり覚えていないですが、それで早く飛行訓練という。それから丙種(※注3)。丙種は予科練3ヵ月かそこらで全部、実機訓練に行きましたからね。

戦争末期になると燃料が無いから訓練も短くなったそうですね。

野口…そう、燃料が無いからね。だから



靖国神社遊就館の零式艦上戦闘機五二型



零戦二一型の操縦席

ら、2年くらい後に入った人は水上特攻に行かされてましたね。飛行機乗りが水上特攻に行っていました。予備学生も同じようにね。

——戦争中、そういう状況は分かりましたか？

野口…軍隊時間で総合600数時間ではないでしょうか。私は戦闘機ですから、1回あがって降りてくるまでに30分から40分くらいでしたけれど、爆撃機の方は1回で5時間も10時間もです。1000時間くらい乗ってたんじゃないかと思えますね。そのかわり

野口…分からなかったですね。僕らのときは松根油を使って訓練したことがないんですよ。ガソリンですよ。でも日本海軍では一種類しかなくて、91ガソリンと言って、オクタン価91のもので、紫色の燃料ですね。それで訓練していました。赤とんぼは87でした。私は、訓練は正規の期間やりました。飛行時間はどれくらいだったのでしょうか？

野口…分らないかったですね。僕らのときは松根油を使って訓練したことがないんですよ。ガソリンですよ。でも日本海軍では一種類しかなくて、91ガソリンと言って、オクタン価91のもので、紫色の燃料ですね。それで訓練していました。赤とんぼは87でした。私は、訓練は正規の期間やりました。飛行時間はどれくらいだったのでしょうか？

野口…はい。卒業して今度は大分の戦闘機教育隊で実戦、実機を習いました。

野口…そうですね。そのかわり

野口…そうですね。乗った飛行機で全然違うわけです。すると、単純に飛行時間が長い方がベテランかというと、そうとも限らない。

野口…はい。卒業して今度は大分の戦闘機教育隊で実戦、実機を習いました。

野口…そうですね。そのかわり

野口…そうですね。乗った飛行機で全然違うわけです。すると、単純に飛行時間が長い方がベテランかというと、そうとも限らない。

◆実戦部隊で零戦に乗る

野口…そうですね。そのかわり

野口…そうですね。そのかわり

野口…そうですね。そのかわり



昭和20年2月頃

しかったですね。

——その時期の訓練は？

野口…まずは離着陸訓練をして、それから特殊飛行ですね。宙返りをしたり背面飛行をしたり、ロールしたり。その後に空戦をやるわけです。空戦も、優位の状態、劣位の状態、同位の状態と三つの状態で実弾射撃訓練をするのです。その後は編隊飛行の訓練をして、卒業ということになります。

——その頃の教官は、南方で実戦を経験した搭乗員もいましたか？

野口…はい。怖かったです。怖かったですね、実用機訓練の時は……。練習機の際は爆撃機や攻撃機の教員や教官がおられました。戦闘機は余りおら

れなかった。実用機の場合は、同じ戦闘機乗りでないと教えてもらえなかったの、それが、ちょうど直系の先輩で戦地から帰ってきた方がほとんどだったので、大分の戦闘機隊の時は、とにかくきつかったですね。

——今でも名前を覚えている教官の方はいますか？

野口…本田(稔)さん。甲種予科練の5期の方ですね。その方は、戦後、航空自衛隊へ行かれて、三菱重工へテストパイロットとして行かれた方です。私も戦後、民間に行っているときに仲良くさせていただきました。

——

——当時は鬼のような。

野口…ええ、そうですね(苦笑)。大分の4カ月の間にカレンダーに印を付けていましたが、殴られなかった日は(約120日中)19日しか無かったですね。まあ、きつかったですよ。

——その時の厳しい訓練は、その後役に立ちましたか？

野口…はい、効いてますね。

——どのような時に、役に立ったと実感されましたか？

野口…そうですね。陸軍も海軍もよく、「ただ殴られていた」という話を聞きますが、私達はそうは感じていなかったですね。やはり、自分が悪いのだと感じていましたから。だから、普通の生活する上で班長でも階級の上の方でしたが、それほどいじめるようなことは無かったと思っています。

### ◆神雷部隊に志願

——大分基地での教育が終わった後はどうされましたか？

野口…4カ月が過ぎ、卒業して、筑波の実戦部隊に配属されるのですが、そこで5人だけが大分に残されることになりました。3カ月ほど操縦教員としての練成をして、筑波に配属になりました。筑波では予備学生の間練習機の教員をしていました。その時に神雷

部隊の話がきました。日本ではこれ以上の部隊はできないと聞かされた。ただし行ったら最後、帰ってこれないということ、自分の家庭のことも考えて長男はダメだとか、戦闘機に乗って国に尽くしたいという者はいるかと思われた。この部隊に行きたい者はマ

ルを書いて出さないということになった。ちょうど同期に仲の良かった者が二人いまして、それじゃあ一緒に行くかということで、行くことになりました。その後、三沢航空基地へ行つて、予備学生の13期の後期生に零戦の実施部隊の教育をしました。そこで、一段落がついたころに神雷部隊への転勤命令がきて神ノ池へ行きました。

——神雷部隊への志願ですが、いつ頃あったのでしょうか？

野口…昭和19年8月ですね。牧大尉という分隊長がおられまして、この方も戦地から帰った方で顔や手に戦傷を負った方でした。この牧大尉が、行ったら戻れない、こういう隊名のだけでも、行きたい者はマルを書いて出しなさいと言いましたね。我々はその時にマルを書いて提出してあって、三沢にいる時に転勤命令がきたというわけです。

——昭和19年3月、飛行練習生卒業。6月から三沢基地。そして11月に神ノ



神雷戦闘機隊集合写真 最後列右から5番目 野口上飛曹

の教員をしていました。その時に神雷

部隊の話がきました。日本ではこれ以上の部隊はできないと聞かされた。ただし行ったら最後、帰ってこれないということ、自分の家庭のことも考えて長男はダメだとか、戦闘機に乗って国に尽くしたいという者はいるかと思われた。この部隊に行きたい者はマルを書いて出さないということになった。ちょうど同期に仲の良かった者が二人いまして、それじゃあ一緒に行くかということで、行くことになりました。その後、三沢航空基地へ行つて、予備学生の13期の後期生に零戦の実施部隊の教育をしました。そこで、一段落がついたころに神雷部隊への転勤命令がきて神ノ池へ行きました。

池に転属となるわけですね。

野口…そうですね。

——神雷部隊が「桜花」という特攻兵器を使う特攻隊であるということ、当時、知っていましたか？

野口…いいえ、分からなかったですね。ただ、行ったら帰ることはできない部隊であると聞いていました。特攻かどうかは分かりませんでした。

——志願という気持ちは自然に出たものですか？

野口…うん。出ちゃったですね(笑)。長男や片親は考えてもいいぞと言われてましたけれども、長男ではないし両親もいるし、と。

——そこで配属されたのが、第七二一海軍航空隊第三〇六飛行隊だったのですね。

野口…神ノ池に行った時、副長の五十嵐中佐がおられたわけですが、畠山と言う者と二人で行きましたら、「お前は戦闘機の専修だろう。それならば三〇六へ行け」と言われました。だから、最初の頃は何だか分からないが、また戦闘機に、零戦に乗れるのだから、思っていました。しかし、三〇六には人が余りおらず、何をしたいのか分かりませんでした。

そうすると、2日後には、群馬県の大田飛行場へ行って零戦を受け取って

くるよう言われたり、あるいは三菱に

行つて来いと言われて取りに行き、試験飛行をやつて、持つて帰ってきたら、今度は、厚木に行つて機装してこいと言われて機銃やらを積んできたわけ

です。全員がそのようなことをしていたので、三〇六飛行隊には誰がいて、どのくらいの人材がいるのかということが全然分かりませんでしたね。

すると、神ノ池基地に配属された当初は、まだ部隊の編成中のような状態であつたと？

野口…はい、そうですね。まだ訓練をするような状態ではなかつたわけですか？

野口…はい、ないです。そのころ、周りから色々話を聞いたところ、零戦でエンジンをカットして降りてきてるのがあるとか、面白い飛行機があるぞと聞いた。それから、やつと部隊として揃つて会うようになって、桜花機のを聞いて桜花機の格納庫に連れて行かれて初めて理解したわけです。

——初めて桜花をご覧になったときはどう思いましたか？

野口…プロペラは無いし、計器は二つか三つしか付いてないし、それでロケットが付いているというので、どういふ風に戦うのかと思つていたら、一式

陸攻もあつて、一式陸攻に積んでいくと聞かされました。その桜花の部隊に行く方が特攻隊だと聞きました。そこで、我々は、目的地まで連れて行くのが仕事なんだと分かりました。神崎大尉が分隊長のときにもよく言われたのですが、「腕で神雷を護れなかつたら身を持つて護れ」と。目的地までは何としてでも護つていかなければならぬと感じていましたね。

それは、昭和19年頃の話でしょうか？

野口…そうですね。昭和19年の暮れに近い頃の話ですね。

——そうすると、フィリピンの関大尉の特攻は報道されていませんか？

野口…私などは、まだ知りませんでしたね。関大尉については聞かされたとは思いますが、いつ頃だったか記憶が曖昧ですね。

野口…三〇六の戦闘隊にはよくおいでになりました、お酒を飲んでるときにも来られまして、「いっちょ頼むぞ」と、べらんめえ口調で話されて親しかったですね。

野口…三〇六の戦闘隊にはよくおいでになりました、お酒を飲んでるときにも来られまして、「いっちょ頼むぞ」と、べらんめえ口調で話されて親しかったですね。

### ◆野中隊長の思い出

——神雷部隊隊長の野中五郎少佐は、いろいろ有名なエピソードがある方ですが、お会いになりましたか？

野口…三〇六の戦闘隊にはよくおいでになりました、お酒を飲んでるときにも来られまして、「いっちょ頼むぞ」と、べらんめえ口調で話されて親しかったですね。

野口…三〇六の戦闘隊にはよくおいでになりました、お酒を飲んでるときにも来られまして、「いっちょ頼むぞ」と、べらんめえ口調で話されて親しかったですね。

相当豪快な方だったらしいですね。

野口…正しく、そういう感じですよ。この写真は、昭和19年12月に連合艦隊司令長官が基地を訪問のときの写真ですが、野口さんも一緒に写られているのですか？

野口…はい、はい、はい。そのときのことを覚えていらつしゃいますか？当時の連合艦隊司令長官は豊田副武大将ですね。

野口…そう、一緒に写真撮るから、いる者全員来いってことになって……。当時、こんな偉い人に会うのは初めてでした。

——神雷部隊の一員であつたということは誇りに思っていましたか？

野口…特殊部隊だと考えておりましたし、誇りに思っていましたね。他の部隊とは違つと、日本に一つしかない部隊であるという誇りがありました。

——桜花を護衛する任務ということ、特別な訓練はありましたか？

野口…一式陸攻の援護訓練というのをしました。敵が来襲した時の護り方や攻撃方法の訓練をしましたね。一度だけですが、昭和19年12月の暮れも迫つた頃、大分まで合同訓練に行きました。

そこで、一式陸攻をバリカン運動で護つていく飛び方とか、敵が来たらど

護つていく飛び方とか、敵が来たらど



ういうふうにするかということとを大体的見当を付けながらやりましたね。大分で一泊くらいして、2日後ぐらいに帰りましたが、天候が悪く、編隊は無理なので単機で帰れということと言われまして単機で帰りました。

——今と違い、計器類も不十分で、単機で行動するのは危険だったのではないですか？

野口…我々、戦闘機乗りは計器飛行というのをやらずに、ある程度感覚で、もうそろそろ神ノ池じゃないかなともぐって見たら、ちょうど羽田の上で、羽田と書いてあったので、もう少し先が神ノ池だと分かっていましたから、それで帰りましたね。

——そのときは事故なく全機戻れたのでしょうか？

野口…いえ、2機くらい帰ってこなかったですね。

——当時、事故で失われた飛行機は相当あったのでしょうか？

野口…はい、相当ありましたね。ですが、当時はスモッグなんかありませんから、三沢辺りから霞ヶ浦に用事があって、あるいは筑波に用事があって帰ってくる時など、地図はいらなかったですね。5000mから6000m上空から日本海も太平洋も見えるから、地図がなくてもそのまま帰ってしまし

た。あのころは天気の良い日は非常に視界が良かったですよ。

——そういう時、やはり日本は綺麗だなと思いませんか？

野口…ええ、思いましたね。楽しみながら飛んだこともありませぬ。

——やがて、神ノ池から九州へ？

野口…昭和20年に入ってからです。2月にフィリピンに行くという話は聞いたのですが、駄目になり、今度は台湾へ行くということになりましたが台湾も駄目で、それじゃ九州ってことで都城に行きました。九州は、陸軍と海軍と基地が二つあって、どちらか分からずにみんな陸軍の方へ降りてしまつて大変でした。

——陸軍と海軍は仲が悪かったとよく聞きますが、そういう場合にはどうでしたか？

野口…親切にしてくれましたね。「海軍基地は隣ですよ」って話だったので、もう夕方だったので一晩泊めてもらって翌日もって行きました。そして、都城で猛訓練が始まりましたね。空戦訓練ばかりでした。

——そういう訓練では、一式陸攻や桜花の部隊も一緒だったのですか？

野口…いいえ、違います。都城には零戦だけで行きました。それで、すぐ宮崎に行っただけです。宮崎に行ったとき

には陸軍の「靖國」という爆撃機(※注4)がありまして、海軍の偵察員が乗って爆撃に行くということがありましたけれど、一式陸攻や桜花と一緒に訓練というのは大分の合同訓練以外やっていません。

——一式陸攻や桜花の搭乗員と直接接する機会は無かった？

野口…ほとんど無かったですね。

——戦闘機隊と陸攻隊は完全に分かれていたのですか？

野口…はい、居住区も別でしたからね。

——戦闘機隊の搭乗員や上官などは相当親しくなりましたか？

野口…はい、親しくなりましたね。直系の先輩もいましたし、同期もいましたし、甲も乙も丙も一緒でしたからね。

——三〇六飛行隊は機数も多かったのですか？

野口…はい。最終的には60機くらいあったと思います。そして、今度は宮崎から富高基地へ行きました。富高では邀撃戦が始まりましたので、訓練と実戦ばかりしていました。

——直掩の戦闘機隊の雰囲気はどうでしたか？特攻出撃の掩護ということに気が荒れるというのは無かったですか？

野口…特に無かったですね。彼ら、陸攻隊の居住区に行くことも無かったです

すし、同期に誰がいるのかというの分からなかったですから。

——訓練をしながら出撃の日を待っていた？

野口…はい、そうです。

### ◆B29との邀撃戦

——その頃はB29による爆撃が活発になっていく時期ですが、空襲はありましたか？

野口…昭和20年3月18日の邀撃戦をやるまでは余り無かったと思います。その邀撃戦の後からは、絶え間なく来たという状況だと思います。

——3月9日、10日は東京大空襲があったわけですが、ご存じでしたか？

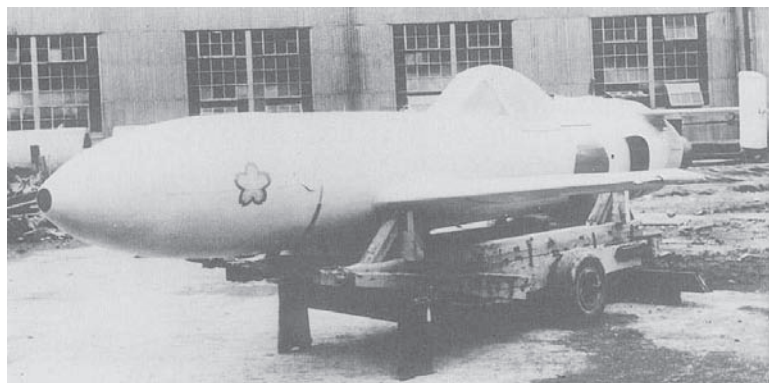
野口…東京に空襲があったとは聞きました。

——そうした時、ご家族と連絡を取る手段はあったのでしょうか？

野口…いいえ。全然ありませんし、別段考えもしなかったですね。

——3月18日の邀撃戦のお話を聞かせていただけますか？

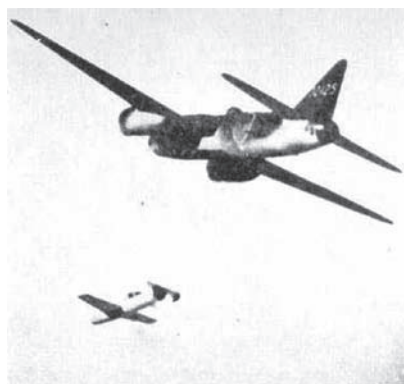
野口…私の初めての空戦になったわけですが、私たちの一番機は西村少尉といい、操練の23期の方で戦地帰りでした。水上機から来られた方で、「俺について来い」と言ってくれました。そして3番機は私の同期の小須田という



桜花



桜花の弾頭部



一式陸攻から切り離された桜花

者でした。それで、朝の7時すぎに上空に上がって初めての空戦を行いました。

西村少尉は上空に上がっても、すぐには戦いませんでした。8000mくらいまで高度を取って、空戦から外れ出て行くこうとする敵機に上から攻撃するというやり方でした。ああ、なるほどこういうやり方があるのだと、そ

のとき初めて習いましたね。

——初陣のときは、やはり隊長機に付いていくので精一杯でしたか？

野口…はい、精一杯でしたね。だから気が付いたら機銃の弾がもう無くなっているんですよ（笑）。面白いもので、引き金の引き方によっては、すぐに弾がなくなってしまうものなのです。やはり戦争というものはやってみないと色々と分からないものなのだと思いますね。敵機が火を噴いて落ちていくのを見たりして、最初はやはり足が震えましたね。武者震いか、怖くて震

えたのかは分からないのだけれど（笑）。

——当時の戦闘機隊ですと一個小隊4機？

野口…4機でしたね。

——初陣の、その後はどうだったのでしょうか？

野口…初陣は4回ほど着陸しては、燃料と弾薬を補給してまた上がってと繰り返しました。しかし、敵機も次から次へと繰り返し、帰ったらまた来て、帰ったらまた来ましたからね。その晩、私達は20機ぐらいやられたと思います。それで、私が一番仲の良かった畠山という者が戦死していました。その晩は、そのまま鹿屋基地へ行けということになって仲間のうち4機ぐらいが、零戦の後ろに一人整備さんに乗せていきました。私達は翌日、残ってい

る者全員で鹿屋に行きました。3月18日に遊撃戦をやって、19日に鹿屋に機体を選んで行って、20日は休んで、3月21日に神雷攻撃でした。

◆神雷部隊出撃！

——神雷部隊の出撃は事前に知らされていきましたか？

野口…色々聞いてみると、前もって攻撃命令は出ていたようです。第1回の神雷攻撃は。私達は当日の朝9時頃だったでしょうか。偵察機からの連絡で「敵の艦船上空に戦闘機が上がってない」と報告を受けて攻撃に行くぞ、と知らされました。それから飛行機を引っ張り出して、お昼前頃から爆撃機から先が上がっていきました。

——では、野口さんが出撃命令を聞いたのは当日ということでしょうか？

野口…はい、当日です。まず、一般的な攻撃命令が出て、三〇六戦闘隊は隊長から、「今日の攻撃は大事な攻撃で、かつ、シビアだぞ」と言われました。そこでまた、「自分の腕で護れなかったら身を持って護れ」と言われて攻撃が始まりました。

ですが、18日の遊撃戦で飛行機も、大分くたびれて修理しなければならぬ部分があるから、全機出撃はできないかもしれないと聞きました。で



第一神風桜花特攻神雷部隊 出撃前の様子

すが、「二機でも多く上がったいくぞ。頑張り」と、言われましたね。

野口さんが出撃されたのは午後になってからですか？

野口…いえ、午前中です。陸攻よりも零戦の方が速いですから、陸攻が編隊を組んで上空を通過した頃に私達は編隊離陸してましたので、直ぐに追い付いてしまうわけです。

そこで一式陸攻部隊と合流して

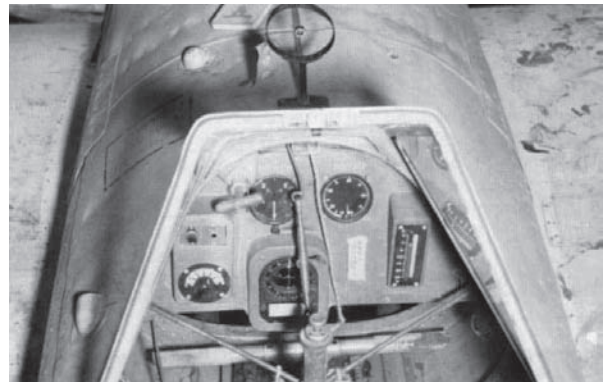


一式陸攻の胴体下にとりつけられた桜花

直掩の任務に就いた？

野口…はい、そうです。

野口さんの小隊は陸攻部隊のど



桜花の操縦席

の辺を飛んでいたのでしょうか？

野口…左側の一番後ろでした。その辺りで、上に行ったり下に行ったり左右に振ったりしていたわけです。

合流した後は、そのまま、真っ直ぐ沖繩を目指したのですか？

野口…はい、そうです。

どのくらいの時間を一緒に飛んだのでしょうか？

野口…確か、お昼頃に上がって14時頃までだったと思うので、2時間くらいではないかと思えます。後方は気にせず、とにかく、くっついて行けばいいと思って飛んでいました。それで、無

線機の性能が良くなかったもので、私のところまで聞こえなかったですから、何かあれば、そばに寄って行って手信号で合図しました。途中から飛行機が遅れていくとか、途中で引き返すだとかは余り見ていませんね。だから、結局、全部で何機行くことができたのか私は分からないんですよ。

陸攻隊を見るのは久しぶりでしたか？

野口…そうですね。大分での合同練習に行ったのと同じように護って付いて行くという感じで。天気の良い日でしたね。

陸攻には桜花が搭載されてましたか？それをご覧になりましたか？

野口…そうですね、ぶら下がってました。私には、敵の船団も見なかったわけですよ。一番後ろで飛んでいたのが前しか見ていなかったわけですが、後ろを気にしてなかったのが良くなかったと思うのですが。

そこに敵機が現れた？

野口…そうですね。何時ぐらいとかは分かりませんか？

野口…分からないですね。私は左側の最後尾で、上に上がった下に行ったりのバリカン運動をして飛行していたときに敵機にやられたわけです。



雷電

——敵機は編隊のどの辺りから攻撃してきたのでしょうか？

野口…後ろですね。後ろの上からやられたんです。私は方向舵を撃たれました。そして、後ろから来た敵機は我々の編隊の横へ行きました。敵機は私の左側に出ましたので右から高度を上げ

て戦おうと思ったわけなんですけど、そのまた後ろに別の敵編隊がいたので切り返して高度を下げました。

しかし、方向舵がやられてしまったので、動かなくなってしまったので、余り時間が経つと打ち落とされるのが関の山と思いついて、低空に移動しなければと思いました。そこで270度方位に、3度から5度くらい振りながら南大東島を見付けて、40分から50分かかったと思いますけど、不時着しました。

——敵機の来襲は、方向舵を撃たれたショックで初めて分かったのですか？

野口…そうですね。敵機を見る間にどんどん落ちていってしまったので、敵機が何機来てどうだったのかというのはちょっと私には分からないですね。そのまま、南大東島に突っ込んでいってしまったから。

——野口さんが編隊を離脱するとき、仲間の編隊が撃ち落とされるのを見ましたか？

野口…はい。火を噴いてるのが見えませんでした。

——野口さんが島に不時着しようとしているのを追いかけてくる敵機は無かったですか？

野口…はい。低空に逃げているときに追ってきている機は無かったです。

——南大東島に不時着するまでの間、どんなお気持ちでしたか？編隊を離れざるを得ず、後ろめたい気持ちもありましたか？

野口…それはもう、後ろめたいというか。飛んでいるときには後ろを見てなかつたですからね。

——無線などで、味方に状況を知らせることは出来なかつたのでしょうか？

野口…無線も外してありました。代わりに電鍵がついていました。ボイスの方はほとんど駄目でしたから電鍵になつていましたね。零戦で悪い部分は無線機」と「ブレーキ」で、中島の飛行機も三菱の飛行機も余り良くなかつたですね。

——ブレーキが良くなかつたということは、停まらないということですか？

野口…そう、停まらない。片利きになつてしまい、機体がぶれるので使わない方がいい。

——ブレーキの利き方が中途半端だつたということでしょうか？

野口…そう。片利きになつたり、非常にブレーキが悪かつたですね。

——島への不時着は海岸でされたのですか？

野口…いいえ、飛行場です。草っ原の飛行場があるのです。

——万一の時はそういう島を不時着基地として使っていたのでしょうか？

野口…大東島とか、喜界島とか、種子島がそうでしたね。

——不時着する時の指示があつたのですか？

野口…はい、そうです。

——不時着された後は、部隊に直ぐ連絡をしたのでしょうか？

野口…いいえ、全然していません。基地には通信設備が何も無かつたのですか？

野口…無いです。

——そうすると、不時着した後はどうされたのでしょうか？

野口…電話を掛けるにしても電話番号も分からなかつたし、単純に燃料を補給してまた飛び立つだけのことだったのですよ。

——では、燃料を補給して飛び立つつもりだつたのですか？

野口…そうですね。燃料を補給してもらいました。そこでは、山のように積んであつた砂糖が燃えていてもつたいたないなあと思つていました。機体を直してもらうにも、まずは穴をふさがないと飛ぶことができないということ、今日は戻ることができないと言われまし

た。そこで一泊して、翌日帰りました。

——帰ったのは鹿屋基地に？

野口…はい、鹿屋です。

——鹿屋に帰還して報告をされたわけですか？

野口…報告をしたところ、9機しか戻っていないと聞かされました。そして、私の本隊である富高へ戻るように指示が出ました。

——戦闘機隊だけで9機しか戻らなかったわけですか？

野口…そうです。どうやら三〇六飛行隊だけが出撃したわけではなかったのです。二〇三空からも何機か応援に来ていたらしいのですが私達はそれが分かっていなかった。

——3月21日の出撃で三〇六飛行隊は何機出撃して何機戻らなかったのですか？

野口…他の隊員と会わないものですが、よく分からない。3月26日には第二〇三海軍航空隊が鹿屋基地の近くの笠之原へ異動したので、私も神雷部隊からは外れました。兵舎の無い、山の切り通しの防空壕の生活となる笠之原に異動してから何人か集まり始めて、「二〇三空で私も3月21日に出撃した」などという話になった。爆撃機18機と戦闘機が40数機行ったと思うのですが、皆、やられてしまったと思います。

ほとんどが一撃で落とされていましたからね。

——敵襲で一式陸攻は回避行動が出来たでしょうか？

野口…一式陸攻は桜花を積載して重量が目一杯で何もできなかったと思います。

——何もできずに撃ち落された陸攻や桜花の搭乗員のことを思うと如何ですか？

野口…もう、すごく残念ですね。二〇三空に行つてからも3、4回ほど菊水作戦に出撃しているんです。沖繩の伊江島まで行ったことがありますからね。一式陸攻が攻撃に出るときに一緒に出撃したこともありますよ。直掩で。

#### ◆桜花突入の瞬間を目撃

——昭和20年3月21日後の神雷部隊の出撃に直掩で参加しているのですか？

野口…ええ、そうです。もう、まとまった出撃でなく、戦闘機が5、6機だとか7、8機のとときに一式陸攻が1機、2機で付いていきました。そのときも、目的地までは自分が守つてやる、という気持ちでいきました。

——二度目以降の直掩で敵機に襲われたことはなかったのですか？

野口…それはなかったですね。

——では、敵艦隊の近くまで行けたということでしょうか？

野口…はい。なので、1回だけ敵艦に桜花が突入するところを見たことがあります。

——桜花が敵艦に突入した記録はアメリカ軍にもないようです。それは何の記録に残っているのでしょうか？何年何月頃か分かりますか？

野口…記録はないと思う……。二〇三空に行つてからの話です。何時というの覚えていませんね……。

——昭和20年4月か5月くらいでしょうか？隊名は覚えていらつしやいますか？

野口…いや、覚えていません。昭和20年4月から7月なのは間違いないですが……。下の周りが全部、輸送船で勘定してられない。すごい数で。で、我々が上空にいるのが分かると動こうとしてエンジンで白波が出るので、なお良く見えました。

——桜花が体当たりしたのは輸送船ですか？

野口…いえ、軍艦です。空母ではなかった。空母のいる太平洋側でなかった。軍艦か駆逐艦か、巡洋艦でした。

——当たった瞬間はどうでしたか？

野口…真つ黒な火柱のようなものが立っていた。しかし、そればかり見て

いたら今度はこちらがやられてしまう。一式陸攻を守つてやらなきゃいけないから。恐らく、彼等達が戦果報告していると思います。

——野口さんは直掩ですが、攻撃の結果報告もするのですか？

野口…します。一度だけでした。突入を見たのは。

——桜花の戦果がどれくらいだったのか、現在もよく分からないようですね。

野口…そう、分かっていないと思います。僕らの時も2回しかないからね。その場で、一式陸攻が敵艦に向けて落としたところは覚えていました。

——桜花の作戦には3月21日を含めて2回参加したということでしょうか？

野口…そうですね。現実には桜花の攻撃には2回参加していますね。後は、僕は行っていません。菊水作戦といつて後からデータなんかを見ると、何年何月何日に飛んでると分かるだろうけど、我々も記録を取つてる暇がなかったです。

——戦後の戦友会などで、一式陸攻や桜花の隊員の方達と会つたりされましたか？

野口…靖國神社で行われた神雷部隊の慰霊祭には、私は1度か2度しか行つ

たことがないです。そのときは、整備さんとかも来ていたのですが交流はありませんでした。

### ◆ 邀撃戦と特攻待機の日々

野口さんはどちらの方でしたか？

私は、三〇六の戦闘隊の人しか知らないですからね。三〇六の戦友会には何度か行きましたけれど。でも、先ほども言いましたように、昭和20年3月26日に二〇三空に移って三〇六飛行隊から離れましたから、戦後、三〇六飛行隊の戦友会に行っても知っている人がほとんどいないわけですよ。たまたま、私が三沢で教えていた13期の後期の人たちが「教官だ」と言ってくれたので、そのとき教えてもらい分かったのですが、私が3月26日に異動した後、新しく三〇六飛行隊が出来たらしいが、私は知らなかったのです。終戦後に知りました。3月21日の攻撃に参加した者で生きているのが私しかない。生還した者も、その後の戦闘で皆さん、戦死されました。二〇三空に行っただけで、戦死されている。

二〇三空にいた者はその後、笠之原から福岡県の築城基地に行くことになりました。築城では半分の飛行機が戦闘機で、もう半分は爆弾を抱くことになった。投下機がないからワイヤーでくくっていました。なので、そのまま編隊にぶつかっていく。そういう格好で毎日過ごしていました。

野口さん、毎日邀撃戦で、いつ爆弾を積んだ飛行機に乗るか決まっています。邀撃戦で上がるときは爆弾を外しました。8月15日まで猛訓練をしました。実弾で射撃訓練をして、いざ出撃というときに大分から司令官がきて、お前達は攻撃をやめろと言われてやめました。特攻出撃の待機期間は1ヵ月くらいでした。

いつ特攻命令が来るか分からない日々は、どのようなお気持ちだったのでしょうか？

野口…1日のうち、午前中が特攻待機で午後から邀撃に上がるとか。あるいは、その反対の流れですね。そして、夜になったら夜間戦闘機と交代。なので、夜になると帰ることが出来た。敵の攻撃の来る時期や編隊の状況によっては爆弾を抱えたまま行かなければならないということもあるし、そうでなければ戦闘に上がる。

昭和18年ごろのお写真と特攻待機中のお写真とは顔つきが違うようにな……。

野口…そうですね、全然違いますね（笑）。でもね、怖いと思うことはあまりなかったです。やはり、鍛えられた

せいなのかなと感じますね。沖縄へ爆撃機を直掩して行ったり制空に行ったりして、敵機が2、3機でも見付けた時は、「こんちきしょう」と思って攻撃したりしていますからね。私だけでも4機くらいは落としています。

それと、二〇三空に行つて間もなくでしようか、笠之原から邀撃戦で上がつて……いつ頃だったかちよつと忘れちゃったけども、鹿児島の上空3000mで集合ということがあったのですが、ちょうど私の飛行機は部品を取り替えていたので間に合わなくて、後から編隊の後ろに付いて上がつていったとき、先上がった編隊が敵機に攻撃を開始しようとしていたので、敵機4機が私の方に向けて、撃ち落されてしまったのです。搭乗していた戦闘機が火を噴いてしまったので落下傘で脱出して、錦江湾に3時間ほど浮いていたことがありました（笑）。3時間ほどで直ぐに助けられましたので、その晩には笠之原基地に帰ることが出来て、戻ったら隊長から「お前がやられたところが見えていた」と言われましたね。

その頃には野口さんもベテランの一人になっていましたか？

野口…そうなっていましたね。

入隊したての頃とベテランに

なった頃とでは、色々違いがありましたか？

野口…そうですね。でも、仲が良かったと思いますよ。ああいう状況での仲間というのは大事でした。上も下もなかったと思いますね。笠之原の防空壕にいたときは軍医長と一緒にいましたが、一緒に酒を飲んで、「もういい加減、酒はやめろ」などと話して仲が良かったですよ。

その頃には乙種も甲種も関係なかった？

野口…もう、関係なかったですね。予科練のときだけちよつと色々ありましたが（苦笑）。

### ◆ 終戦と復員で心が崩れかける

昭和20年8月15日の玉音放送はお聞きになりましたか？

野口…聞きましたが、訳が分からなかったですね。ジャリジャリと雑音がひどく聞き取れなかったのので、「一生懸命やれ」というふうに理解して猛訓練に入りました。そして、そうではないということでも訓練から攻撃に切り替えようということになりました。太刀洗の陸軍が、「海軍はまだ訓練をしているのですか？爆弾をください」と言いに来ましたね。

では、放送を聞いた時に敗けた

という意識はなかったわけですか？

野口…全然なかったですね。その後、軽拳妄動は止めろということを書かれ、解散するから自宅へ帰るよう指示が出て帰ったのですが、後ろ髪引かれるような思いでしたね。

—— 帰れ、というのは自宅へという意味ですか？

野口…はい、そうです。

—— 帰るにしても、空襲などで交通手段も破壊され、大変だったのではないですか？

野口…私なんかは、そのまま飛行機で帰れと言われました。ちょうどその時、親は群馬県の桐生にいたのですが、東京なら帰ったことがあるんですが、桐生には帰ったことがなかったので、佐藤少尉（今年の3月に亡くなられた方なのですが）が桐生に住んでいたことがあるというので一緒に帰りました。飛行機に乗って帰っていいと言われたのですが、故障したら困るし、燃料とかもどうしたらよいか分からないので乗っては帰りませんでした。

—— 飛行機はどうなったのでしょうか？

野口…銃弾は海に向かって撃ち込んできました。それで、飛行機はひっくり返して海に放り投げて帰ってきました。

—— 九州からの復員の途中、広島や大阪などを通ったと思いますが、廃墟となった街を見てどう思いましたか？

野口…やっぱりひどいものでしたね。

—— 原子爆弾のことは、既にご存じでしたか？

野口…はい、聞いていました。最初は「新型爆弾」ということで聞いていました。

—— そういう話を聞いてアメリカに對して敵愾心を強くしましたか？

野口…はい、強くなりましたね。大有りでした。

—— やり返してやるぞ、というよう

野口…はい、はい。広島も戦後行ってみてびっくりしました。

—— 途中で進駐軍に会いましたか？

野口…進駐軍には会いませんでした。まだ昭和20年8月19日頃でしたから。

拳銃を持ったまま帰りました。その後、9月17日くらいに呼び出しが来て、また築城に行つたんです。行つたら、もう既に兵舎も何も無くなつていました。そこには残務整理の人がいて、お金をもらったんですが、幾らだったか

忘れしました。その時、4人いたので

が米一俵をもらいました。その帰りに熱海の「志ほみや」（しおみや）という旅館に寄つて……今でもありません

ど、もらった米がある間……5日間ぐらい「志ほみや」に居て（笑）。お金

を使い果たして帰りましたね（笑）。

—— 基地にいた頃、一般の人々との

野口…民家にいましたのでありました。

—— 戦中と戦後で、国民の態度が

変わったと感じたことはありませんか？

野口…終戦直後の頃にはまだ、何もなかったように思います。ただ、大阪で

「敗残兵」と言われて大喧嘩したことはあり

はありました。列車で帰る途中、陸軍も一緒に乗っていましたが、乗つて

た電車が混んでいて、「敗残兵ばかり乗るから、俺たちが乗れないんだ」と。

当時は開けっ放しだった電車の窓から聞こえてきたので喧嘩になりましたね

（笑）。

—— 軍隊への反感は時間が経つにつ

れ大きくなっていったのでしょうか？

野口…そうですね、ありましたね。戦後、民主主義などというそれまでは聞

いたこともないような言葉で、これからは一生懸命生きろと言われても、そ

れまで一生懸命、人殺しをやつてきたのに、いきなり生きろと言われてもどうしたらよいかというジレンマはありましたね。

野口…そうですね。カチンとくるようなこともありましたが、半分崩れちゃつたような感じにはなりませんでしたね。怖いっていう感情がなかったたので、親も心配しただろうと思いますね。この先どうなってしまうのだろう、と。

—— 野口さんも、崩れたような部分

がありましたか？

野口…ええ、ありましたね。怖いものがないから喧嘩でも何でもやっちゃうっていう感じでした。

—— 野口さんにとって戦争が終わつたという実感は、いつ頃、感じたのでしょうか？

野口…そうですね。家に帰ってノンビリしてからですね。ああ、これでもう死ななくてすむなと。しかし、それでもものものに手が付けられなかったですね。そこで父の会社に入れてもらったのですが、落ち着いて仕事はできなかったですね。

### ◆民間航空会社に就職

—— その後、民間のパイロットになられたということですが。

野口…ええ。講和条約が締結された昭和27年に航空再開ということで、直ぐに飛び込みました。ですから、一番早い口だと思えますね。で、航空局というのができていまして、「おおとり会」

というのがあったのですが、これは民間人たちの会でね。軍の出身者でも良いかと聞くと大丈夫だったので、そこへ入会して、手伝いをしながら勉強して、民間のライセンスを取らせてもらった。昭和28年12月に、民間の操縦士、通信士、航空士の試験を受けて、昭和29年1月にライセンスをもらいました。その後、海軍の予備学生出身者などが作っていた民間の航空会社に就職しました。

—— そうしたら直ぐに、「また鉄砲の付いた飛行機に乗らないか」と誘いがきました。しかし、もう民間の航空会社に就職したので、と自衛隊には行きませんでした。民間のライセンスがあるなら三尉で入隊させてやると言われましてたけどね(笑)。それから、ずっと民間航空会社でした。

—— 戦後の人生の中で、戦時中のことを思い出すことはありませんでしたか？

野口…戦後、昭和20年8月から桐生の家に行ったときは毎日寝てましたね。昭和21年のときに父の会社に入れてもらったのですが、戦後の何も無い状態でしたし、仕事は何かできるのかと問われても何もできなかったですから、ずさんだ生活を送っていましたね。

—— 戦争のことを冷静に話せるよう

になったのは、もつと後になってのことですか？

野口…そうですね、戦後に民間の飛行機にカムバックするまでは、余り戦争に関する話はしませんでしたね。

### ◆特攻で死んだ人を忘れないで

—— 当時と今では価値観や考え方が違います、なぜ特攻というものが行われたか、野口さんのお考えはありますか？

野口…特別な考えはないです。戦争だから仕方がない、としか思っていなかった。16歳程度の、余り世間に出ていなかった若者でしたから、言われるままに、教育されるままに従ってきたというのが事実だと思います。だんだん後になって、色々考えることは出てくるのですが、心に秘めています。世の中は変わってきたと感じるが、一人ではわめいたって仕方がないと思いき生きてきたという感じですね。

—— 特攻について、特別な思いというものがありませんか？

野口…特別攻撃隊というのがなくてもね…例えば自分の飛行機が火を噴いてしまっていて、敵がそこにいたらぶち当たっていくということをやった人から、それだけじゃ足りないというの

で特攻ができたのではないかと思うのですがね、それが一人の人間の命を奪うわけですからね。今は一人殺しても大変なことになるのに、戦争ともなればそういうことがなくなってしまうわけですから、二度とそんなことはあっちゃいけない。アメリカ人が特攻をクレイジーと言うのもね、納得ができると思いますよ。私がボーイング社に行ったとき、ちょうど12月8日でした。さっきのジャンボ機の話で行ったときですけれど、そのとき、昔、零戦に乗っていたのだと言ったら、戦争を、特攻を、日本人は好んで行ったのかと聞かれたりもしましたね。だけど、我々としては命令もさることながら、国のために命を捨てることは、当時の我々としては承知したことだと伝えましたら、左右に首を振っていましたね(笑)。

今、特攻の話を楽しんではほしいとは思わないけれど、そういう人たちも日本人としていたんだなあと思ってしまうですすよね。私はね、この一生は、慰霊には常に行きたいなと思っ

ています。強要できるわけではないし、これからあつてほしいことではないですがね。この大東亜戦争で特攻があつて、そして終わったと。だから、亡くなった方にはね、生きている間は一生、慰霊をしていきたいなという気持ちで

す。

—— 慰霊ということでは靖國神社に行くのが一番多いですか？

野口…はい、多いですね。同期や色々な地方での集まりというのがほとんどなくなってしまいましたから。

—— 乙飛16期で戦闘機乗りの同期生は60名ぐらいのことですが、戦死された方は相当多いですか？

野口…はい、多いですよ。戦闘機専修で60名ぐらいですが、水上機から上がってきたのは数知れませんが、どれくらいかは分からないですね。戦闘機乗りになってから死んだというのは、ずいぶんいると思います。戦争で水上機の使い道が少なくなりましたからね。なので、水上機から陸上機へどんどん上げていった。結果的には戦闘機乗りで死んでいるわけです。

—— 予科練の頃の集合写真を拝見しましたが、戦後も生き延びられた方というのの中にも何名かいらつしやるのでしょうか？

野口…いたにはいたのですが、今は皆亡くなっていますね。民間航空会社でも亡くなっています。まだ旅客機までいかない小さい飛行機の時に亡くなっている方が4人も5人もいます。

—— 戦友が亡くなられるというのは、ただの知り合いが亡くなるという



こととは気持ち的に違いますか？

野口…そうですね、違いますね。なので、年賀状の前に喪中がきがくれば、私は必ず電話しています。奥さんとかにね。

### ◆零戦について

野口…野口さんは零戦の52型に乗っていらつしやったのでしょうか？

野口…神雷部隊のときは52型ですね。訓練は21型22型に乗っていましたけれど。

——零戦の操縦について野口さんの印象は？

野口…舵の利きが良いですね。僕は乗りやすい飛行機だと思いますね。零戦以外の戦闘機には乗っていないので、他は分かりませんが乗りやすい機だと思えますね。それから、戦後、日本にマスタングP-51が零戦と一緒にきましたよね。あれを見に行ったんですけど、零戦は全重量で2・7tですけど、マスタングの方は5tからあるんですよ。ですから突っ込むと加速度がついてね、スピードがどんどん出る。零戦は軽いから、パワー一杯入れても浮こう浮こうとするから抑えていなければならぬ。それで、スピードがなかなかつかない。

だから戦闘機としては、昔は巴戦と

かのために、ひねり込みとかの技を習得させられたのですけれど、どちらがいいのかと言いますと、今は巴戦なんてやらないですからね。その後に出て来た紫電なんかの方が良いね。空戦が始まるときに紫電なんかだと、空戦フラップといってGかけるとひとりでフラップが出るようになっていたわけですから。

5tのと、その半分の2・7tくらいの飛行機じゃ、なかなか一撃必殺とできないですよ。

——坂井三郎さんの著書に、特攻で突っ込むときに最後に機体が浮いてしまつて失敗した例も数多くあるのではないかとありますね。

野口…そうですね。300ノットくらい出たら、頭が上がる上がろうとするからスパッと抜けるんです。それで、それだけスピードが出てると引き上げようとすると翼にもすごく重たいんですよ。だから、翼の付け根のところにはシワが寄って塗料が剥げるくらい飛んでもぶっ壊れない飛行機ですからね。そのかわり、2Gから3Gかかっちゃうんだよね。だから、よだれは垂れるわ、鼻は垂れるわね(笑)。今のジェット戦闘機に乗る人はGスーツを着るからそういうことはないと思うけれども、我々のときは腹にこんな厚い

ベルトをして、腹をぎゅうつと空戦バンドって言ってね、腹を一杯締めてやっていると臍物が下がっちゃうぞと言われてましたけど。飛行作業をやっている、ゼロ戦のリップを2人で肩に担がされたこともありましたね。そのくらい上がってしまうんですよ。だけど、いい飛行機でした。ま、自分が乗った飛行機は大抵いいって言うんですけどね(笑)。

シオルダーハーンズがあるのですけどね、これはかけてられないですよ。ゆるゆるにしておかないと。後ろを七分、前を三分見なければいけないから。バックミラーは無いですからね、とにかく後ろを見なければならぬ。最初に教わったのは、まず高度をとって、いきなり戦闘ばかりせず、隊列から外れていくような敵機を撃ち落とすとかね。自機の弾が吸い込まれていくように行って、敵機がバツと火を噴くと気持ちいいですからね。あるいは機が反対になって落つちていくところが見られます。そこでやめておかないと、上にいつ敵機がついてくるか分からないので。

——シオルダーをゆるくして、激しく動く空戦で困らないのですか？

野口…大丈夫です。腹のベルトをしかりしてやるから。たとえ背面になつても、重力がかかっていますからなんとも

ないんですよ。背面飛行をやつて操縦桿をぼんと前に押せば遠心力がなくなつてぶらさがつてしまします。宙返りをやるんだつたらベルトがなくてもいいくらいです。速度が速いので遠心力でぐーっと抑えられているから。

——特殊飛行や曲芸飛行をするとブラックアウトというように視界が真っ黒になると言いますが、そのような経験はありますか？

野口…引き起こしの時にはなりますね。目の周りに星が飛びますね。だからフットバーに足を掛けておくよりも計器盤に足引つ掛けて。飛行機はすべてくれるから何とか上がつてくれるけれども。

——映画でのように行儀いいものはない？

野口…そうですね。もう一つ、映画などでは空戦が始まると風防を開けるときの音がしますが、あんなのはあり得ないのです。Gがかつてしまつて風が入ってきてしまつて、とても出来ないんですよ。だから風防かけて眼鏡外しておかないと良く見えないんですよ。

神雷部隊の本の中に、神雷攻撃のとき、アメリカ軍が言っていることは、日本の飛行機が火を噴いて落下傘降下したというのがありますが、あり得

ないんですよ。なぜかという、帝国

海軍は攻撃に行くとき落下傘の装帯を付けていかないんです。陸軍は分かりますが、海軍がよそへ攻撃に行つて落下傘で降りることはあり得ない。神雷攻撃に行くときも我々は落下傘を付けていかなかったですから。アメリカ軍が、日本軍が落下傘で降りたと言っているのはあり得ないと思います。

——邀撃戦では落下傘を付けるのですか？

野口…はい、付けていきます。自分の国の中であれば。

——例えば沖繩とかに出撃する時は付けない？

野口…はい。だから身軽でした。バンドが無いですから。乗ったたら落下傘の装帯を、ここにカチャッと飛行機につけておけば飛び出せば開くようになっていけるわけ。尻の下に落下傘を敷いてますからね。

——では、野口さんが戦争映画で空戦シーンをご覧になると苦笑する場面が多いと。

野口…そう、そう。なんで風防開けるんだよと（笑）。

——零戦以外の新しい飛行機に乗りたいたったことはありますか？

野口…あります。筑波にいる時、雷電は操縦訓練まではさせてもらいま

た。

——雷電は搭乗員からの苦情が絶えなかったといえますね。

野口…前が見えないです（苦笑）。雷電は離着陸しかやったことがないです。が、まっすぐ進むと前が見えないので、左右に動きながら先に進まないといね。紫電も水上機から改造したものでしたし、紫電改は脚を短くしたものでだいぶ良かったらしいですね。

——戦った相手は、グラマンF6Fが一番多かったですか？

野口…最初はF4Fでした。F6Fは零戦の上をいってましたからね。

### ◆民間生活で役立つ軍隊経験

——特攻について、日本だけでなく外国でも色々論議されていますが、野口さんが、これだけは言っておきたいということがありますか？

野口…特攻隊戦没者慰霊平和祈念協会に入会して、初めて世田谷観音にお参りに行った時に、若い方々が、会員の紹介だとかで協会に入会されていたり、一生懸命、慰霊活動などをしてくださつてるといふことに感激しましたね。それと、零戦会という会があるのですが、搭乗員だった方は高齢になられてしまいましたから、事務処理から会議の処理まで全部若い方々にして

いただいているのですが、本当にそういう若い方々は偉いなどと感心しているんです。そういう会議に行くといね、よくしてくれるのです。本来は私達がやらなければならぬようなことなのでしょうが、80歳を超えた人たちがばかりですから、そういう若い方々がやってくれて我々のしてきたことを少しでも受け継いで、後に伝えてくれたらなあと思いますね。私一人が語り継いでもたいしたことはないと思うんです。

——戦争をして良いなどとは決して思っていないですね…。やはり、厳しいですよ…。戦争は。人殺しをやるわけですからね。

余談になりますが、私は社団法人日本航空機操縦士協会の理事をしています。専務理事、副会長で最後は辞めたのですが。昭和60年にジャンボ機が御巣鷹山に墜落しましたよね？あの時、事故調査委員会が出した事故の嫌疑というので、ああいう状況になったときに、どういう訓練をしておいたらよいものかとアメリカに行つて調査してくるといふ話になったときに調査委員になりました。では、アメリカのどこへ行くかということになり、ダグラス、ボーイング、最後にNASAですね。サンフランシスコのエイムズ、NAS

NAS

Aへ行くと決まって行ってきました。

——メーカーは飛行機の安全性の説明のみで終わったのですが、NASAでは「日本には航空大学があるではないか、そこではどのような教育をしているのか」ということと、飛行機にも自動車と同じように耐空証明というものがあつたのですが、「航空法上で耐空証明がなくなつて飛行機を、どういふに操縦するのか」ということを日本の航空局は調べて来いというのか？」と言われました。続けて、「耐空証明の無くなつた飛行機を操縦するということとは考えられない。耐空証明のある飛行機の操縦が当たり前であつて、それよりも色々な事故のスタディをすること。NASAにはアメリカ中で起きている事故のデータがあるから、幾らでも送るので必要であれば言いなさい、このこととで言われて帰国しました。

——帰国して、レポートにはNASAにこのように言われてきましたと報告したところ、操縦については何も意見はなく、事故のデータをスタディしていれば自ずと得るところがある人は自身で考えるでしょうという内容で終了したと報告しました。次に、自分の会社で、私は査察操縦士をしていたのですが、訓練規定の中に、次はどうい

うことをやりますよとエマーゲンシーにかけて書いてあるわけです。だから次から次に、次、何がある。次に何がくるというのは分かっているわけですよ。ですから、操縦させても上手なわけですよ。「ああ、そういうことか。それじゃあ、それを一つずつしてみようか」とずらしてみると、滅茶苦茶になってしまってますよ。言われたとおりのことは覚えているけれども、順序を変えたら駄目なんだと。事故はその順序どおりには来ないのだと。その訓練マニュアルを変えさせるということをやりましたね。それが、非常に効果があつて、調査に行つて良かったと感じましたね。

——実戦では思い通りにはいかないということと同じですね。

野口…ええ、そうです。もう、何が起きるか分からないからね。

——搭乗員だったときの経験が、その後の人生に大きく役立ったということですね。

野口…はい、大きいですね。やはり、習ったことは忠実に守らなければならぬと思います。基本はどこまでも基本なんだと。基本があつて応用があるのだという感がありますね。神雷攻撃にしてもそうです。操縦中は後ろが見えないですからね。前を向いて操縦して

いて、後ろから敵機が来たらどうするかという、そういうことは言われませんでしたね。今の民間航空機のように前だけ見て操縦していればいいのとは訳が違います。後ろから敵機が来るということはないですからね。戦争とはやはり状況が違いますね。

私は、海軍に行つて悪かつたことなんて一つもないんですよ。例えば日常生活の上においても、洗濯をして洗濯物を干すにしても船が基準ですから、何時に洗濯物を干して何時に取り込むのか、取り込むときには乾いていないべならぬというわけですから、それには干し方もいろいろあるわけです。そういうことも習つたんです。ほかには、年がら年中、掃除はしていなければならぬ。それと、団体生活している上では船の上で一人でも風邪を引けば皆が風邪を引いてしまうのではないかと、うこと、ほかの病気でもそうです。これらは民間の生活をしていく上でも重要で、それを学んで来れたのだから海軍に行つて良かったなと思つています。なので、皆に話して聞かせていますよ。

——若い人達を見ると、軍隊生活を体験させた方がいいと思ふことはありますか？

野口…ある、ある（笑）。

——どういう姿を見るとそう思ひますか？

野口…そうですね。電車の中で座り込んでいるのとか見ると、「立てないのかなあ。それだけ腰抜けになつちやつたのかなあ」と思いますよ。だけど、もう時代は変わったのだから、そんなことを考へてはいけませんよ。

僕らの学生時代は代々木の練兵場に通つて行く教練がありましたけれど、そういうのがなくともいいから、毎日、起きる時間、寝る時間、勉強する時間というのを規則正しくやるような生活をどこかで経験してくると、その一つの方法じゃないかなと思ひますね。だから、予科練なんかでも兵学校と同じように、日中は普通学の勉強をさせるわけですね。で、午後からスポーツをするとか、午前中は普通学を学んで午後は軍事学を教わるとか。夜は夕食をとつたら6時から3時間は温習といつて、教室へ行つて今日習つたことを復習する、明日のことを予習するつていう習慣付けがあつたわけです。ああいう教育は非常にいいと思ひうわけです。他には、階段を一段ずつ上がるのと段抜かして、すつ飛んで歩かなければならなかつた。隊内で二人で歩くときも並んで走らなければなら

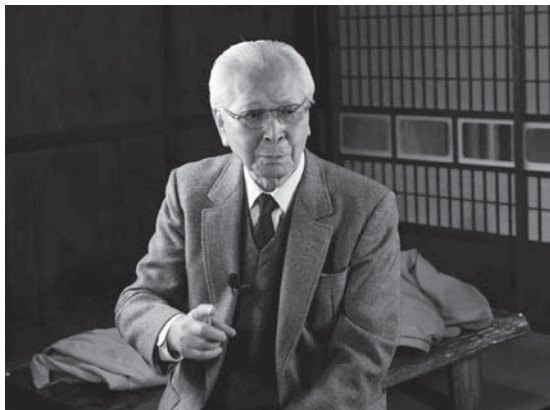
なかつた。そういうことが日常生活に役立ち、一つ一つ節度のある生活ができるようになるのではないと思ひますね。だから、軍隊は否定しなさい（笑）。

### ◆若い人に「犠牲的精神」を持つてほしい

——今は時代が違うからというので、年配の方は黙つてしまふ。若い人は聞く耳を持たない……。それではせつかくの野口さんが経験されたノウハウというか、人生の生き方も含めて貴重な財産が受け継がれないように感じます。そこで、野口さんが孫の世代や子孫にこれだけは遺したいというものがあれば、是非お聞かせください。

野口…確かに僕らが育つたときには、正に軍国主義の真つ最中でしたよね。しかし、あの教育が良かったか悪かつたかということは度外視して、中には、あんな教育はなつてないという方もいるかもしれないです、良かったという方がいるかもしれないですが、それはやはり、それぞれ個人で判断していただきたいと思ひますね。

僕らなどは、小学生のころから軍人になりたいと言つていた当時、希望はあつたし、それに向けて邁進していたわけです。今の人は平和ボケしている



からかなあとは思いますが、自分が何をやりたいんだ、自分は何をしたいんだという思いを、なかなか大学生ですら掴めていないんだと……。話をただ聞いていられるんですけども。それでいい会社には入れなければ駄目なんだと。そして、就職もしないでアルバイトをして生活しているというようでは先のことを考えていないのかと……。今は年金の問題などでも、ああいうふうにして忘れちゃった人、あるいは会社がつぶれてしまつて年金をもらえない人もたくさんいるのですから、これから、そういう状況に自分

とか、今の年金制度にも早く入つておかなければという考えはないのかと思いますね。

だから、僕らのときでもそうでしたが、会社を定年になつたときでも誰もが色々なことを教えてくれるようなことはなかつたですよ。我々がいろいろな経験をした後に、いろいろな問題が出てきて、こうだあだという状態になつたわけですよ。わがままに生活をしてはいけないなど、ひとつ節度のある生活がいいなど。それと軍隊などのように、助け合うという一つの精神を「犠牲的精神」と我々は言つていましたが……。あれは非常にいいことだと思います。勉強場の掃除に3人！と言ふと10人くらいがバァーつと出てくる。ああいうふうだね。例えば学校の給食当番なんていうときにも、10人くらい並んで出て来て皆の面倒を見てやるみたいな、そういう感じにならないものだろうかと思えますね。

そうすることで、自分が困つたときに誰からでも面倒見てもらえるようになるのではないかと思いますね。だから軍隊だとか我々がそうですね。カット1訓練も2隻3隻揃うと自然に競争になつたり、毎年暮れになると1万mの競走があるわけですが、分隊単位でやるわけです。そうすると、自分だけ

早くてもダメなんです。全員がそろつて入つてこなければダメだと。そして途中で加つた人が背中を押すなり担いででも完走させるといふような精神を持たされるのが、今の世の中にあつても良いのではないかと思ひます。だからにも、そんなに難しいことではないから、そういうような世の中になつたらいいのになと思ひます。そうすれば、我々がやってきたことも、今の若い人にも少しでも理解してもらえらんじやないかと思ひますね。

——今日は貴重なお話をありがとうございます。今日は貴重なお話をありがとうございます。……了……

※注1・予科練（飛行予科練習生）の制度が発足した昭和4年（1929年）の応募資格は高等小学校卒業者で満14歳以上20歳未満。教育期間は3年（予科練での基礎教育2年6ヵ月、飛練6ヵ月。後に短縮）だった。昭和12年（1937年）、更なる搭乗員育成のため、旧制中学校4学年1学期修了以上（後に3学年修了程度）の学力を有し、年齢は満15歳以上20歳未満の志願者から甲種飛行予科練習生（甲飛）制度を設けた。教育期間は2年（予科練での基礎教育1年6ヵ月、飛練6ヵ月。後に短縮）。従来の練習生は乙種飛行予科練習生（乙飛）と改められた。

つボタン」の制服が採用されたのは昭和17年（1942年）12月から。

※注3・丙種：「丙種飛行予科練習生」の略称。昭和15年（1940年）10月発足。海軍部内の一般下士官兵の中から飛行科を志願し、合格した者を採用。予科練での基礎教育3ヵ月、飛練6ヵ月と規定されていた。特乙制度の新設で昭和18年（1943年）3月が最後の入校となった。海軍最下級の学歴者が多く、約7300人の入隊者のうち、実に75・4%に当たる約5500人が戦死した。

※注4・特乙・「乙種（特）」飛行予科練習生の略称。昭和17年（1942年）12月発足。従来の乙種と丙種に相当する者を、乙種2次試験合格者の中から年齢17歳以上の者を採用し、予科練での6ヵ月の基礎教育と飛練の教育を6ヵ月受けさせると規定されていた。戦況の悪化の中、乙飛合格者の優秀者を選抜して短期養成するためのもので、卒業生の多くが特攻要員に充足された。

※注5・陸軍の「靖國」という爆撃機：陸軍四式重爆撃機「飛龍」のこと。海軍では、海軍指揮下の陸軍雷撃隊を「靖國部隊」と呼び、それに所属した雷撃機型の「飛龍」のことを、非公式に「靖國」という名称で呼んでいた。

※注2・予科練の代名詞となつた「七

## 前村 弘 (陸軍特幹一期生) 軍歴

- 1925年(大正14年)6月 生誕。
- 1941年(昭和16年)5月1日 乙種飛行予科練習生として土浦海軍航空隊に入隊。
- 1942年(昭和17年)7月29日 配属変更により三重海軍航空隊へ入隊。
- 1943年(昭和18年)5月26日 第16期乙種飛行予科練習生教程卒業。  
第32期飛行練習生操縦特修者(陸)として出水海軍航空隊へ入隊。
- 1943年(昭和18年)11月24日 第32期飛行練習生陸上練習機教程卒業。大分海軍航空隊に入隊。
- 1944年(昭和19年)3月25日 第32期飛行練習生教程卒業。筑波海軍航空隊附 大分航空基地勤務。
- 1944年(昭和19年)4月17日 操縦教員として筑波航空隊に転属。
- 1944年(昭和19年)8月 三沢基地に転進。
- 1944年(昭和19年)11月15日 七二一海軍航空隊三〇六飛行隊附。神ノ池、海軍神雷部隊に配属。
- 1945年(昭和20年)2月1日 七二一海軍航空隊三〇七飛行隊附。
- 1945年(昭和20年)3月18日 富高基地で邀撃戦に参加。
- 1945年(昭和20年)3月21日 第一神風桜花特別攻撃隊神雷部隊の直掩機として参加。被弾により不時着。
- 1945年(昭和20年)3月26日 二〇三海軍航空隊三一二飛行隊附。笠之原基地へ。
- 1945年(昭和20年)6月27日 基地移動により、築城基地に転進。
- 1945年(昭和20年)8月15日 終戦。



館林陸軍飛行場における筆者  
(昭和20年8月)

大東亜戦争沖繩戦も悲惨な結末となり、いよいよ本土決戦が差し迫った状況下において、戦勢挽回の切り札である「館林集成教育隊」の我々にも、決戦への緊張の高まりがひしひしと感ぜられるようになっていた。昭和20年8月上旬、一八一檜隊、一八二井本隊、一八五増田隊、一八六落合隊は、九州転進の命を受けて士気旺盛、その準備を行っていた。

格納庫にも、長距離・長時間飛行のため、増槽が多数運び込まれてきた。整備員の話によると、そのうち幾つかには「水」が詰められ、爆装訓練用の模擬弾として準備されているということであった(当時一八二、一八四振武

### 陸軍四式戦闘機(疾風) 模擬爆装飛行体験について

第一八八振武隊  
陸士57期 藤井 常男

隊は都城に在った)。なるほど、増槽の容量は約200ℓ、満タンにすれば1個200kgよりかなり重い。250kg爆弾の代わりになるなあと、私自身は納得していた。

そんなある日、整備隊より、明早朝整備が終了する四式戦闘機の試験飛行の依頼があった。快諾すると共に正に千載一遇の機会とばかり「水詰増槽」の装着を依頼すると、「了解」との返事があった。翌早朝、朝露を踏んで飛行場に入れば、目的の機は既に格納庫の前に引き出され、増槽2個を懸架して轟々とエンジンの地上運転中である。飛行場には整備員四、五名と飛行



四式戦闘上の筆者(成増陸軍飛行場において・昭和20年5月)

機、それに私だけ、ほかに誰もいない。「地上運転異常なし」の報告を受けて搭乗する。レバー(注①)を操作してエンジンの回転、点火栓スイッチの左右切換(注②)等も確認して地上滑走に移る。やや重い程度だが、問題なし。飛行場の端まで移動して出発線に着く。出発点検も慎重に行い、離陸滑走を始める。2900回転、ブースト④250までレバーを押す。速度150km/時を超しても浮き揚がりの気配もない。間もなく飛行場の端になる。「揚がれ！揚がれ！」と心で念ずる。「浮いた！」気が付けば、ブースト計(注③)は④340を指し、レバーは一杯に押されている。

脚を入れて回転数2600RPM、ブースト④100まで戻して第一旋回、操縦桿(注④)は非常に重い。「踏み棒」(注⑤)は少し重い程度だが、左ほどではない。高度300m、第二旋回を終わって、そのまま上昇旋回を続行する。高度4000mに達して水平飛行に移る。回転数2000、ブースト①150、速度300km/時にして空中操作。

左右15度旋回を試みる。操縦桿を始めから終わりまで、相当の力で引っぱらなければならぬし、旋回中も機首が下がってしまう。旋回切換では踏み

棒も力を入れて踏み込んだようである。平常では指先だけでも操作可能の操縦桿も、爆装すればこんなにも重くなるのかなあ、十分な注意が必要だと思う。

次は急旋回。回転数、ブーストをそのままにして、30度位だろうかと、速度が急激に落ち、機首が下がったので、水平に戻す。回転数2600、ブースト④100、速度350km/時にして40度付近での旋回を試みる。操縦桿は力一杯引っぱり、踏み棒も力を入れて踏み込んで一周、反対側も一周して急旋回を終わりとした。

次に最大水平速度はどうかと、回転数2900、ブースト④250まで、レバーを押して速度計を見る。380km/時あたりから機は浮き上がり(注⑥)気味、高度計は4100mにもなっている。操縦桿の押さえに力が必要なので、タブ(注⑦)を調整して対応する。速度はそれ以上にはなかなか上がってくれない(標準では、計器速度450km/時、実質速度560km/時)。思い切ってブースト④300以上までレバーを押し、ぎりぎり400km/時にして「速度試験」を終えた。最終速度計の記憶は曖昧だが、意外と速度が上がらなかったようである。最後は急降下だ。気を落ち着かせる

ため、水平旋回を左右一回ずつ行う。目標を「飛行格納庫」とし、浮き上がり調整用の仮目標として、距離は不明だが、相当手前の「こんもりした林」(堀山久生氏「陸士57期、一九四振武隊長」注・東武鉄道・小泉線・成島駅近くの飛行場北の林では?)とした。高度4000m、速度300km/時、水平飛行で外角45度、仮目標に接近進入する。仮目標が翼の付け根に隠れるのを待って、旋回して急降下に入る。回転数2900、ブースト④250まで上げて操縦桿を押さえ込む。降下角度は30度程度だったようである。速度が急激に上昇し、機が浮き上がってくる。ともすれば仮目標は機の下に隠れるようになる。操縦桿を力一杯押さえたが、力負けして押さえ切れず、仮目標は機の下になってしまった。降下角度は45度を超えて50度以上にもなっているだろうか？兎に角、垂直降下のように感じた。速度計の針は450km/時以上、更に上昇気味である。怖くなって途中で中止、操縦桿を緩めたので、本目標の格納庫の遙か上空を無為に通過してしまった。この時の速度と高度の確認は、残念ながら出来ていない。

この体験で、浮き上がり調整用仮目標の設定、降下開始で降下角度の深過ぎないこと、降下中の目標確保、それ

らの関連を考えて操縦することの重要性を痛感した。絶対に負けてはならない。力で勝つ、飛行機に勝つ、己に勝つことである。

着陸のため、場周経路(注⑧)に入った。第三旋回から第四旋回まで、通常通りの操作で着陸降下に入る。レバーを絞ると、「沈み」が大きくなったので、レバーを残しながら降下、「返し始め」(注⑨)でもレバーは未だ可なり残っている。機の安定を保ちながら着地点に向かう。軽くストンという感じで着地した。それ以外の記憶は殆どないが、着陸滑走の距離は短かったように思う。無事試験飛行を終え、飛行状態、操縦性、機関の調子など整備員に報告して引き渡した。

以上は記憶にあるままであるが、65年前のことであり、諸元等に多くの誤りがあってもお許し願いたい。体感については、今でも生々しく思い出されてくる次第である。

平成16年だったか？明野忠魂塔慰霊祭に参列した折、同じく参列されていた第一八一振武隊長檜 壹大尉殿(陸士55期・機甲転科・明野)に、爆装訓練の有無をお尋ねしたところ、「危険が伴うので取り止めになった」とのご返事。しかし、格納庫内の水詰増槽はご存じであった。結局、館林では誰も

この体験はしていない。「模擬」とはいえ、爆装飛行の体験者は、館林では「私一人」らしい。

お祈り申し上げます。(平成22年10月記、平成24年2月修正加筆)

注⑥「機の浮き上がり」・操縦桿を一定にした場合、速度が上がれば高度が上がります、低下すれば高度は下がる。

飛行、返し始め、着陸、着陸滑走となる。

戦後になって、知覧、万世、都城などで行われている特攻隊慰霊祭に参加して、生き残りの隊員や整備員、又は特攻隊に関わった方々から当時の出撃基地の模様などを知るにつけ、出撃に際し、離陸出来ず前方の丘に激突する事故が幾つかあったとのことである。

注①「レバー」・エンジンの出力を制御するためのもので、手で操作する(自動車のアクセルに当たる)。前へ押せば出力が増し、手前に引けば減少する。

注⑦「タブ」・昇降舵に取り付けられた補助小翼のことで、これを調整して操縦操作が安定的に行えるようにする。

注⑨「返し始め」・第四旋回から着陸降下の終わり頃、機首を上げ、着陸姿勢に移るための初動操作を言う。一般には、レバーは殆ど絞りに切った状態に近くなっている。

機は別として「初めての爆装による操縦失敗」も原因の一つと聞いては、誠に残念である。また、出撃しても途中で敵戦闘機の餌食になった機が多数あったと聞いている。これらは爆装を抱えての速度不足や操縦性の劣悪によって、回避又は射弾回避が出来なかったのが最大の原因であろう。

注②「点火栓スイッチの左右切換」・エンジン18気筒には、それぞれ点火栓が2個ずつ装着されており、点火機能を果たしている。この点火栓を1個ずつに切り換えてエンジンの回転数の変化を確認すること。四式戦闘機では、1900RPMにおいて、左右それぞれ点火栓を1個とした場合、回転数低下を50RPM以下とする。

注⑧「場周経路」・飛行場における通常の離着陸経路のことで、これに沿って飛行することを場周飛行という。滑走路に対し、左旋回、右旋回経路がある。私達一般には、離陸して高度150m程度となれば左又は右に上昇しながら90度旋回(第一旋回)する。上昇を続け、高度300mになれば飛行場を内側に90度水平旋回(第二旋回)する。そのまま水平飛行して、飛行場を内側に見て着陸のため、脚を出し、フラップを一部出して尾輪を固定する。飛行場を斜め後方に見て120度水平旋回(第三旋回)する。フラップを再調整し、レバーを絞り、高度、速度を調整しながら降下飛行、滑走路正面に向かって60度の降下旋回(第四旋回)する。以降レバーを更に絞り、姿勢、速度を調整しながら降下着陸

当時、特攻を送り出した基地の上層部、これらを指導した参謀の中で、一人でも「敵戦闘機に襲われた場合、爆弾を捨て、身軽になって回避するか射弾回避して次の出撃に備えよ。命を大切にしろ」と指導、指示した者がいたろうか。本体験からすれば、このように指導すべきであったと思う。当時の私自身でも、爆弾を捨てて逃げる発想は全くなかった。残念である。非常に残念である。戦没特攻勇士のご冥福を

注③「ブースト計」・気筒に送り込む空気を測定する計器のこと。本機のエンジンには、過給器(ブースター)により燃焼空気が送り込まれている。ブースト0では送空気圧は、1気圧相当、④250での送空気圧は、1気圧⑤250mm/Hg相当の押込み圧力となっている。

注④「操縦桿」・飛行機の補助翼、昇降舵を操作して、姿勢、上昇、下降を司る棒。

注⑤「踏み棒」・方向舵を操作する足踏み棒。

### 新刊図書紹介

○大野俊康著 『特攻魂のままに』

—元靖國神社宮司 大野俊康講演集—



本書は、平成4年4月から同9年5月まで靖國神社宮司(第7代)を務められた大野俊康氏の在任中の講演録を中心にして、同講演集刊行会が取り纏めたものである。大野元宮司は、大正11年5月20日熊本県天草島の生まれ、昭和23年九州大学文学部卒、終戦直後から郷里天草の本渡諏訪神社宮司を45

本書は、平成4年4月から同9年5月まで靖國神社宮司(第7代)を務められた大野俊康氏の在任中の講演録を中心にして、同講演集刊行会が取り纏めたものである。大野元宮司は、大正11年5月20日熊本県天草島の生まれ、昭和23年九州大学文学部卒、終戦直後から郷里天草の本渡諏訪神社宮司を45

本書は、平成4年4月から同9年5月まで靖國神社宮司(第7代)を務められた大野俊康氏の在任中の講演録を中心にして、同講演集刊行会が取り纏めたものである。大野元宮司は、大正11年5月20日熊本県天草島の生まれ、昭和23年九州大学文学部卒、終戦直後から郷里天草の本渡諏訪神社宮司を45

年の長きにわたって務められた後、靖國神社宮司に就任された。当顕彰会とは縁の深い方で、靖國神社遊就館前の「特攻勇士之像」建立に際しては大変ご尽力を頂いた。ご自身が、昭和18年12月、神宮皇學館大学祭祀専攻科在学中に学徒出陣され、特別操縦見習士官(3期)となり、熊谷陸軍飛行学校卒業後陸軍少尉、台湾で終戦を迎えられた。

本書に収録されている数々の講演は、自らの体験を基に、特攻魂とは何か、日本人の心とは何か、後世に語り継ぎたい「靖國の英霊の心」とは何かを、数々の感動的な秘話を交えて語られたものであり、誠に崇高な、胸を打つ内容に満ちている。取り分け、特攻勇士の生きながらにして神となった崇高な精神を受け継ぎ、今こそ、日本人の心を取り戻し、伝統ある祖国の再生と繁栄のために努力しなければならぬことを、氣迫を込めて訴えておられる。必読の書である。

A5判 200頁  
 定価 本体1500円  
 発行 展転社〒113-0033  
 文京区本郷1-28-36-301  
 TEL 03-3815-0721  
 FAX 03-3815-0786

## 平成24年度第1回定時理事会、定時評議員会等報告

事務局長 羽瀧 徹也

### 一 平成24年度第1回定時理事会、評議員会の開催

平成24年3月6日(火)(公財)借  
 行社・会議室において、平成24年度の第1回定時理事会及び定時評議員会が開催され、提出された議案については全て、原案どおり承認されました。

#### 1 議案

- ア 平成23年度事業報告(別掲)
- イ 平成23年度収支結果(別掲)
- ウ 監事による平成23年度監査報告
- エ 事務所移転に伴う定款変更
- 2 出席者
  - ア 理事会 理事8名中7名、及び監事2名
  - イ 評議員会 評議員17名中15名

### 二 第33回特攻隊合同慰霊祭の実施について

3月24日(土)、靖國神社において実施いたしました第33回特攻隊合同慰霊祭には、冷雨の残る悪天候にも拘わらず、220余名の多くの皆様に参加していただき、誠に有り難く、深く感謝申し上げます。

### 三 事務所の移転について

前号の会報「特攻」第90号でお知らせいたしましたのが、当会の事務所は、4月1日に靖國神社遊就館内地階に移転しました。今までと同様、(公財)大東亜戦争全戦没者慰霊団体協議会の事務所との共用です。

なお、事務所に来所される方は、遊

就館の入館受付に来所の旨をお申し出くださいれば、事務局の者がお迎えに参ります(入館者名の登録と入館証の受領が必要です)。靖國神社にお参りの際は、事務局員を4月1日付けで採用いたしました。

## 平成23年度事業報告

### 一 慰霊事業

- 1 第32回陸海軍特攻隊合同慰霊祭等  
 未曾有の東日本大震災発生直後の3月26日であったが、理事長の判断により予定どおり靖國神社における合同慰霊祭を肅行した。地震の影響もあって例年より参列者は少なかったものの、来賓24名、遺族28名、会員等158名、総数210名であった。しかし例年、慰霊祭終了後実施していた懇親会は中止とした。

### 2 第60回特攻平和観音年次法要

例年どおり秋分の日(9月23日)、世田谷山観音寺において、同寺と地元駒繁神社との神仏習合による年次法要が営まれた。当顕彰会としては、主要な一大事業であり、同寺が主催する年次法要に全面的な協力を行った。昨年の豪雨と異なり、素晴らしい秋晴れの天候に恵まれ、年次法要への参加者は、昨年より若干多く、来賓28名、遺族35名、会員等224名、総数287名であった。

### 3 各地慰霊祭への参列等

ア 代表者派遣

際にはお立ち寄りください。

・住所 〒102-0007 3  
 東京都千代田区九段北3-1-1  
 靖國神社遊就館内・地階  
 ・電話 03-5213-4594  
 ・FAX 03-5213-4596

### 四 事務局員の採用

昨年10月末で退職した大澤 清事務局長の後任として、海上自衛隊出身の金子敬志事務局員を4月1日付けで採用いたしました。



(実施月日) (慰霊祭等名) (場 所) (参列者)

4月4日 予科練雄飛会 靖國神社 藤田専務理事  
小倉評議員

4月6日 都城特攻隊 都城市 笹理事

4月7日 海上特攻第二艦隊 枕崎市 藤田専務理事

4月9日 鹿屋特攻隊 南さつま市 藤田専務理事

4月16日 出水特攻碑 出水市 小倉評議員

4月22日 春季例大祭 靖國神社 栗原業務理事

4月24日 万世特攻隊 南さつま市 藤田専務理事

5月3日 知覧特攻隊 知覧町 飯田評議員

5月8日 特攻殉国碑 川棚町 藤田専務理事

7月4日 全慰協合同 靖國神社 杉山理事長

9月14日 市ヶ谷台慰霊祭 市ヶ谷駐屯地 杉山理事長

10月15日 申良基地出撃 鹿屋市 杉山理事長

10月25日 神風特攻隊 フィリピン・マバラカット市 杉山理事長  
及川評議員

11月13日 回天顕彰会 周南市 石井評議員

11月13日 若潮会慰霊祭 靖國神社 藤田専務理事

イ 供花送達等 (場 所)

(実施月日) (慰霊祭等名) 宮崎特攻基地慰霊祭 宮崎県宮崎市

4月3日 徳之島慰霊祭 鹿児島県徳之島町

4月7日 黒島特攻平和祈年祭 鹿児島県三島村

5月7日 義烈空挺隊慰霊祭 沖縄県摩文仁の丘

8月20日 明野忠魂塔慰霊祭 三重県伊勢市明野駐屯地

9月30日 原町飛行場戦没者慰霊祭 福島県南相馬市原町区

ウ 特攻勇士之像奉納除幕式 (参列者)

(実施月日) (奉納場所) 千葉県護國神社 杉山理事長、藤田専務理事  
飯田評議員、羽瀨事務局長

二 「攻勇士之像」 建立事業

本年度の「特攻勇士之像」建立事業は、前記の千葉県護國神社に奉納した1体の建立に止まった。今回の建立で、世田谷山観音寺への建立奉納分を含めて総計10体となった。

来年度以降については、京都霊山護國神社及び埼玉県護國神社への建立奉納の具体的計画が進んでおり、福岡県護國神社及び大分県護國神社への建立奉納についても検討中である。

三 その他の事業

1 広報事業として機関誌・会報『特攻』第86号、第89号を発行し、会員、協力団体及び希望者等に頒布した。また、ホームページ上で会報『特攻』の最新号が閲覧、出力可能となっている。また、情報公開の観点から、事業計画及び財務資料等を公開している。

2 出版事業では、平成20年度に刊行した『特別攻撃隊全史』の補正及び誤謬修正を行うため、『特別攻撃隊全史 追補版』を発行し、全史の既購入者に配布した。また、CD『あ、特攻』第2弾及びその他保有している若干の在庫刊行物を継続頒布した。

四 会員の動向

会員及び旧軍関係者等の高齢化により、今後とも急激な会員減少が予想される。平成23年度における当会の新規入会者は121名であり、死亡等による退会者が292名であったため、会員数は差し引き171名の減となり、平成23年度末における会員数は、2670名となった。

会勢拡充事業として、前年度に引き続き、会員各自による入会促進努力、及びホームページ等による加入促進等を実施しているが、効果的な成果が現れていないのが現状である。これらの実情に鑑み、当顕彰会に設置された企画、募集、広報各委員会でも来年度に向けて具体的な実行策等を検討した。

五 公益法人移行認定

公益法人制度の施行に伴い、内閣総理大臣の移行認定を受け、平成23年1月4日から名称も「公益財団法人特攻隊慰霊顕彰会」として新たに再出発することとなった。また、公益財団法人として専門委員会の設置など必要な執行態勢の見直しを行った。

## 平成23年度収支計算書

平成23年1月4日から平成23年12月31日まで

(単位：円)

| 科 目        | 当年度        | 前年度        | 差 異         | 備 考     |
|------------|------------|------------|-------------|---------|
| I 事業活動収支の部 |            |            |             |         |
| 1 事業活動収入   |            |            |             |         |
| ① 基本財産利息収入 | 6,831,214  | 7,459,063  | △ 627,849   | 為替変動    |
| ② 特定資産利息収入 | 80,078     | 92,400     | △ 12,322    |         |
| ③ 会費収入     |            |            |             |         |
| 年会費収入      | 5,923,000  | 6,362,080  | △ 439,080   | 会員数減少   |
| ④ 事業収入     |            |            |             |         |
| 慰霊事業収入     | 3,504,000  | 4,106,000  | △ 602,000   | 参列者減    |
| 出版事業収入     | 419,180    | 447,430    | △ 28,250    |         |
| ⑤ 寄付金収入    | 2,742,000  | 2,465,500  | 276,500     |         |
| ⑥ 雑収入      | 0          | 0          | 0           |         |
| 事業活動収入計    | 19,499,472 | 20,932,473 | △ 1,433,001 |         |
| 2 事業活動支出   |            |            |             |         |
| ① 事業費支出    |            |            |             |         |
| 慰霊祭懇親会費    | 672,000    | 1,038,282  | △ 366,282   | 懇親会中止   |
| 特攻像奉納費     | 599,750    | 599,750    | 0           | 像建立1体のみ |
| 広報誌発送等委託費  | 1,531,541  | 1,546,697  | △ 15,156    |         |
| 他団体寄付金     | 2,534,000  | 2,700,000  | △ 166,000   |         |
| 役員報酬       | 280,000    | 0          | 280,000     |         |
| 給料手当       | 3,626,850  | 4,009,288  | △ 382,438   | 事務局員退職  |
| 退職手当       | 455,000    | 0          | 455,000     | 事務局員退職  |
| 福利厚生費      | 560,634    | 564,065    | △ 3,431     |         |
| 旅費交通費      | 1,891,300  | 1,806,380  | 84,920      |         |
| 通信運搬費      | 437,196    | 477,717    | △ 40,521    |         |
| 消耗品費       | 153,738    | 317,681    | △ 163,943   |         |
| 印刷製本費      | 3,140,982  | 2,440,280  | 700,702     | 補正版、CD分 |
| 会議費        | 191,812    | 205,400    | △ 13,588    |         |
| 光熱水料費      | 85,452     | 85,468     | △ 16        |         |
| 賃借料        | 1,226,136  | 1,514,372  | △ 288,236   | 事務所移転   |
| 諸謝金        | 70,000     | 250,000    | △ 180,000   |         |
| 租税公課       | 52,500     | 70,000     | △ 17,500    |         |
| 事業活動支出計    | 17,508,891 | 17,625,380 | △ 116,489   |         |
| 事業活動収支差額   | 1,990,581  | 3,307,093  | △ 1,316,512 |         |

# 事務局からの報告等

## 寄附者御芳名(敬称略)

(平成24年1月1日～3月31日)

(単位千円)

|      |        |    |       |   |       |   |        |   |         |
|------|--------|----|-------|---|-------|---|--------|---|---------|
| 一〇〇〇 | 多田野 弘  | 七  | 丸井 容子 | 六 | 菊池 孝  | 二 | 一 歙田 勉 | 二 | 井出野正和   |
| 三〇   | 松本 聖二  | 二四 | 嶋本 久代 | 五 | 黒島宇吉郎 | 二 | 伊藤 隆啓  | 二 | 井上 勝蔵   |
| 一七   | 杉本 良員  | 一四 | 尼子 和世 | 五 | 坂下 邦弘 | 二 | 今井 正己  | 二 | 布廣 鉄夫   |
| 一〇   | 岩月 仁志  | 一〇 | 大穂 利武 | 五 | 谷垣 尚  | 二 | 上谷 昭夫  | 二 | 信平 勝雄   |
| 一〇   | 折下 寛法  | 一〇 | 柿崎 祐治 | 五 | 百日鬼 清 | 二 | 畝田謹次郎  | 二 | 服部 武志   |
| 一〇   | 加藤 拓   | 一〇 | 菊池 国光 | 五 | 永野 博一 | 二 | 大塚 喜衛  | 二 | 原 照寿    |
| 一〇   | 久保 魏   | 一〇 | 菅原 道之 | 五 | 西村 芳行 | 二 | 小沼 愛   | 二 | 樋口 太    |
| 一〇   | 田辺さだ子  | 一〇 | 常井 功子 | 五 | 林 佐吉  | 二 | 尾関 基   | 二 | 平田美都男   |
| 一〇   | 中村光太郎  | 一〇 | 原島 淳子 | 五 | 藤井 日正 | 二 | 小畑 威   | 二 | 金子 亘秀   |
| 一〇   | 降矢 達男  | 一〇 | 松井 敬子 | 五 | 松中 義昭 | 二 | 櫻村 保貞  | 二 | 川井 幸雄   |
| 一〇   | 松田陽一郎  | 一〇 | 松本 司  | 五 | 横瀬 富一 | 二 | 小畑 正敏  | 二 | 金子 亘秀   |
| 一〇   | 矢吹 朗   | 一〇 | 山田 治男 | 四 | 小川昭二郎 | 二 | 久留内 昇  | 二 | 栗田 孝二   |
| 九    | 日比野臣三郎 | 九  | 上村 貞蔵 | 四 | 下出 忍  | 二 | 呉 正男   | 二 | 河野 三郎   |
| 八    | 高橋 圭子  | 八  | 山田 昭  | 四 | 新垣 敬輝 | 二 | 近藤 一馬  | 二 | 桑原アヤ子   |
| 八    | 渡部 利久  | 七  | 飯田 雍子 | 三 | 赤羽 潤  | 二 | 澤田江里子  | 二 | 丸橋 安夫   |
| 七    | 市来 徹夫  | 七  | 市村 俊夫 | 三 | 工藤 重民 | 二 | 近藤 義郎  | 二 | 水野 清    |
| 七    | 大谷 安信  | 七  | 岡崎 幸平 | 三 | 鈴木 昭  | 二 | 澤田江里子  | 二 | 丸橋 安夫   |
| 七    | 岡本 巖   | 七  | 笠松 澄子 | 三 | 中村 竹雄 | 二 | 須田 里吉  | 二 | 安済美智二   |
| 七    | 川人 盛幸  | 七  | 小林 郁雄 | 三 | 古屋 七郎 | 二 | 須田 里吉  | 二 | 安済美智二   |
| 七    | 下森 康玄  | 七  | 高田 定司 | 三 | 宮本 了吾 | 二 | 高嶋 博視  | 二 | 矢野 孝男   |
| 七    | 滝澤 昭二  | 七  | 武谷 孝生 | 三 | 矢島 孝雄 | 二 | 谷 功    | 二 | 山口 武夫   |
| 七    | 中江 仁   | 七  | 永島外太郎 | 三 | 渡辺 悦次 | 二 | 谷 功    | 二 | 陸士57期生会 |
| 七    | 中島 尚史  | 七  | 中山 耕平 | 二 | 新 忠信  | 二 | 田村 菊平  | 二 | 青木 義博   |
| 七    | 西本千代子  | 七  | 羽木さおり | 二 | 新井 郁男 | 二 | 津霸 実雄  | 二 | 岩崎 昭男   |
| 七    | 早田 亮彦  | 七  | 舟澤 辰義 | 二 | 石本登志夫 | 二 | 富安 秀雄  | 二 | 大林 喜一   |

御芳志誠に有り難うございました。  
 ◇ ヨシコ モリト  
 ◇  
 ◇

新入会員名簿(敬称略)

(平成24年1月1日～3月31日)

|      |       |       |                 |                 |
|------|-------|-------|-----------------|-----------------|
| 茨城県  | 常井 功子 | 野村 勉  | 千葉県             | 杉本 律夫(24・1・12)  |
| 栃木県  | 海老沼静香 |       | 中島 久光(24・1・1)   |                 |
| 群馬県  | 齊藤 正毅 | 長沼 秀直 | 板倉 義利(24・1・26)  |                 |
|      | 池田 伸一 | 茂木右源太 | 田村 菊平(22・10・8)  |                 |
|      | 根岸 久雄 |       | 長谷川 清(23・11・17) |                 |
| 埼玉県  | 吉川千代子 | 石田 賢一 | 池上 徹(23・11・23)  |                 |
|      | 浦東 聖野 | 後藤 賢治 | 山本 卓真(24・1・17)  |                 |
| 千葉県  | 金子 敬志 | 織田 祐輔 | 石山 正信(24・2・8)   |                 |
|      | 森山 敏明 | 利涉 弘章 | 安藤 満(24・2・18)   |                 |
|      | 松本 浩一 |       | 中山 耕平           |                 |
| 東京都  | 小林 郁雄 | 水野 伸子 | 神奈川県            | 中川 一            |
|      | 関口 信吾 | 高橋 鶴子 | 大府府             | 鈴木 淳夫(24・1・15)  |
|      | 小林 節男 |       | 岡山県             | 岡田 喬            |
| 神奈川県 | 白井 良治 | 萱場 浩之 | 広島県             | 赤木 昭(23・8・21)   |
| 新潟県  | 鈴木 公商 |       | 山口県             | 中川 翼(23・9・16)   |
| 静岡県  | 新庄あゆみ |       | 高知県             | 岡田 博忠(23・11・28) |
| 大阪府  | 永田 弘  | 角田 洋三 | 鹿児島県            | 市川 昇(23・6・16)   |
| 熊本県  | 酒匂 一仁 |       |                 | 永田 博            |
| 宮崎県  | 児玉 芳雄 | 馬籠 徹朗 |                 |                 |
|      | 永井 信行 |       |                 |                 |

◆ 会員訃報(敬称略) ◆

謹んで哀悼の意を捧げます。

|     |                 |
|-----|-----------------|
| 北海道 | 飯田 尚久(23・8・31)  |
| 福島県 | 坂下 照夫(23・10・9)  |
| 茨城県 | 土屋 健吾(22・11・11) |
|     | 常井成一朗(23・3・13)  |
| 埼玉県 | 小泉 大成(23・6・30)  |

**会報「特攻」第90号正誤表**

次のとおり誤りがありましたので、謹んで訂正し、お詫び申し上げます。

(訂正箇所)

48頁2段11行目(会員訃報欄)  
誤「福島県 門馬秀行(22・8・3)」  
正「削除」

会員ご入会のご案内

当顕彰会は、先の大戦において、祖国の安泰を願ひ、家族や大切な人たちを案じつつ、自らの命を犠牲にして、それらを護ろうとした若い特攻隊員たちの御霊を慰霊し、感謝することを目的とする団体であります。

私達は、彼らからその精神を学び、自分たちの生き方を考え、より良い社会の実現に寄与したいと活動を続けております。ご賛同の上、ご入会くださるようお願い申し上げます。

○当顕彰会の沿革

昭和34年5月前身の特攻平和観音奉賛会が全国組織化  
昭和57年6月特攻隊慰霊顕彰会発足

初代会長 竹田 恒徳 元宮様  
二代会長 瀬島 龍三 氏  
平成5年11月財団法人認可  
三代会長 山本 卓真 氏  
平成23年1月公益財団法人認定  
現理事長 杉山 蕃氏

○当顕彰会の主な事業

- ・特攻隊戦没者の慰霊顕彰
- ・広報誌等の発行
- ・講演会等の開催その他

○年会費

- ・一般会員 3000円
- ・学生会員 1000円

〒102-0073

東京都千代田区九段北3-1-1  
靖国神社遊就館内 公益財団法人  
特攻隊戦没者慰霊顕彰会事務局  
電話 03-5213-4594  
FAX 03-5213-4596

ご投稿についてのおお願い

ご投稿に際しましては、次の点にご留意くださるようお願いいたします。

- 1 原稿は、手書き、ワープロ・パソコン作成のいずれでも結構ですが、なるべく縦書き、1段17字詰めをお願いします。
- 2 記事の取捨選択、紙面の都合等による一部割愛、修文等については、当会事務局にお任せ願います。
- 3 慰霊祭、行事等の写真がありましたら、なるべく添付してください。
- 4 原稿、写真等は、原則としてお返しいたしません、必要の場合、その旨お書き添えください。
- 5 会報・機関誌、投稿記事等の送付先は、左記の当顕彰会事務局宛とさせていただきます。

記

〒102-0073

東京都千代田区九段北3-1-1  
靖国神社遊就館内 公益財団法人  
特攻隊戦没者慰霊顕彰会事務局  
電話 03-5213-4594  
FAX 03-5213-4596